宮城県文化財調査報告書第 85 集

青　木　畑　遺　跡

昭和 57 年 3 月

宮　城　県　教　育　委　員　会

序

私達の生活している宮城県内には、先人がのこした数多くの遺跡があります。これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育くんできたものであり、これを愛護し、活用するとともに後世に伝えていくことは現代の私達に課せられた重要な責任であると考えます。

近年、地域の開発の事業が進展することに伴ない、埋蔵文化財の保護が一層重要視されてきているのもその線に沿ったものであります。

本報告書は、県教委がこれまで発掘調査を実施した遺跡のうち、年次計画に従って整理した「青木畑遺跡」について、その成果をとりまとめたものであります。

ここに、本書を刊行するに当たりまして、関係された方々の御協力に深甚なる敬意を表しますとともに、遺跡に対する御理解の一助となり、さらに学術上にも大きく役立つことを切に願ってやまない次第であります。

昭和57年3月

宮城県教育委員会　教育長　北村　　潮

例　　言

1. 本書は宮城県教育委員会が担当して調査を行った青木畑遺跡の調査報告を集録したものである。
2. 本書に掲載した遺物のうち、調査以前の採集遺物は、三塚信一氏、佐藤信行氏の所蔵されているものである。遺物を借用させていただいた両氏に感謝を申し上げ、また昨年故人となられた三塚氏に哀悼の意を表したい。
3. 報告をまとめるに際し、次の方々および機関から多くの御指導、助言等をいただいた。
   (順不同・職名は現在)
   須藤　　隆氏(東北大学助教授)
   藤沼　邦彦氏(東北歴史資料館考古研究科長)
   佐藤　信行氏(日本考古学協会員)
   小田野鉄軒氏(岩手県立博物館)
   白鳥　良一氏(宮城県多賀城跡調査研究所研究員)
   佐藤　庄一氏（山形県文化課埋蔵文化財係庄内教育事務所埋蔵文化財調査室係長）
   岡村　道雄氏(東北歴史資料館考古研究科技師)
   黒川　利司氏(宮城県第三女子高等学校教諭)
   阿部　正光氏(瀬峯町教育委員会)
   東北大学文学部考古学研究室
   岩手県立博物館
   一ノ関市教育委員会
   一迫町教育委員会
   東北歴史資料館
4. 本書に掲載した「青木畑遺跡」第1図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「岩ヶ崎」を使用して複製したものである。
5. 発掘調査から現在まで、ほぼ10年の月日が経過しており、本文の第Ⅱ章と第Ⅲ章の発掘に関する事実は当時作製された実測図と日誌に従って記述した。なお石器類は10年の間に紛失しており、実測図として現存しているものを使用したので、石器の全容を示すものではない。
6. 報告書の執筆は、発掘調査員および現宮城県教育序文化財保護課員の協議を得て、加藤道男が担当した。

調査要項

遺跡所在地：宮城県栗原郡一迫町字嶋体竹の内
調査主体：宮城県教育委員会　宮城県(耕地課)　一迫町教育委員会
調査担当者：宮城県教育序文化財保護室
　　志間　泰治　　白鳥　良一　佐藤庄一
調査期日：昭和47年3月1日～3月15日
発掘面積：約612㎡
調査員：須藤　　隆(現東北大学助教授)
　　岡村　道男(現東北歴史資料館技師)
　　安田　嘉憲(現広島大学総合科学部助手)
　　高橋　守克(現塩釜第一小学校教諭)
　　三塚　信一(当時一迫町文化財保護委員)
　　佐藤　信行(日本考古学協会員)

目　次

Ⅰ　位置と環境 1

Ⅱ　調査の経過 3

Ⅲ　調査の成果 5

1. 縄文時代の遺物包含層 5

2. 第Ⅲ層出土遺物 12

3. 弥生式時代の遺物包含層 13

4. 表土･層位不明の遺物 29

Ⅳ　考　　察 37

1. 縄文土器について 37

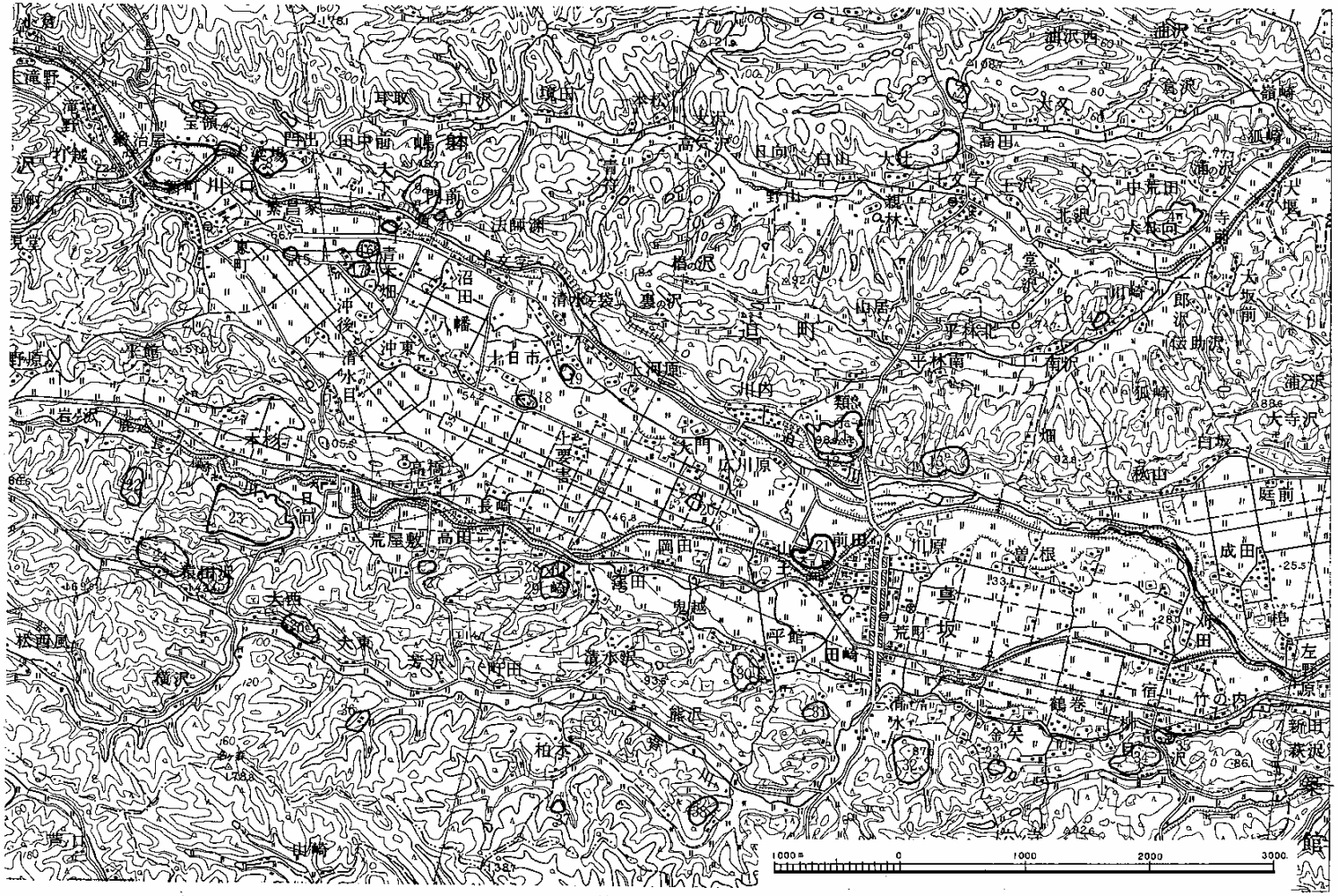
2. 弥生土器について 40

3. 石器の時代 57

4. 土偶の時代 57

Ⅴ　調査以前の採集遺物 59

Ⅵ　ま　と　め 63



第１図　遺跡の位置

Ⅰ　位置と環境

青木畑遺跡は宮城県栗原郡一迫町字嶋体竹の内に所在し、同町役場の西方約4.5kmにあたる。

遺跡の所在する一迫町は宮城県の北西部にあり、西に奥羽山地が走り、北には標高1628mの栗駒山を望む。奥羽山地から派生した築館丘陵は分岐して町内では標高がほぼ150mで北部、南部をそれぞれ東に向かって高度を減じながらのびる。町中央部には奥羽山地に源を発する一迫川と長崎川などの支流が東流しそれらによって形成された迫耕土と俗称される沖積平野が東西に細長く広がっている。この沖積平野内には各所に自然堤防と後背湿地がみとめられる。

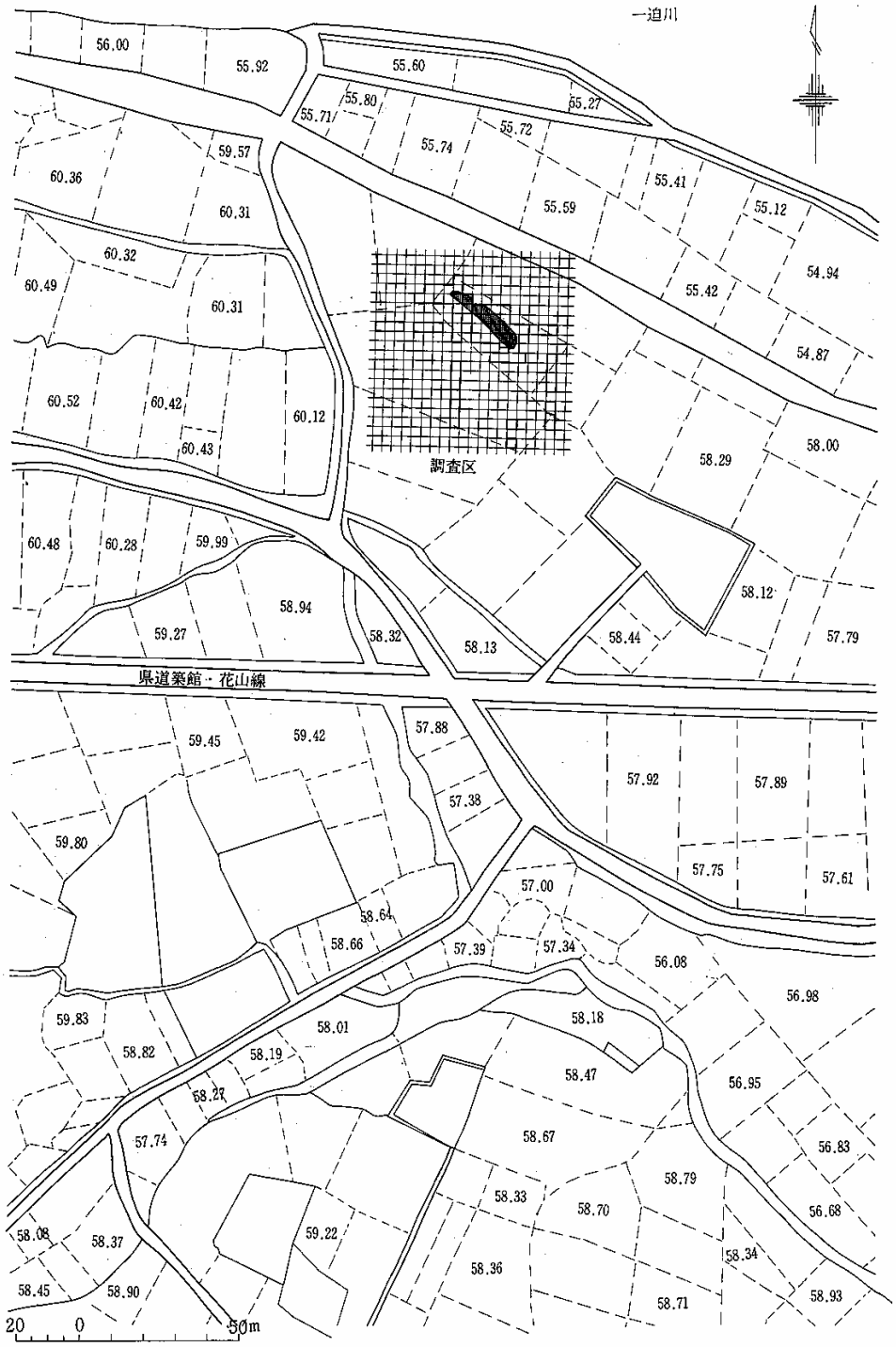
青木畑遺跡はこの沖積平野西端部の自然堤防上に立地している。遺跡周辺では自然堤防が東西にのび、その北はゆるやかに低くなり、約100mで一迫川に達する。南には後背地が広がって、自然堤防との比高は約2mである。周囲には水田地帯がみわたせる。遺跡内の標高は約60m、北の一迫川は遺跡近くで約45mの標高を計る。

一迫町内には現在55ケ所の遺跡が発見、登録されている(宮城県教委:1981)。旧石器時代の遺跡はまだ確認されていないが、縄文時代から弥生・古墳・平安時代、中世にいたる各時代の遺跡がみとめられる。このうち、縄文時代晩期の遺物を出土する遺跡は比較的数が多く、巻堀、山王遺跡をはじめとして17遺跡が知られ、自然堤防上、丘陵裾部に立地するものが圧倒的に多く、両者はほぼ同数である。また弥生時代に属するものが9遺跡あり、立地条件は縄文時代晩期の場合と同様な傾向を示す。なお、青木畑遺跡と県道を隔てた南側に反町遺跡があるが、これらは本来同一の遺跡であると思われる。

これらのなかで、発掘調査が実施されて遺跡の内容が明らかにされたものは、山王遺跡、巻堀遺跡、そして上の原遺跡である。山王遺跡は昭和37年から40年にかけて数度の発掘調査が実施され縄文時代晩期後半から弥生時代初めにかけての遺物が多量に出土し、また泥炭層から藍胎漆器、編布などが発見され、国史跡となっている。

表1　遺跡地名表

No	遺跡名	立地	種別	時代	No	遺跡名	立地	種別	時代	No	遺跡名	立地	種別	時代
1	青木畑遺跡	自然堤防	包含層	縄文(中、後)弥生(中)	14	妙円遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(晩)	27	高田遺跡	丘陵麓	包含地	縄文(晩)、弥生
2	志戸森遺跡	丘陵斜面		縄文(中)	15	諏訪神社遺跡	台地	寺院跡		28	鹿鼻館古墳群	丘陵	高塚古墳	古墳
3	町田館跡	丘陵	城館	中世	16	反町遺跡	自然堤防	包含地	弥生(前・中・後)	29	鹿鼻城跡(長崎城、小淵元館)	〃	包含地	平安、中世
4	狐崎館跡	〃	〃	〃	17	的場遺跡	〃	〃	縄文(中・晩)	30	清水館跡	丘陵端	城館	中世
5	竹の花横穴古墳	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)	18	阿弥陀寺跡	〃	寺跡		31	上野遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
6	宝領遺跡	自然堤防	包含層	縄文、弥生(中・後)	19	真坂平館跡	〃	城館	中世	32	八幡原古墳群	〃	古墳	古墳
7	巻堀遺跡	〃	包含地	縄文(晩)、弥生	20	鶴町遺跡	〃	包含地	縄文(晩)	33	金矢遺跡	台地	包含地	縄文(晩)
8	上戸遺跡	〃	〃	縄文(晩)	21	国史跡山王囲遺跡	〃	〃	縄文(晩)、弥生	34	柳目館跡	丘陵	包含地城館	弥生(後)、中世
9	赤松館跡(島体城)	丘陵	城館	平安	22	鹿込館跡	丘陵	城館	中世	35	妙教寺遺跡	丘陵端	包含地	縄文
10	吉祥寺跡	丘陵麓	寺院跡	中世	23	境館跡(酒井館)	〃	〃	〃	36	向芳沢遺跡	丘陵斜面	〃	縄文(晩)
11	熊島館跡(真坂城)	丘陵	城館	中世	24	赤坂遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(早)	37	小古遺跡	〃	〃	〃
12	龍雲寺西沢古墳群	丘陵麓	横穴古墳	古墳(後)	25	猿田原遺跡	〃	〃	縄文(後・晩)	38	穴の原遺跡	丘陵	〃	縄文(中・晩)
13	姫松館跡(姫松城)	丘陵端	城館	平安、中世	26	大川口館跡	丘陵	城館	近世					


一迫川
56.00
55.92
55.60
55.80
55.27
55.71
55.72
55.74
59.57
60.36
60.31
55.41
55.59
55.12
60.32
60.49
60.31
55.42
54.94
54.87
60.52
60.42
60.12
60.43
調査区
58.29
58.00
60.48
60.28
59.99
58.94
58.12
59.27
58.32
58.13
58.44
57.79
県道築館・花山線
59.45
59.42
57.88
57.92
57.89
57.38
59.80
57.75
57.61
57.00
58.64
58.66
57.39
57.34
56.08
56.98
59.83
58.01
58.18
58.82
58.19
58.47
56.95
58.27
57.74
58.67
56.83
58.79
58.33
58.70
56.68
58.08
58.37
59.22
58.34
58.36
58.45
58.90
58.71
58.93
20
0
50m

第２図　調査区の位置

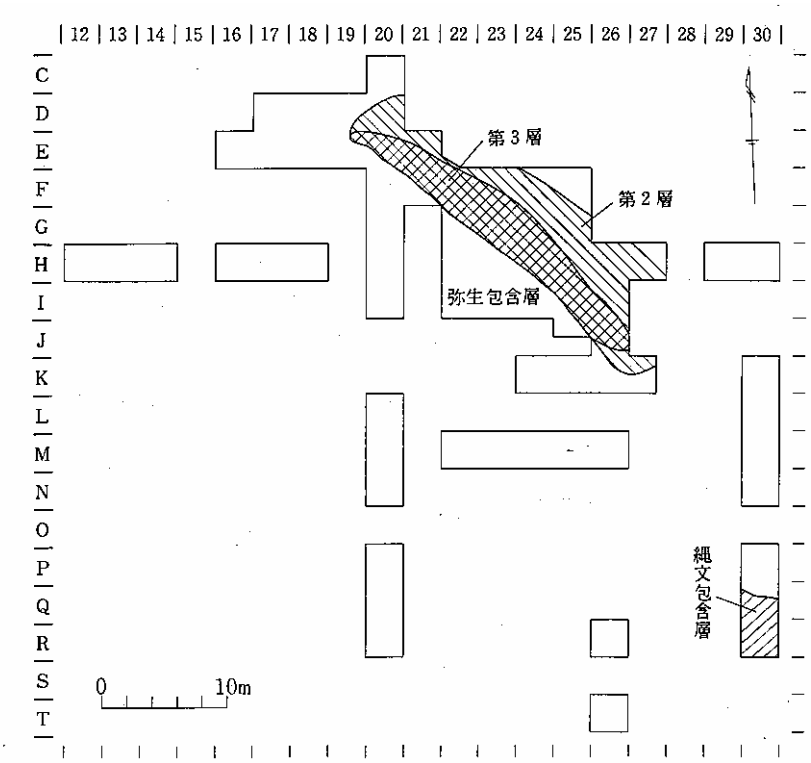
Ⅱ　調査の経過

本遺跡は昭和46年夏の県営圃場整備事業による工事中に発見された。遺跡を発見された三塚信一、佐藤信行氏は8月に現地調査を行う一方、一迫町教育委員会と連絡を取り、町教委よりさらに県教育委員会に報告がなされた。県教委は現地視察を行って遺跡の重要性を確認するとともに遺跡の保存対策を協議した。その結果工事がかなり進行し、遺跡がだいぶ荒らされていることなどから、現状での保存は困難であると判断し、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

調査は昭和47年3月1日から3月15日にかけて行い、遺物が多く散布している地点を中心に東西54m、南北60mの範囲を対象とし、計612㎡を発掘した。

調査区の北部では南東から北西方面にはしる溝状の落ち込みがみられ、この落ち込み内を中心に弥生時代初頭の遺物包含層が形成されており多量の土器、石器などが出土した。この溝状の落ち込みはその形態、堆積土の状況などからみて人工的な遺構ではなく、自然の作用によってできたものと考えられる。

また溝状の落ち込みの範囲を確認するためにその周辺を調査したところ調査区の南東部で縄文時代後期の遺物包含層が発見された。これら二ケ所の遺物包含層以外の部分では遺物の出土



第３図　グリッド配置図

はごく少い。遺構は発見されなかった。なお、縄文時代の後期の遺物包含層は末端を確認したのであり、さらに南東方面に広がるものと考えられたが、圃場整備計画では畑地として利用される予定になっており、また地表面から包含層までの深さが約50㎝あり、耕作による影響も受けずに保存される状況にあることから発掘区を拡張することは避けた。

調査区内の基本的な層位は、全域を連続する土層で確認してはいないが、Ⅰ層は表土、耕作土、Ⅱ層は弥生時代初頭の遺物包含層、Ⅲ層は暗黄褐色微砂層で920区、M25区で縄文時代後期中葉の土器がごく少量みられるほかは遺物は出土していない。Ⅳ層縄文時代後期初頭の遺物包含層、Ⅴ層暗黄褐色砂質土層となる。Ⅴ層以下は砂層(無遺物層)が数枚あって礫層にいたる。地表から礫層までは1～1.7㎜ほどである。

各層とも弥生時代の包含層と縄文時代の包含層を結ぶ線から北東にわずかに傾斜する傾向がうかがえ、その線より南西の部分はほぼ水平である。したがって包含層は遺跡の立地している自然堤防上の中でも、微高地の端部の傾斜面に形成されている。

Ⅲ　調査の成果

1．縄文時代の遺物包含層

縄文時代の遺物包含層は調査区南東部分(Q・R30区)で検出され、今回の調査ではその一部(2グリッド3×6m)を発掘した。基本層位第Ⅳ層にあたり単層である。

出土遺物

(1) 土器

口縁部資料

〈深鉢形土器〉

文様をもつもの

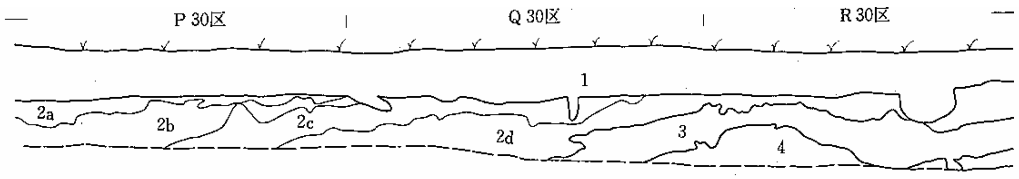
a(1・2)、頸部は逆「く」字に折れて外側が鍔状に張り出すもの。

1は口縁部が外反気味に立ち上がる。4個の橋状突起がつくと思われるが突起部を欠いている。体部は上部がふくらみをもち、下半に向かってゆるやかにすぼまる。文様は突起の中間の口縁部に渦文、その下にボタン状貼付がみられ、体部は隆線と沈線による連鎖状懸垂文によって区画され、縄文(RL)が充填されている。口縁部内面には突起をはさんで2個、突起の中間には渦文に対応して1個のボタン状貼付がみられる。

2は1と同様の器形・文様をもつものと思われる。口縁部は内傾している。口縁部の文様は渦を成さず円文で、その下にボタン状貼付がみられる。体部は隆線と沈線による区画と充填縄文手法によって文様が描かれる。

b(3～8)、頸部は逆「く」字に折れて口縁部は内傾し、口縁上部でさらに外反するもの。

低い突起がつく。口縁部に無文帯があるが、突起部には縦位の隆線(4)、沈線の引かれた縦位の隆線(7・8)、沈線による渦文(5)、沈線によるS字文(6)などがみられ、3では体部から無文帯が突起に向って張り出しその先端が隆線を成している。頸部には隆線がみられ、ボタン状貼付の行なわれるものが多い。体部は隆線、沈線、充填縄文手法で文様が描かれ、6では2



層No	基本層位	色調・土性など	遺物取上層位
1	Ⅰ	表土・耕作土	1
2 a	Ⅲ	淡灰茶色砂	2
2 b		暗黄褐色粘土質微砂	
2 c		暗褐色微砂	
2 d		暗黄褐色微砂	
3	Ⅳ	黒褐色粘土質微砂　炭化物多	3
4	Ⅴ	暗黄褐色砂質土	

第４図　縄文時代の遺物包含層

本の隆・沈線が対を成して突起に向かって斜めに頸部までのぼり、その中位からさらに横に展開する。その隆線の交点にはボタン状貼付が、隆帯一部には連鎖状刺突が、隆・沈線にはさまれた部分には刺突が加えられ、また口縁突起部にも沈線による渦文、ボタン状貼付がみられる。

C(9～12)、口縁部が内弯するもの。

9～11は口縁部に無文帯をもつもの。9は橋状突起がつき、体上部がふくらんで下半は次第にすぼまる。頸部に刺突の加えられた隆線が走り突起へ続く。体部上半には沈線の引かれた隆線と、沈線による渦文が描かれ、その間に刺突が加えられる。文様下端は隆線によって画される。10は頸部に隆線が走り、体部に縦位の沈線がみられる。11は頸部に沈線がみられ、体部は縄文(RL)が施されている。

12は低い突起がつき、突起頂部に刺突が施される。頸部に沈線が引かれ、口縁部に刺突がみられる。体部は縄文(LR)が施されている。

d(13～16)、口頸部が外傾し、低い突起がつくもの。

13･14は口縁部無文帯をもつ。13は口縁突起部に沈線の引かれた隆線による渦文がみられ、頸部に隆線とボタン状貼付がみられる。14は突起部を欠く。頸部の隆線･沈線が突起部で上がり、その下にボタン状貼付がみられる。13・14とも縄文(RL)が充填されている。

15・16は口縁部無文帯をもたず、突起部のボタン状貼付からは口縁に沿って15では隆線が走り、また、連鎖状隆線が下る。16では沈線が走り、連続刺突が下垂する。

e(17～23)、口頸部が単に外傾し突起がつかないもの。

17は口縁端部が肥厚し沈線文がみられる。

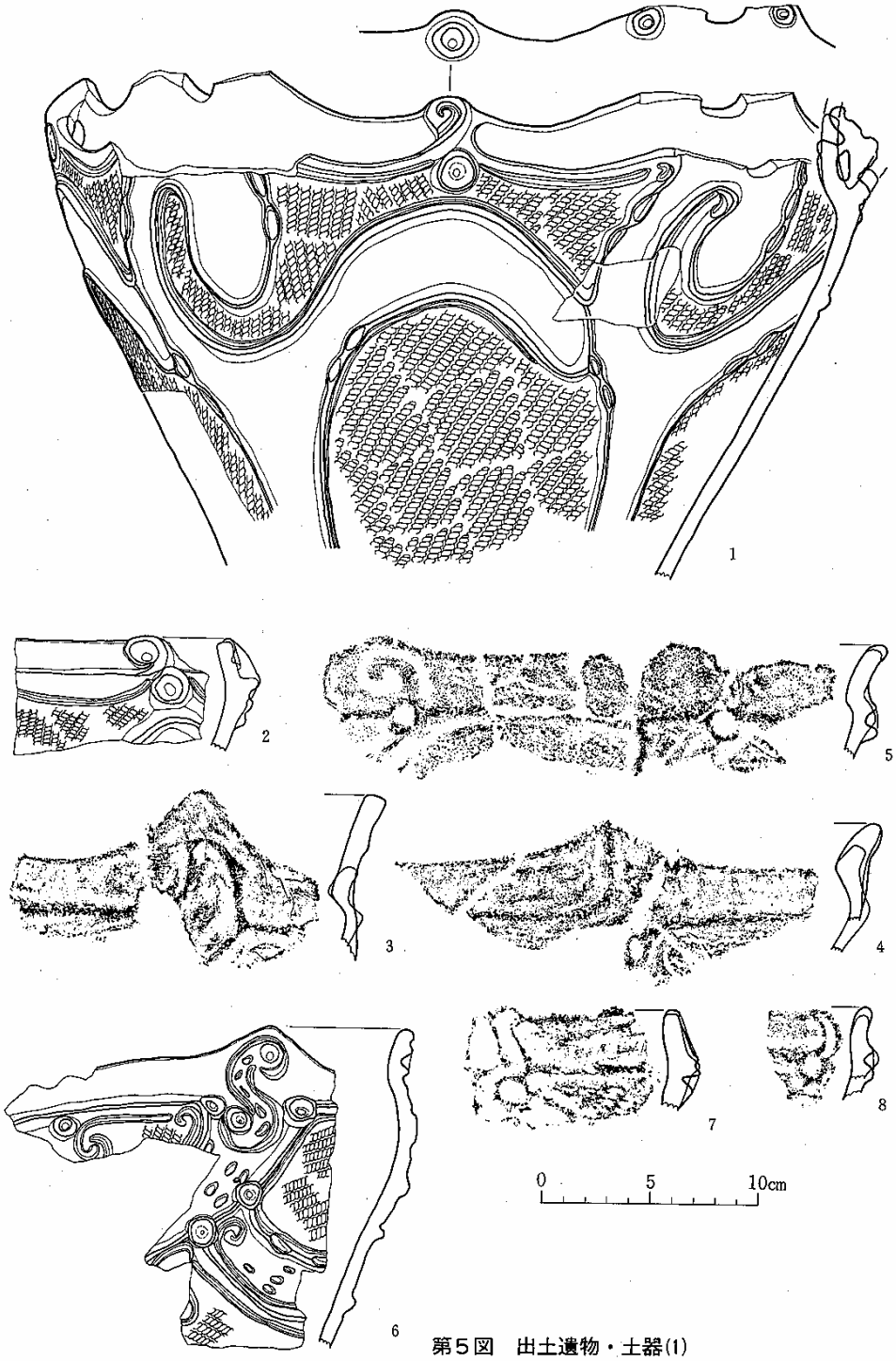
18は隆線、沈線、刺突、充填縄文によって文様が描かれる。文様は四角に構成されるものと思われる。隆線と沈線にはさまれた無文帯が縦位に走り、口縁部では一方の隆線が口縁に抜け、他方は隆･沈線が口縁に沿って続く。その交点には刺突が加えられている。また、四角の区画内には縄文(RL)が充填される。

19は口縁、体部がほぼ直線的に外傾する。文様は18と同様に四角の構成であるが、隆線はみられず、平行する沈線によって四角の区画がなされ、沈線間と口縁部には刺突が加えられ、区画内には縄文(RL)が充填される。また、口縁部では沈線端部が渦文を成す部分もある。

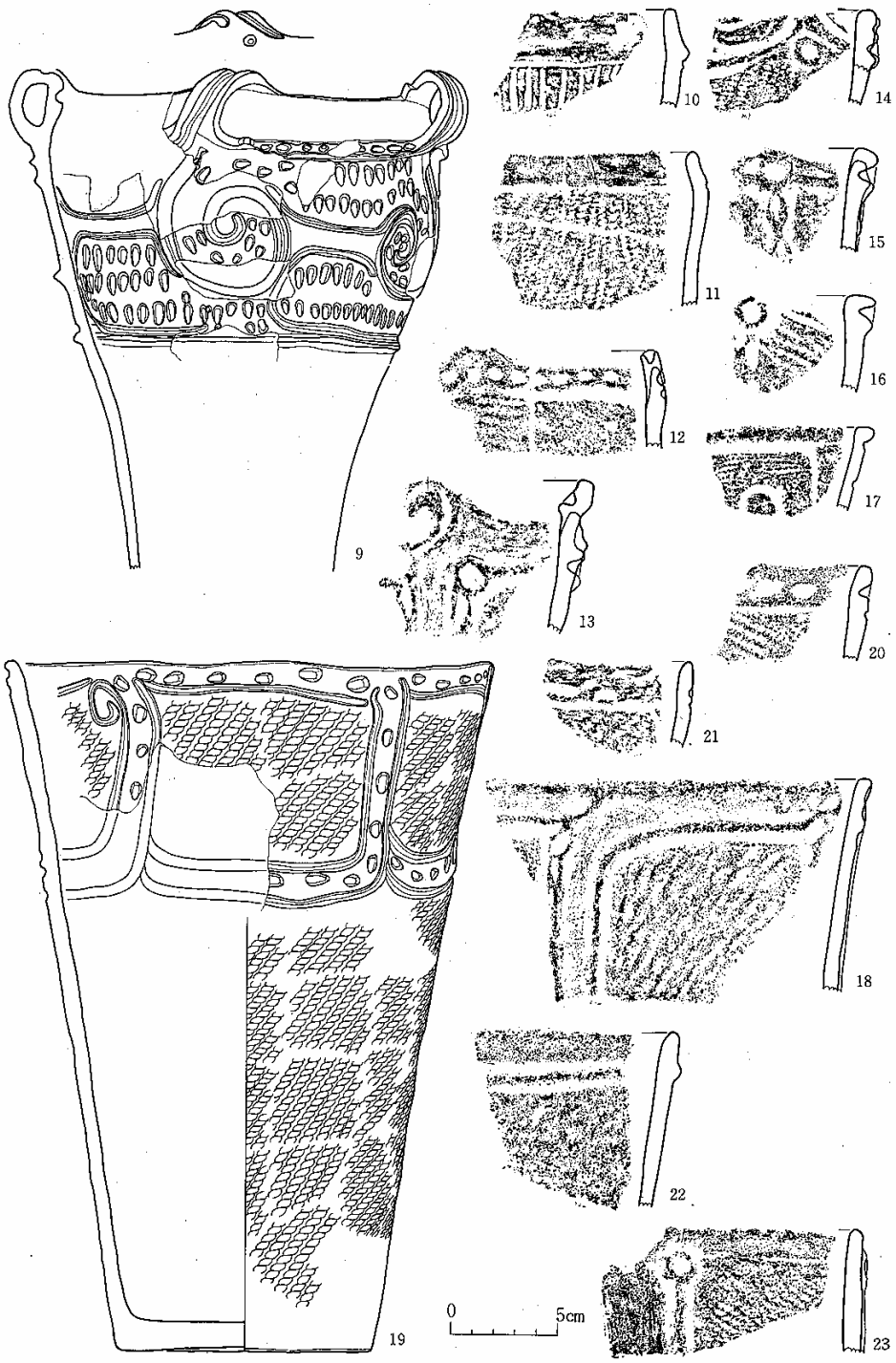
20～23は文様構成が不明である。20・21は頸部に沈線、口縁部に刺突がみられ、体部には縄文(20はLR,21はRL)が施されている。22は口縁部が無文で頸部に隆線が走る。23は口縁部のボタン状貼付から隆線とそれに沿った一方に無文帯が下垂し、他方には縄文(LR)が施されている。

文様をもたないもの(24)。

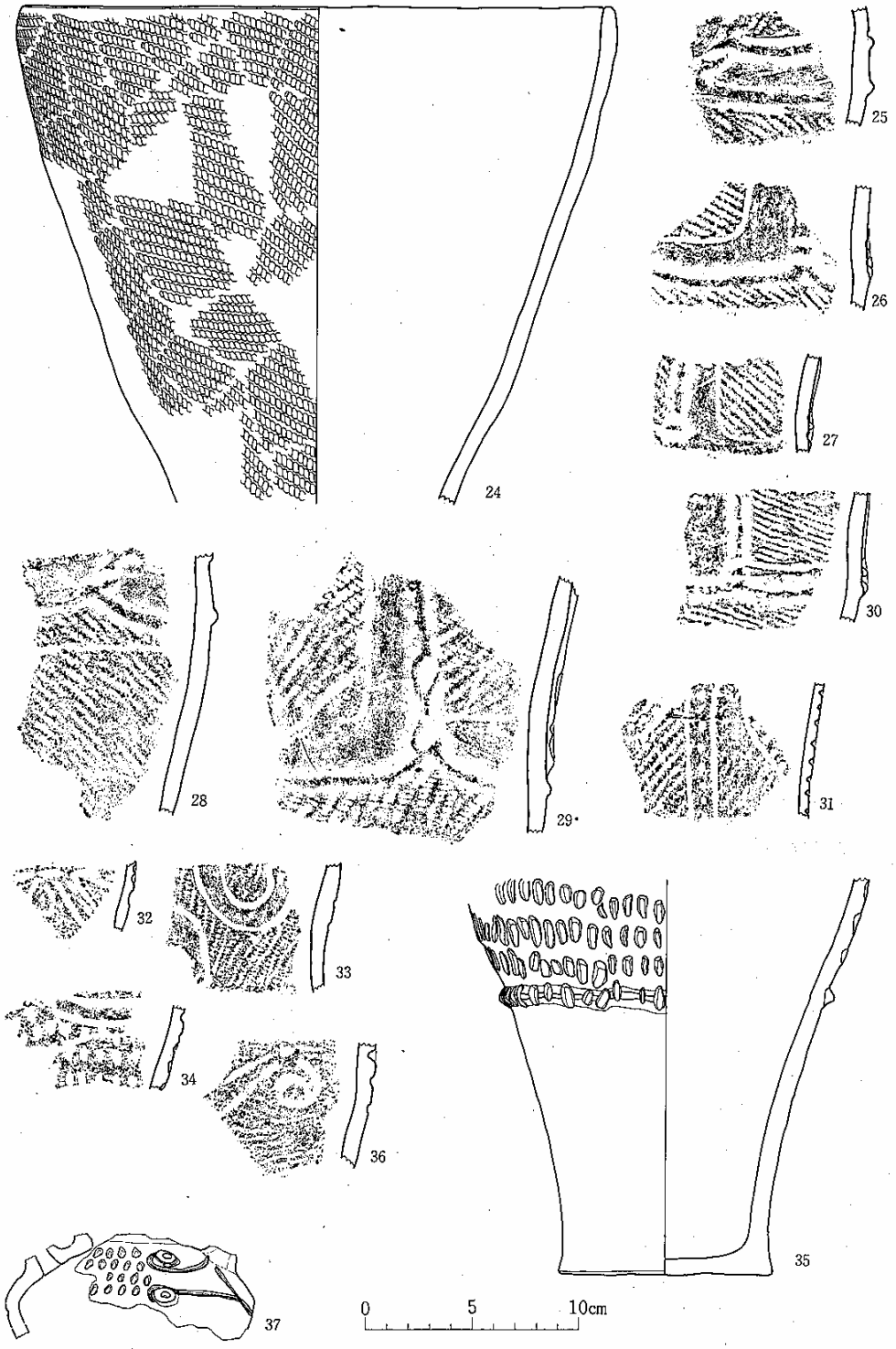
単純な深鉢形土器である。体部は外傾して口縁部で直立する。全体に縄文(LR)が施されて



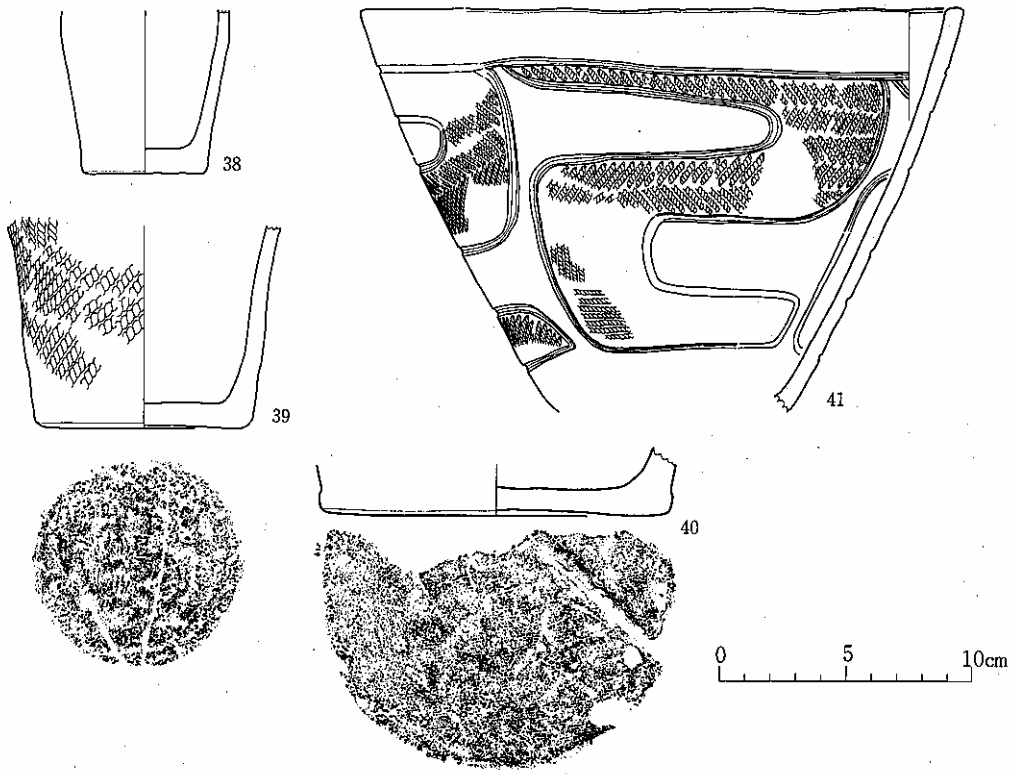
第５図　出土遺物・土器(1)



第６図　出土遺物・土器(2)



第７図　出土遺物・土器(3)



第８図　出土遺物・土器(4)

いる。

体部資料

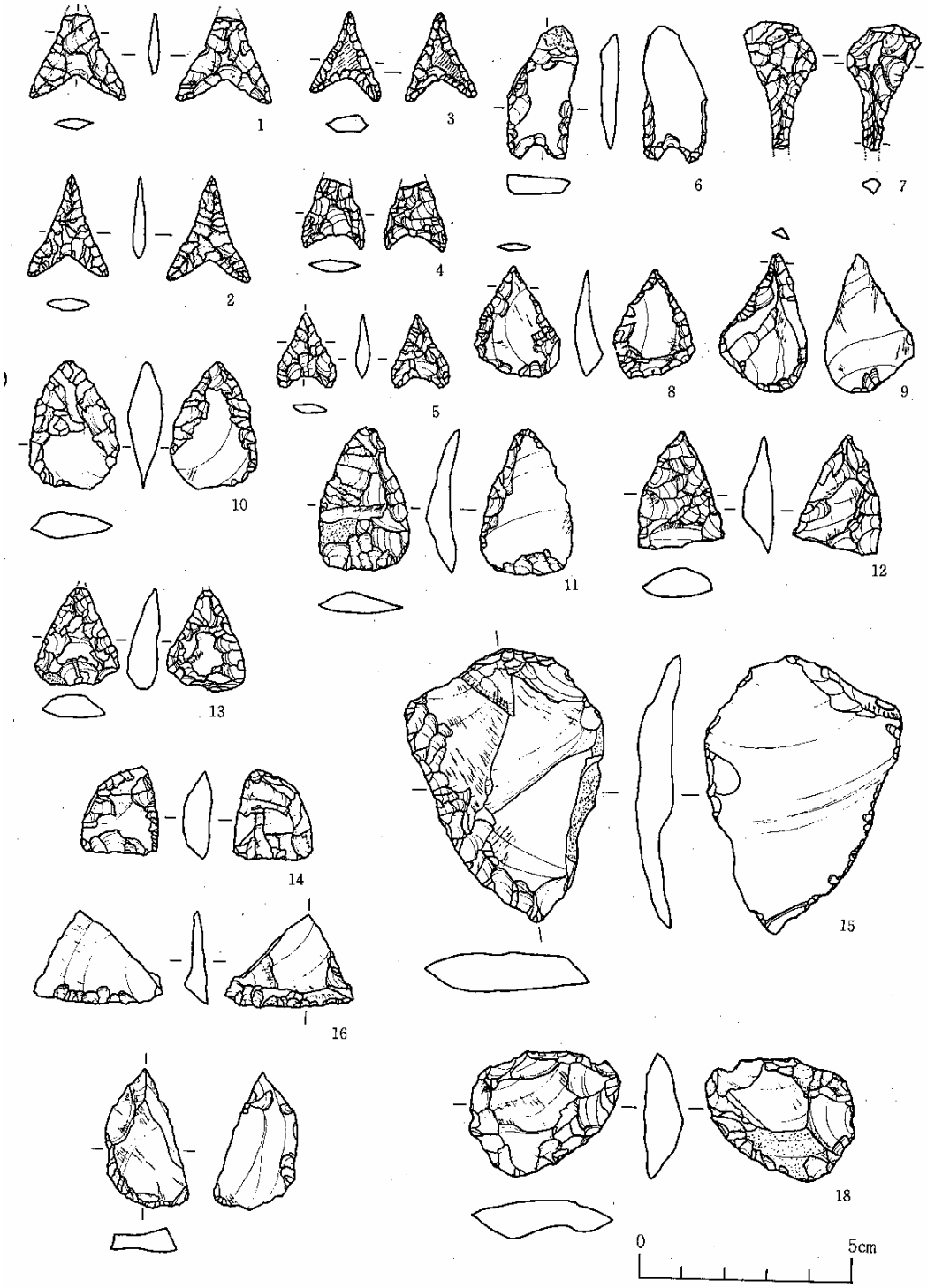
〈深鉢形土器〉

a(25～30)、隆線、沈線とそれにはさまれた無文帯が四角の区画を成すと思われるものである。隆線の交点には隆線を切る様な刺突が加えられる。区画内には縄文(LR)が充填されている。

b(31・32)、間に刺突が加えられた平行沈線によって文様が描かれるものである。32には上位に刺突が列をなし、沈線による円文が加えられる。平行沈線外には縄文(RL)が施されている。

c(33)、沈線にはさまれた無文帯による曲線的な文様がみられるものである。無文帯外には縄文(RL)が充填されている。

d(34・35)、重層して列をなす刺突がみられるものである。34は刺突文の上部に平行沈線が横走する。35は口縁部を欠く。体上部にふくらみをもち、以下次第にすぼまって、体部下端が張り出す器形である。体上部に刺突文がみられ、その下部に隆線がめぐり、隆線にも刺突が加



第９図　出土遺物・石器

えられている。

e(36)、盲孔を基点として斜行する沈線が引かれるものである。盲孔の下に沈線による渦文が加えられる。

〈注口土器〉(37)

体部中央が逆「く」字に屈折して体上部が内弯し、体上部の中位に注口がつく。文様は体上部にみられ、ボタン状貼付とそれをとりまく沈線が続き、その反対側には刺突が4列みられる。

底部資料(38・39・40)

体下部はゆるやかにすぼまって底部へいたる。38は無文、39は縄文(LR)が施される。39・40の底部に木葉痕がみられる。

石　器

石鏃(1～6)

無茎の鏃である。基部はえぐりが入り、凹む。1～3は基部のえぐりが鋭く、両側縁もへこんで雁股状を呈する。4・5はえぐりが丸く側縁は直線的で下端がふくらむ。両面に細かな調整が加えられているが、3ではそれが中央部まで及ばない。なお、6は下端にえぐりが入り、石鏃の未製品とも思われる。

石錐(7)

先端を欠く。尖頭部の断面は菱形である。基部、尖頭部とも全面に細かな調整が加えられている。

不定形石器(8～18)

8～13は略三角形を呈し、先端が鋭くつくられている。調整はさまざまで、12は両面全体に11は片面全体に、8・10・13は両面周縁に、9は片面周縁に施されている。

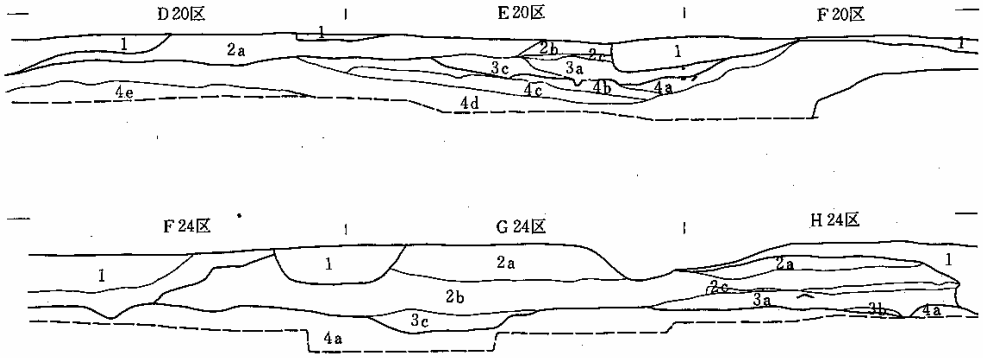
14～17は不定形で一部に調整が加えられている。18は略楕円形で両面周縁に調整が施されている。

2．第III層出土遺物

図示できたのは1点だけである(41)。わずかに内弯気味に外傾する単純な器形の浅鉢形土器である。口縁部は無文で頸部に沈線がめぐる。体部には沈線によって大きな逆Ｓ字状の区画がなされ、区画内に結束しない羽状縄文(LR,RL)が充填されている。この土器はその特徴から宝ケ峰式に属するものと考えられる。

3．弥生式時代の遺物包含層

弥生時代の遺物包含層は調査区の北部D19区からK27区にかけて南東－北西方向に細長く検出された。平坦部からゆるい斜面に移行した部分にみられる溝状の落ち込み内を中心にし、さらにいくぶん斜面下方まで広がり、規模は幅約6m、長さ約30mで最厚部で約40cmである。層は2枚(Ⅱ－第2層・第3層)に大別され、さらにそれぞれ3枚(Ⅱ－2a・b・c層、Ⅱ－第3a・b・c層)に細分される。第3層は溝状落ち込み内に堆積しており、遺物量が多い。第2層は第2c層が第3層とほぼ同範囲に分布し、第2a、b層は溝状落ち込みからさらに斜面下方にかけて分布する。第2層のうち第2b層は遺物の出土量が第3層に次いで多く、主として溝状落ち込み内に集中する。第2a、c層の遺物はごく少い。



層No	基本層位	色調・土性など	遺物取上層位
1	Ⅰ	表土・耕作土	1
2a	Ⅱ	淡茶色微砂質土　炭化物多	2a
2b		暗黄褐色砂質粘土　炭化物	2b
2c		淡黄褐色微砂質粘土	2c
3a		黒色微砂質土	3
3b		淡茶褐色微砂質土	
3c		暗黄褐色微砂質土	

層No	基本層位	色調・土性など	遺物取上層位
4a	Ⅲ	暗黄褐色微砂質土	
4b		暗黄褐色砂質土	
4c		灰褐色微砂	
4d		黒褐色土	
4e		暗黄褐色土	

第10図　弥生時代の遺物包含層

出土遺物

弥生時代の遺物包含層から出土した遺物には土器、石器、土偶がある。これらは出土層位によって第2層と第3層とに分かれて出土しているが、おのおのごく近似した特徴を有していることにより両層出土のものを一括して記述する。

(1)土　器

土器には深鉢形時、浅鉢形時、高坏系土器、壺形土器､蓋形土器の5形態がある。

〈深鉢形土器〉

口縁部資料

a.口頸部と体部に屈曲をもつもの(1・2)。

小形の深鉢形土器である。1は口縁部が外反し、頂部が二分された低い山形の突起がつく。

頸部はくびれて「く」字状を呈し、体上部がふくらむ。頸部と体部のふくらみ下端にそれぞれ一条の沈線が巡る。2は口縁部が反り気味に直立する。体上部がふくらみ、その下端はするどく屈曲する。いずれも体部に縄文(LR)が施されている。

b　頸部がくびれるもの(4～32)。

口頸部がくびれて外反・外傾するものである。4・9・10は小波状口縁を呈し、4は上方から押しつけて、9・10は刻み目状にしている。9の頸部には一条の沈線がみられる。11～17は低い山形の突起がつく。このうち12を除き、突起頂部が二分されている。5～8,18～32は平口録である。口縁部は外反するものが多いが、直立あるいは内傾気味のものもある。体部はわずかにふくらむものが多い。いずれも口縁部は無文、体部には縄文(7はR、他はLR)がみられる。

c　口頸部が変化なく立ち上がるもの(33～49)。

33は口縁部が内弯し、焼成前の孔が1つ付く。平行沈線による文様が施されているが文様単位は不用である。なお、この33は他の形態(針あるいは無頸壺)の可能性もある。

34～49は縄文だけが施されている。口縁部は内弯、直立、タ傾するものがある。34の底部には木葉痕がみられる。縄文原体は43がRLのほかすべてLRである。

体部資料(3)

破片上部でくびれ、それより上は内弯気味に立ち上がる。縄文(LR)を地文としてくびれ部に二条の沈線が、その上に斜行沈線が引かれており、鋸歯状文と推定される。類似する器形の中でも第11図1・2よりは第23図1に近い形態であると思われる。

底部資料

50～59は深鉢形土器と思われる底部破片である。50には底部に縄文(LR)が、51～56,58・59には木葉痕がみられる。

〈浅鉢形土器〉

口縁部資料

a　口頸部が屈曲するもの(60-67)。

他の浅鉢形土器に較べて大形である。60は口縁部が外頃し、小さな山形突起が付く。頸部は「く」字状を呈し、体上部が内弯する。口縁部内面、口縁部上端、頸部にそれぞれ一条の沈線が走る。61～66は口頸部がゆるやかにくびれて外反する。口縁部に文様が施されており、61は平行沈線の一部を彫去したエ字状文が、62～65は三条、66は一条の沈線がみられる。67は口縁部を欠く破片であるが同様の器形と思われる。いずれも体部に縄文(LR)が施されている。60・61・66・67の沈線内には丹塗りの痕跡が認められる。また、61・62にはスス状の炭化物が付着している。

ｂ　口縁部、体部が屈曲せずに外傾するもの(68～82)。

68～72,72～78は口縁部から体部にかけて外反気味に外傾する。68～71は突起が付く。対を成す小突起で、突起間が離れており両者を結ぶ沈線が口縁部上端にみられる。68・69・72は体部上半から口縁部に文様を有し、上下を平行沈線で区切った間に反転する沈線とその中に一条の沈線を引いたエ字状文が描かれており、文様より下には縄文(LR)が施文され、72では文様単位は3単位でさらに体下部に二条の沈線がめぐる。口縁上部内面にも一条の沈線が引かれている。71・77・78も同様な文様と思われる。

73は口縁部内面がそがれたような形態で口縁部に二条の沈線がみられ、それ以下には沈線前に縄文(LR)が施されている。内面には一条の沈線がめぐり、さらに沈線と口縁の間に縄文(LR)が施文されている。

74～76は口縁部と体部下端に一、二条の沈線がめぐり、体部には縄文(LR)が施文されている。

79・80は口縁部から体部が直線的を器形であるが破片のため詳細は不明である。

81・82は口縁部から体部が内弯気味のものである。口縁部・体部のほぼ全体に文様がみられ、上下を沈線で区切った間に、81では反転する沈線とその中に一条の沈線を引いたエ字状文が、82は中に一条の沈線を含んだ長楕円文が二段に施文されている。82は粗雑なつくりの土器である。

これらの土器には74をのぞきすべて口縁上部内面に一条の沈線がめぐる。また、68の沈線内には丹塗りの痕跡がみられる。

体部資料

83・84は口縁部を欠く。83は縄文(LR)を地文としてエ字状文と一条の沈線による鋸歯状文が施文されている。84は体部が屈曲する器形である。屈曲部より上は外反、下は内弯気味に外傾する。屈曲部に途切れる沈線と丸い彫去によってエ字状文が施文され、それ以下は、縄文(LR)がみられる。

底部資料

85・86は鉢形土器と思われる底部破片である。85は底部に木葉痕がみられる。86は推定4個の短い脚が付いている。87は台部破片である。上の器形は不明であるが一応鉢形土器に含めた。

〈高坏形土器〉

口縁部資料

ａ　口頸部が屈曲し、波状口縁で突起が付くもの(88～99)。

口頸部がくびれて外傾する。体部は強く外傾し、上部が内弯気味となる。坏部と台部の接合した資料は88だけである。88は突起の形態が不明である。口縁部上端に沈線がみられる。体部

上半に文様があり、上下を沈線で区切り、その間にエ字状文を施文している。このエ字状文は斜行する二条一対の沈線によって扁平な三角形を形づくり、交点を彫去しその粘土を両側に盛り上げ、三角形の底辺にあたる沈線に沿って、さらに一条の沈線を加えている。文様単位は推定3単位である。坏部と台部の境に一条、台部に二条の沈線がみられる。89・91は頂部の肥大する突起がつき肥大部分の下端は一条の沈線で区切っている。90は小形の突起がつき頂部近くに一条の沈線が横位に走り、頂部上端に2個の刻み目がみられる。これら3点とも口縁部上端と口縁部内面に沈線がみられ、90ではさらに口縁に沿った沈線が引かれ、突起部分で頂部に抜ける。体部上半に文様がみられ、上下を沈線で区切った間に反転する沈線の入り組んだエ字状文が描かれ、91ではその中に一条の沈線が加えられている。文様単位は推定で89・91が3単位、90が4単位である。いずれも沈線内に丹塗りの痕跡が認められる。92～99は口縁部破片である。92は頂部を肥大させた突起が、93・97は山形突起がつく。92～95は89･91に、96は90に類似した文様をもつ。98・99の文様は不明である。92・94の沈線内に丹塗りの痕跡が認められる。

ｂ　口頸部が屈曲し、平口縁のもの(100～106)

突起はつかない。□頸部はわずかにくびれて外傾する。頸部から体部上半に文様帯がつく。

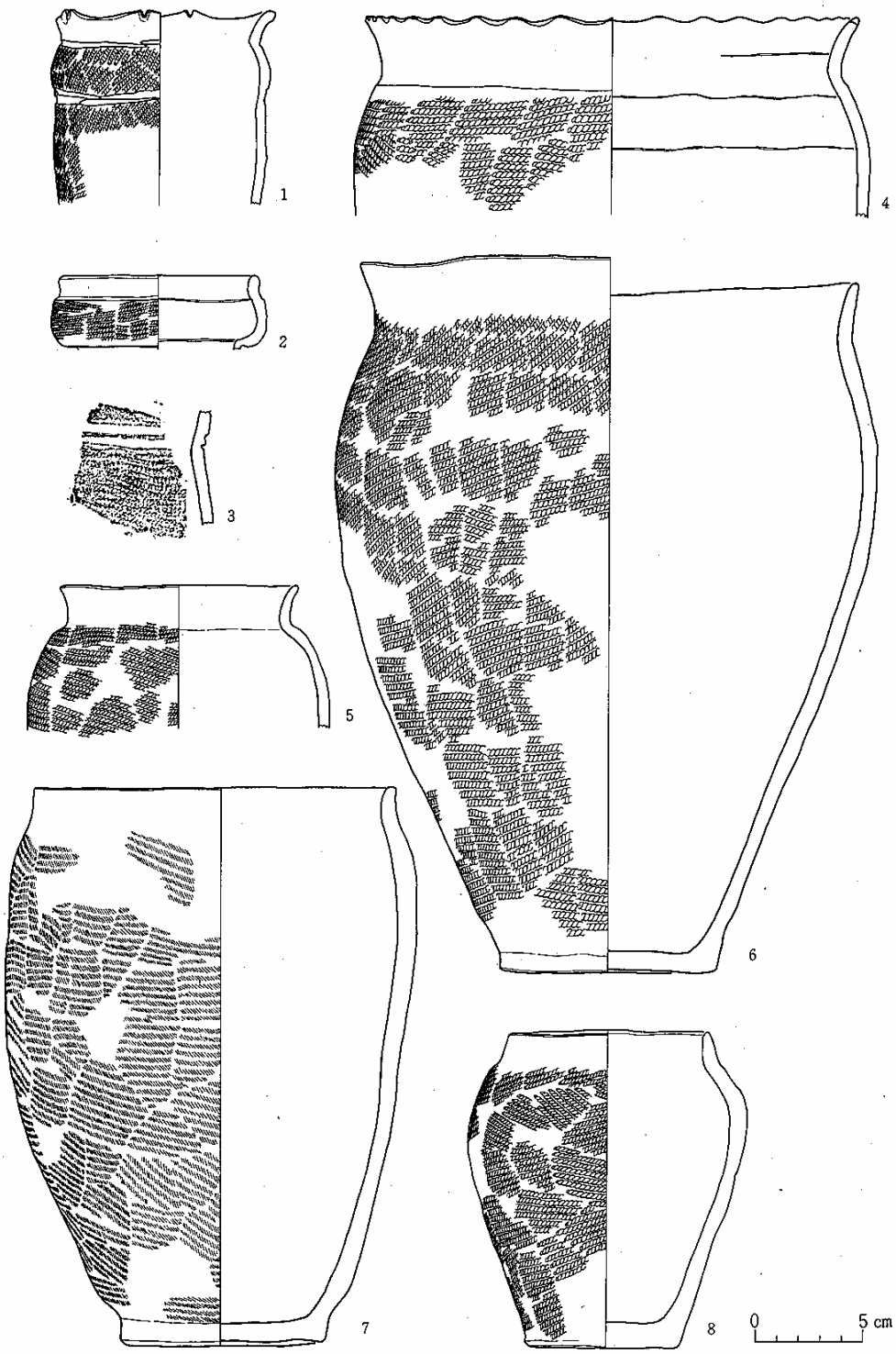
100・103はエ字状文がみられる。100は上下を沈線で区切った間に一条の沈線を斜行させて扁平な三角形をつくり、その交点を彫去して両側に盛り上げ、さらに三角形の底辺に一条の沈線を加え、交点と対応する位置で加えられた沈線と区切った沈線の一部を彫去している。体部下半には沈線前に縄文(LR)が施文されている。文様単位は2単位である。103は文様全体は不明であるが、反転する沈線と反転部に対応した平行沈線の一部に上下から彫去がなされている。101・104～106は平行沈線だけによって文様が構成され、三条一組の平行沈線を上下二段に配している。体部下半には縄文(LR)が施されている(104・105)。いずれにも口縁部内面には一条の沈線がめぐり、100・102・103には沈線内に丹塗りの痕跡が認められる。

ｃ　口縁部、体部が屈曲なく外傾し、口縁部に突起がつくもの(107・108)。

107・108は同一個体と思われるものである。口縁部、体部がわずかに内弯気味に外傾する。突起は低い山形で、口縁部上端には突起頂部を除き沈線が引かれている。体部上半に文様帯がみられる。全体の文様構成は不明であるが、平行沈線によって上下を区画した間に弧状沈線と充填縄文技法(縄文LR)によって文様が描かれている。口縁部内面には下端を一条沈線で区切り、縄文(LR)が充填されている。内外面に丹塗りの痕跡が認められる。

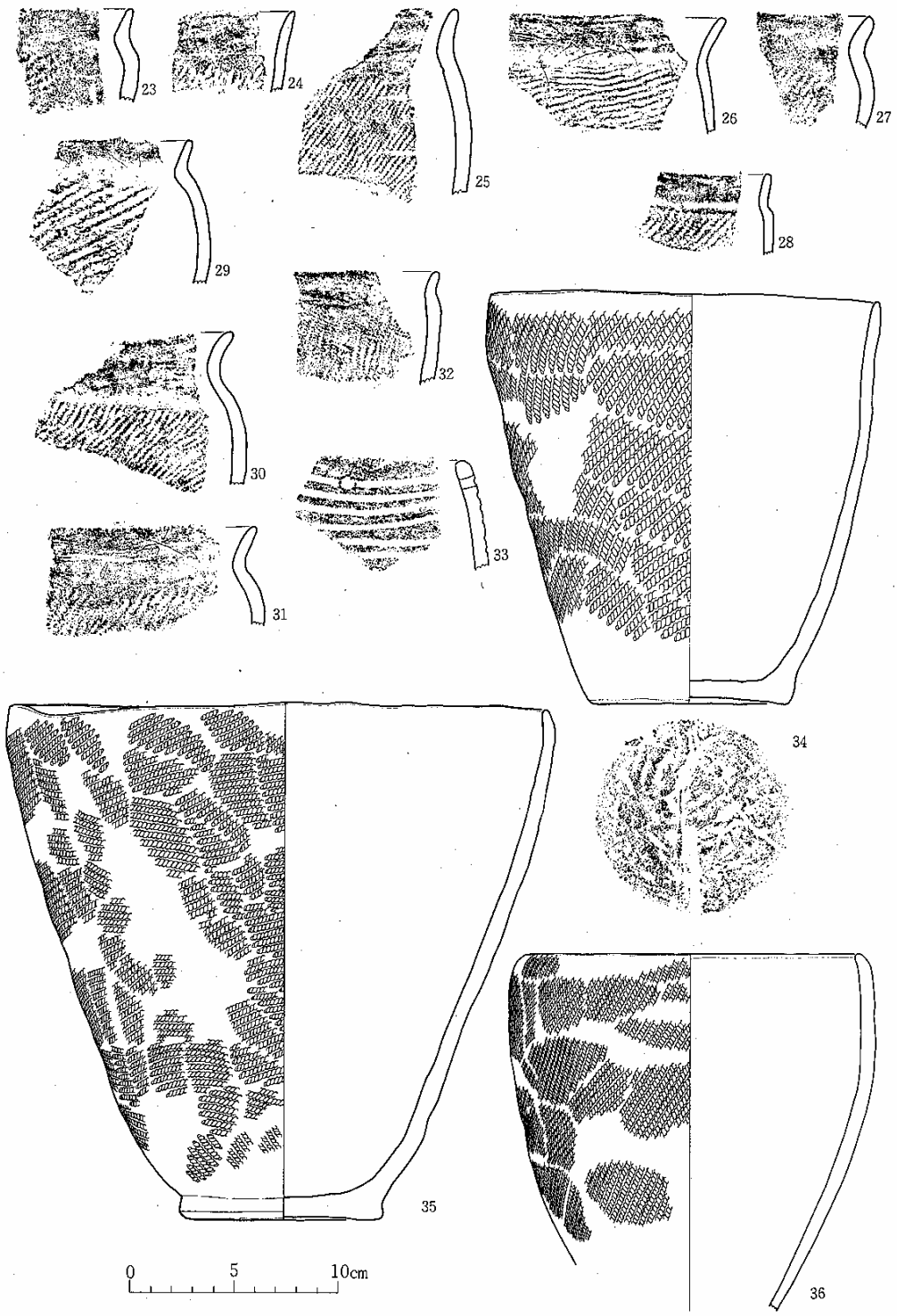
体部資料

102は口縁部を欠くが、台部上半が接合している。体部上半には88に類似したエ字状文が施文されている。脚部には波状文が描かれ、波頂、波底間には一条の沈線が加えられ、楕円形の窓が開いている。109は体部上半に88に類した文様が、110は平行沈線とそれ以下に縄文(LR)

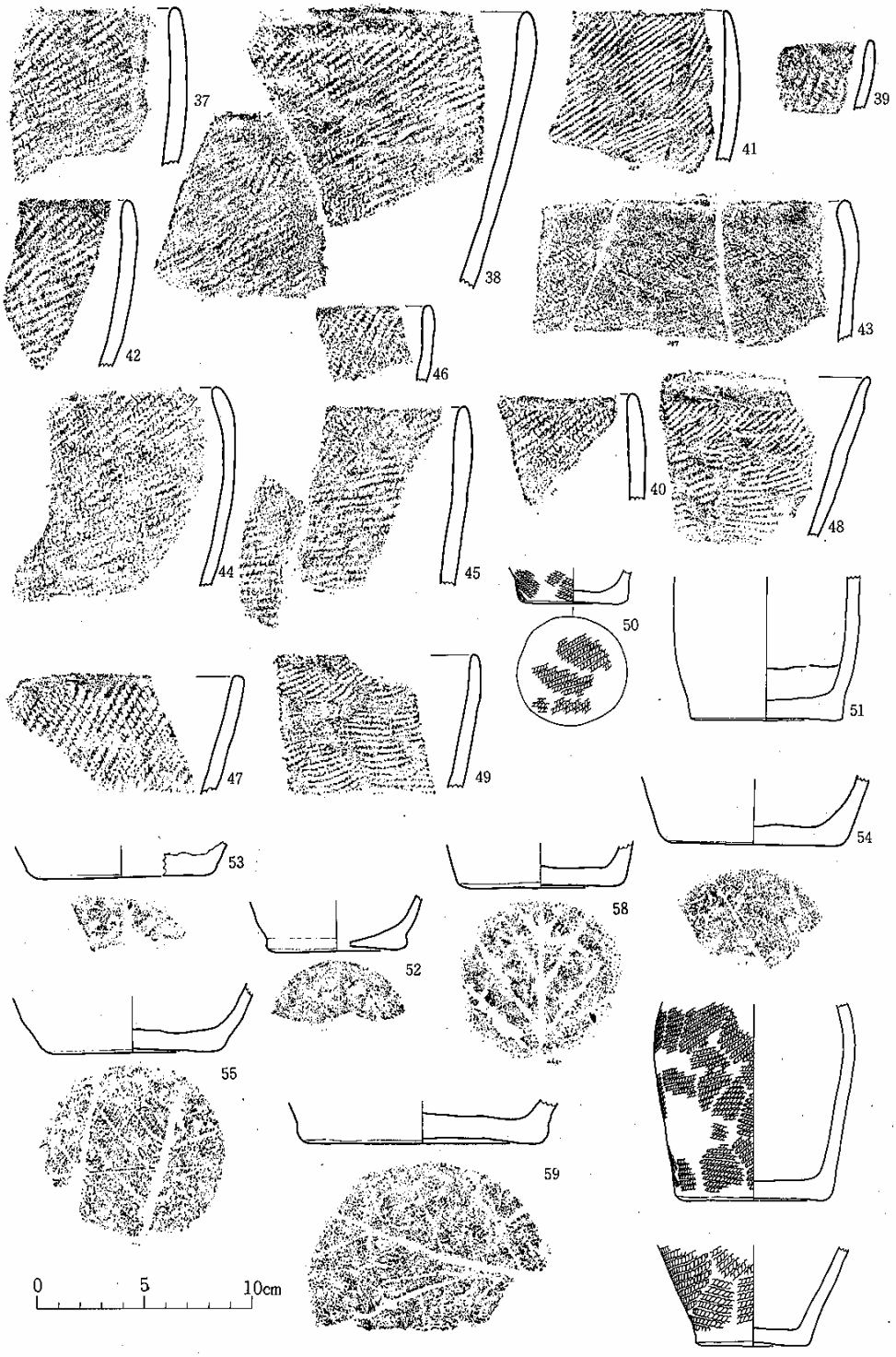


第11図　出土遺物・深鉢形土器(1)

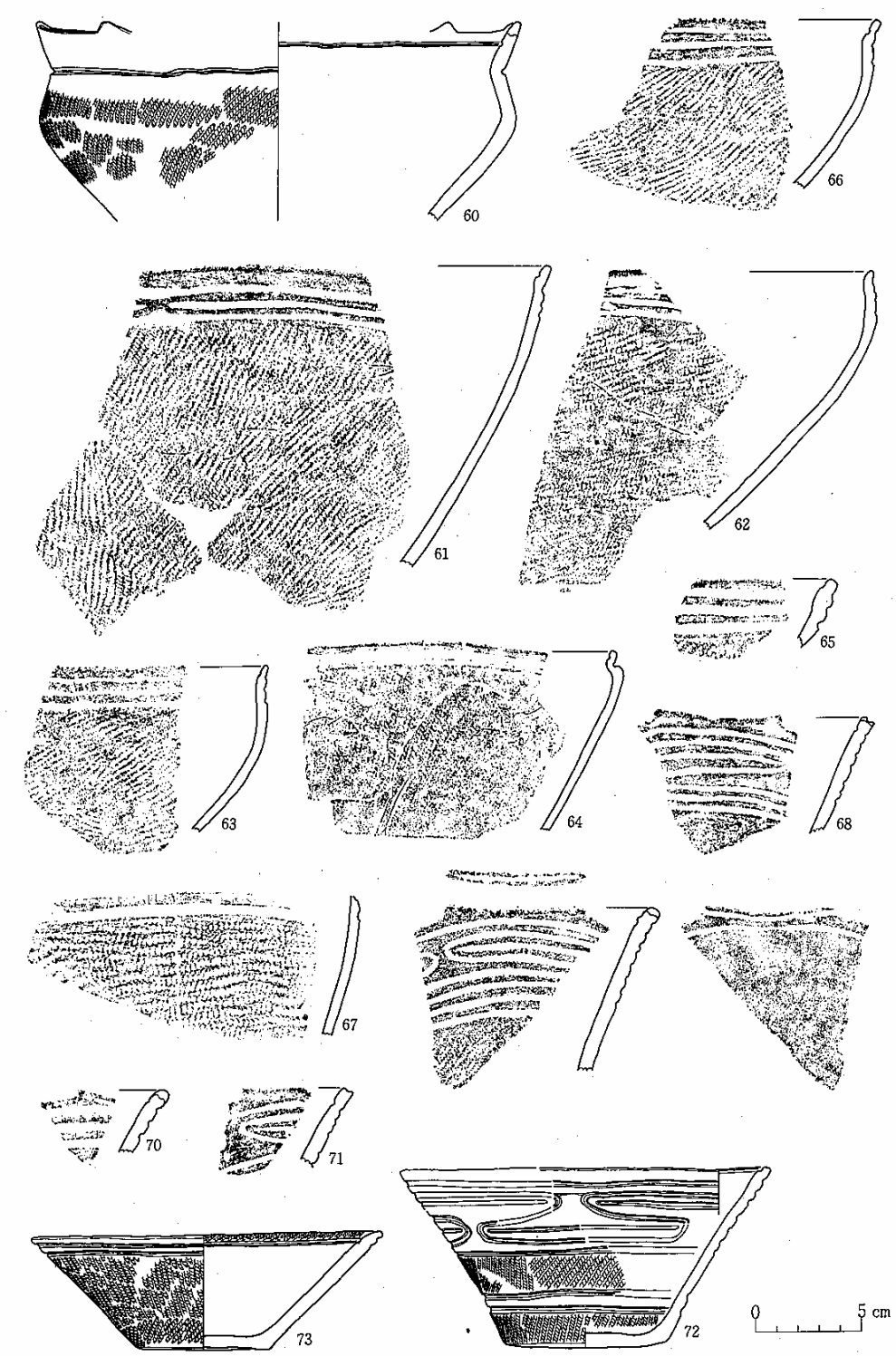
第12図　出土遺物・深鉢形土器(2)



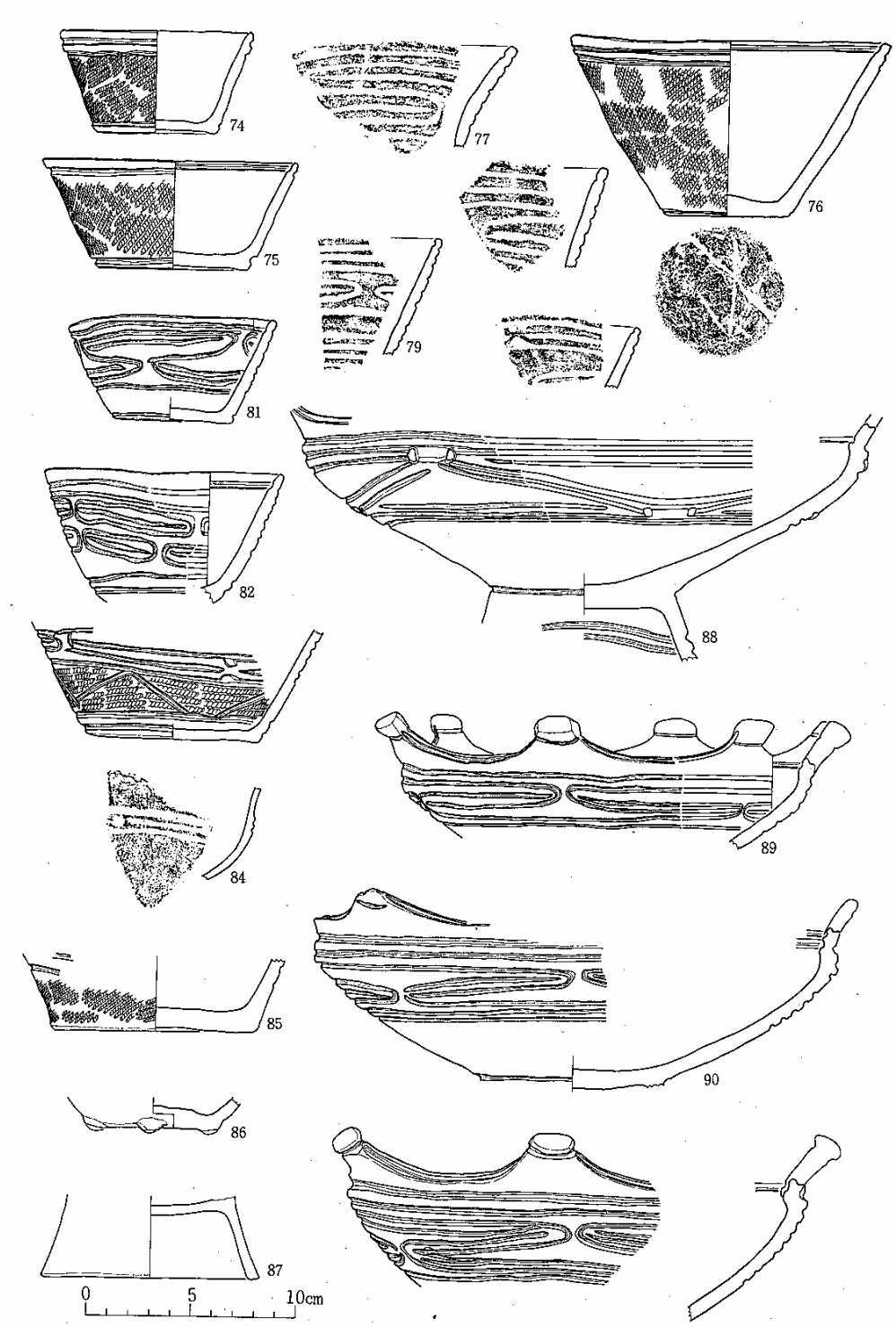
第13図　出土遺物・深鉢形土器(3)



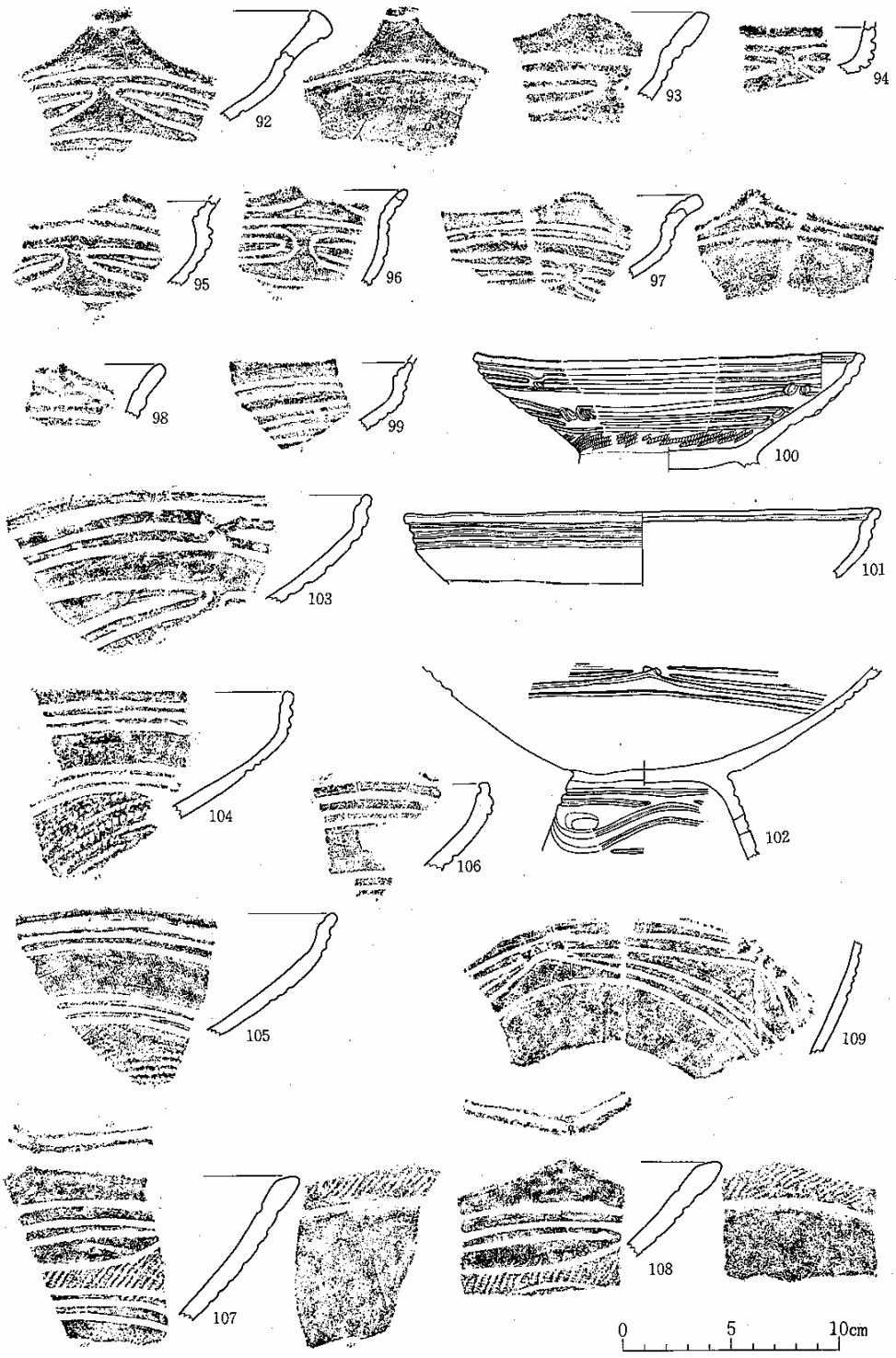
第14図　出土遺物・深鉢形土器(4)



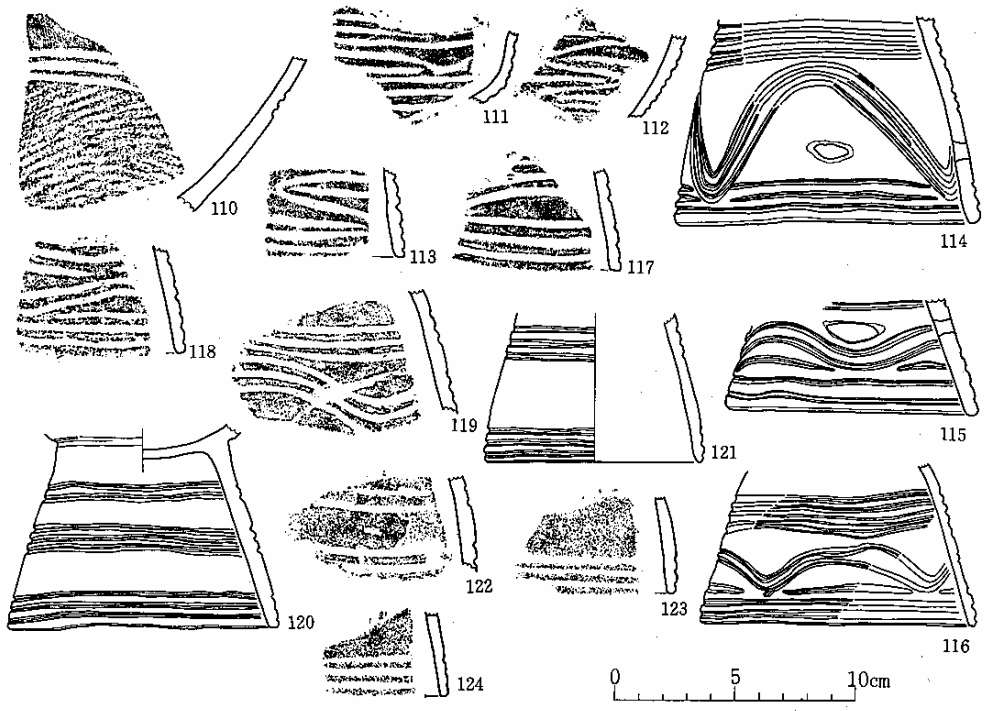
第15図　出土遺物・浅鉢形土器(1)



第16図　出土遺物・浅鉢形土器(2)、高坏形土器(1)



第17図　出土遺物・高坏形土器(2)



第18図　出土遺物・高坏形土器（３）

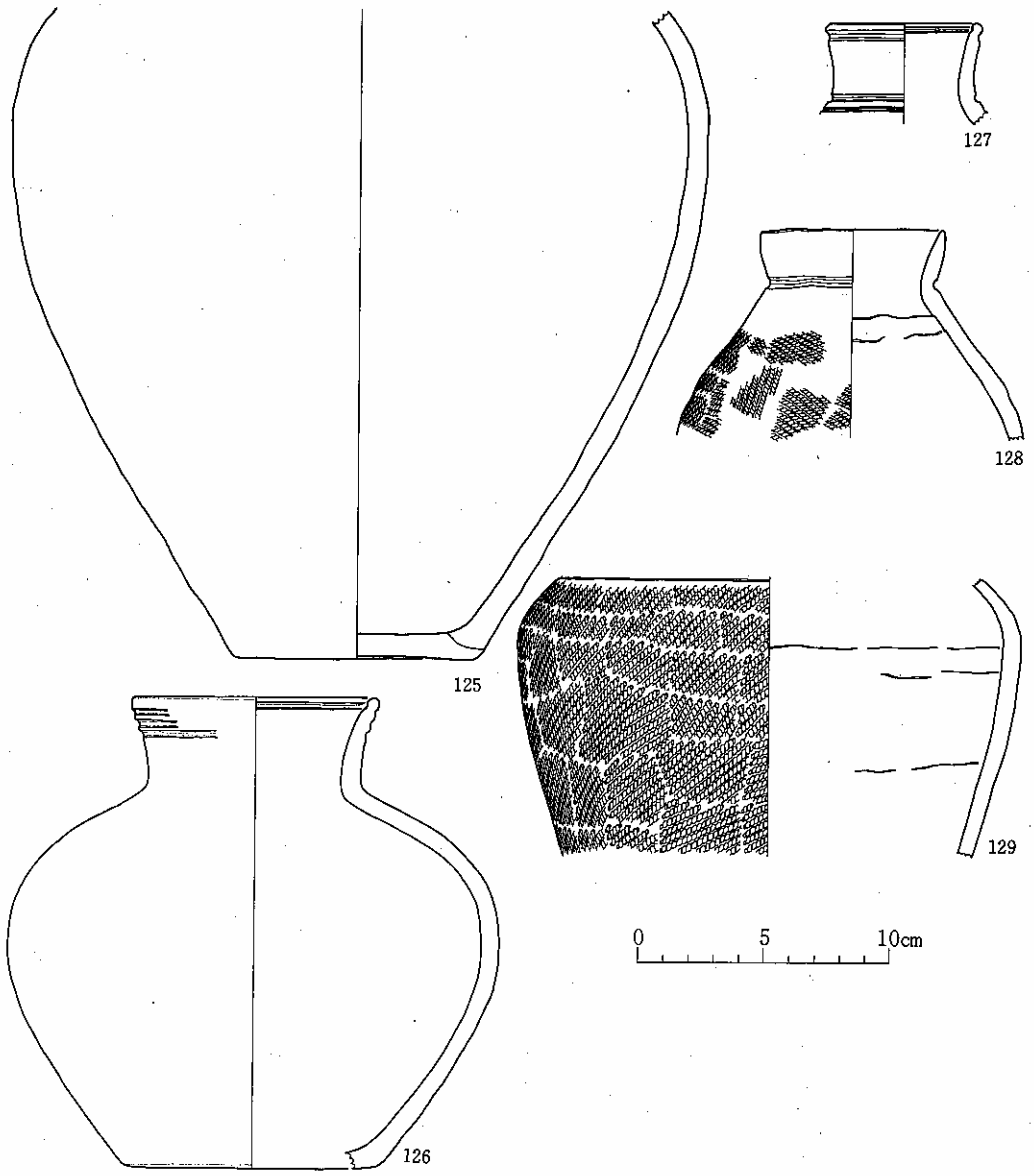
が施されている。111･112の文様は不明である。102･109の沈線内には丹塗りの痕跡が認められる。

台部資料

台部は長く、わずかに開く。多少ふくらみをもつものが多いが、直線的なものもある。113は反転する沈線とその中に一条の沈線を加えたエ字状文が施文されている。114～119は上下端に沈線を引き、その間に二、三条の沈線によって波状文が描かれる。114～116は波底間に沈線が加えられ、114・115では楕円形の窓が開いている。文様単位は114が3単位、115・116が4単位と推定される。120～124は平行沈線文がみられ、120では3段、121では2段に施文されている。114～116・120の沈線内には丹塗りの痕跡が認められる。

〈壺形土器〉

125は口縁部を欠く。肩が張り、下半は直線的に外傾する。体部は無文である。126は口頸部が弱く外反し、体部上半が大きく内弯して下半は直線的に外傾する。口縁部には三条の沈線がみられるが、平行沈線文かエ字状文になるものかは不明である。口縁部内面にも一条の沈線が巡り、体部は無文である。127は口頸部破片で、口縁上部内外面に一条、頸部に二条の沈線が巡る。128は口頸部が短く外傾し、体上部はゆるやかに内弯する。頸部に一条の沈線、体部



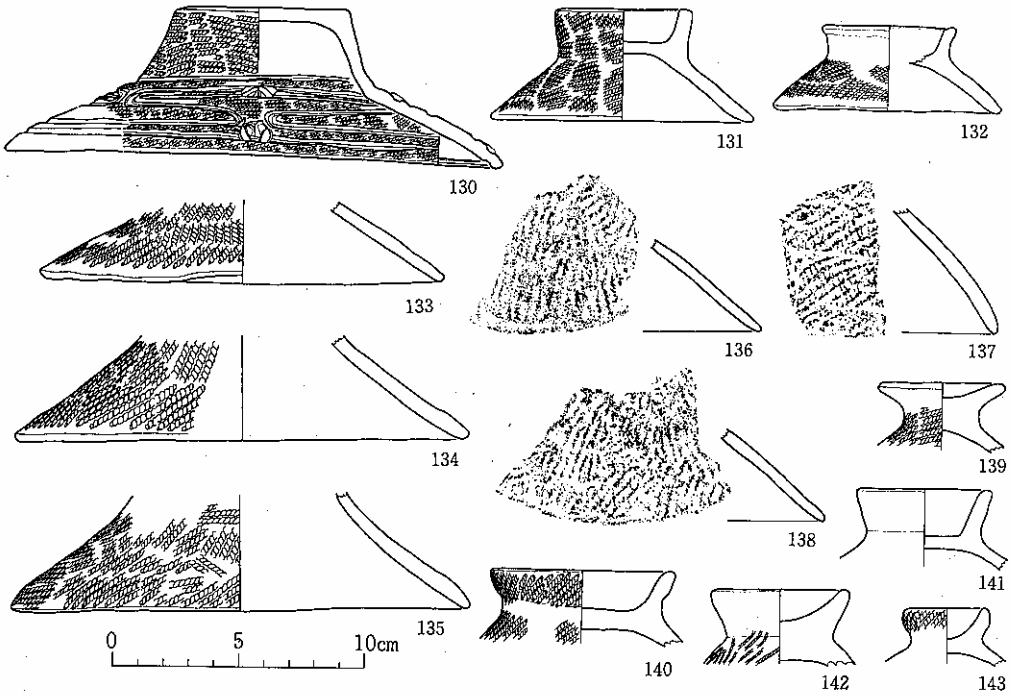
第19図　出土遺物・壺形土器

には縄文(LR)が施されている。129は体部破片である。肩が張り体部は外形する。縄文(LR)が施されて捻り破片上端に沈線の一部がみえる。

〈壺形〉

口縁部資料

a　体部出屈折するもの(130)



第20図　出土遺物・蓋形土器

天井部は平坦で、体部中ほどが屈折し、それより上は弱く、下は強く外傾して口縁にいたる縄文(LR)を地文として屈曲部から口縁部にかけてエ字状文が施文されている。エ字状文は上下を沈線で区画した間に反転する沈線を横位に連続させ上半にのみ中に一条の沈線を加え、この沈線の中央とそれに対応する下の区画沈線の一部を彫去して両側に盛り上げている。文様は3単位である。口縁部内面にも一条の沈線がみられる。

b　体部、口縁部が強く内傾するもの(131～138)。

131・132は他より小形で台状のつまみがつく。口縁部、体部に縄文(LR)が施され、131は、つまみまで及ぶ。133～138は口縁部破片である。縄文(LR)が施されている。

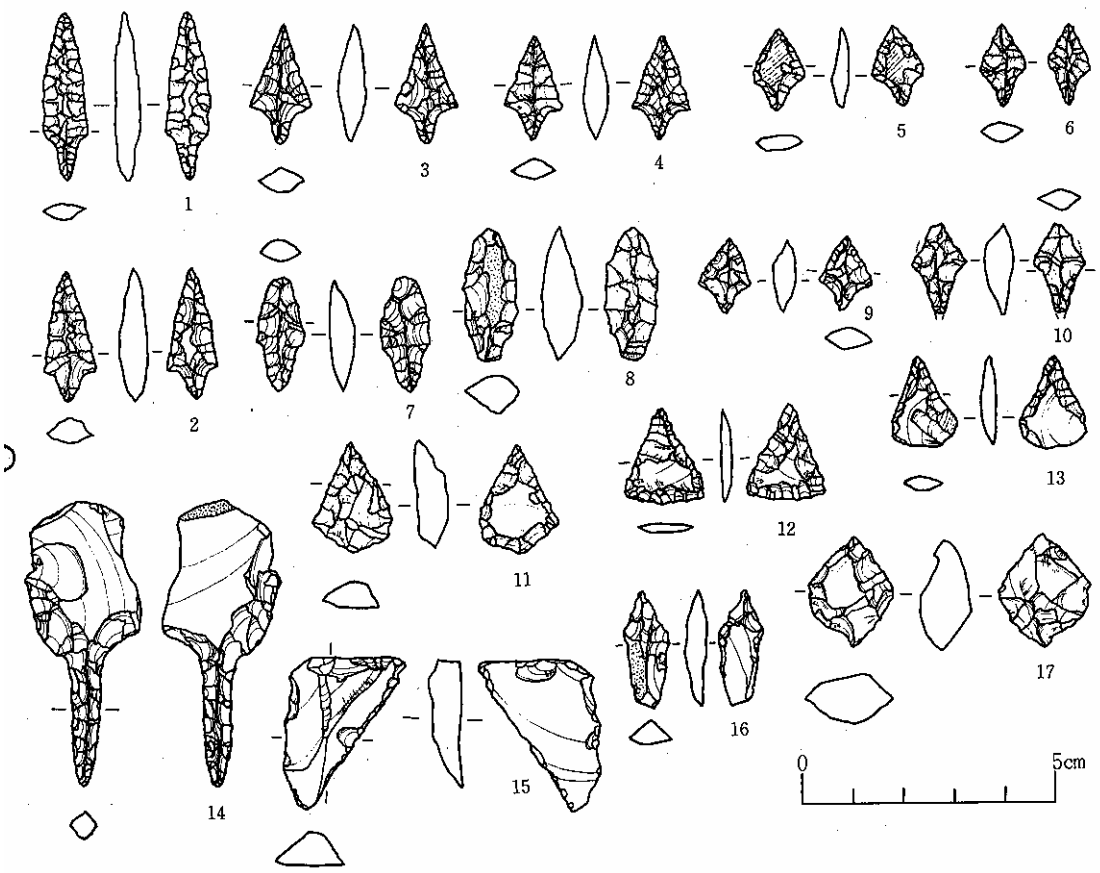
つまみ破片

139～143は、つまみが台状を呈するが細部の形態的特徴、大きさは多様である。139は体部、140は体部とつまみに、143はつまみに縄文(LR)が、142は体部に撚糸文(R)がみられる。

(2)石器

石鏃(1～13)

1～10は有茎で、基部は「Y」字状につくられるが、8は不明瞭である。尖頭部が長いもの



1	F21—2b	4	E20—3	7	E21—3	10	F21—3	13	I2b—3	16	E20—3
2	H25—3	5	I25—3	8	H24—3	11	I2b—2b	14	I25—3	17	I25—2b
3	F21—3	6	E20—3	9	I25—3	12	H25—3	15	F21—3		

第21図 出土遺物・石器

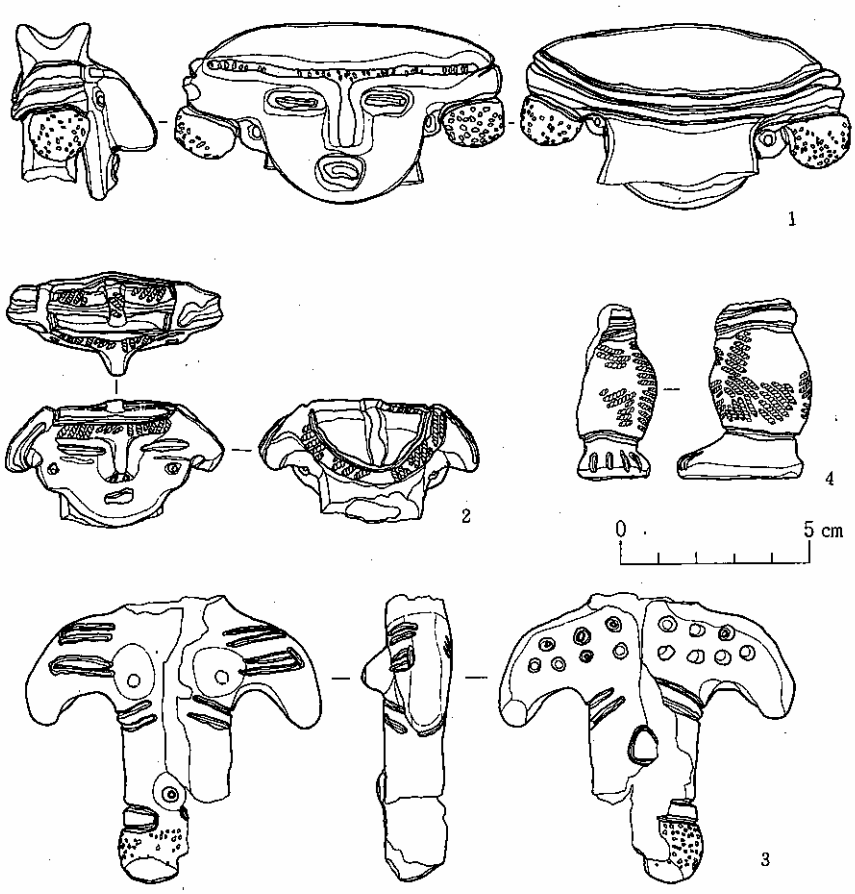
と、短く基部程度のものとがある。調整は両面に細かく施されているが、5・8では中央まで及ばない。11～13は基部がややふくらむ程度のものである。縁辺に調整の行われるものが多い。

石錐(14)

横長剥片を使用している。尖頭部の断面は菱形である。つまみの尖頭寄り縁辺と尖頭部全体に調整が施されている。

不定形石器(15～17)

16・17は先端を尖頭状につくり出している。荒い調整がみられる。15は縁辺にわずかな調整が加えられている。



第22図　出土遺物・土偶

(3)土偶

頭部が2個(1・2)、胴・脚1個(3)、脚1個、計4個出土している。1～3は遺物包含層第3層、4は表土から出土している。点数が少いのでここで一括する。

1：頭部。横幅が広く平板で中実である。頭頂部は前後二又に分かれる。眉は隆線で、その中央から鼻へ連続して鼻は細く高い。鼻孔は沈線で表現されている。目、口は楕円形に粘土を貼付し、沈線を引いている。顎丸い。耳は小さく孔が開けられ、その外側に髪を表現したと思われる丸いふくらみがつく。眉と髪には細かな刺突が施され、側・後頭部には三本の沈線がみられる。

2：頭部。平板だが中空である。頭頂部には前後方向に三本の隆線と横の沈線が施されている。眉はわずかに高まり上部に沈線が引かれている。鼻は細く高い。鼻孔は沈線で表現されている。目、口は沈線が引かれ、目の下には沈線状の細い線がみえる。耳はわずかに張り出す程度で、孔が開いている。耳の外側はふくらませている。後頭部には弧状の隆線と垂直の隆線がみられる。眉、頭頂部、後頭部には縄文(LR)が施されている。

3：胴から脚部。板状である。なで肩で腕は短い。胴は直線的で脚は短い。乳房は大きくふくらみをもち、へそは丸く盛り上がり中央が小さく凹む。肩、乳房の下、脚上部に二本対の沈線が走り、背には竹管による刺突がみられる。胴裏側には円形の沈線が引かれ、脚には細かな刺突が施されている。なお、体内には芯が抜けたような細い穴が上下にみられる。

4：脚。中空である。ふくらはぎがふくらみ、足は写実的で沈線によって五本の指を表現してい脚上・下部に沈線が引かれ、縄文(LR)が施されている。

1～4いずれも丹塗りの痕跡がみられる。

4．表土･層位不明の遺物

(1) 弥生土器

〈深鉢形土器〉

a　頸部がくびれ、口縁部が内弯するもの(1)。

b・cより小形である。頸部は「く」字状にくびれ、口縁部はわずかに内弯する。縄文(LR)を地文とし、口縁上部と頸部に二条の沈線が巡り、その間に鋸歯状沈線が施文される。また、沈線、縄文内に丹塗りの痕跡が認められる。

b　頸部がくびれ、口縁部が外反、外傾するもの(2～15)。

2～4は小波状口縁、5～15は平口縁である。口縁部は無文、体部に縄文(LR)が施されている。

c　口頸部が屈曲なく立ち上がるもの(16～25)。

口縁部は内弯気味のもの、直立するもの、外傾するものがある。口縁部、体部に縄文(LR)がみられる。

26は底部資料である。体部に縄文(LR)がみられる。

〈浅鉢形土器〉

a　頸部が肥厚するもの(27)。

口縁部、体部は内弯気味に立ち上がる。他に較べて大形である。口頸部に二条、口縁部内面に一条の沈線がみられる。体部には縄文(LR)が施されている。なお、外面一部に炭化物が付着している。

b　体部中央がくびれるもの(29)。

くびれより上は外反する。口縁部から体部上半に反転する沈線が入り組んだエ字状文が描かれている。体部下半を欠く。

c　口縁部、体部が外反気味に外傾し小波状口縁のもの(28)。

上下を沈線で区切り、その間に左右対象と思われる曲線的な沈線と充填縄文によって文様が

描かれている。口縁部内面にも一条の沈線が巡る。

ｄ　口縁部、体部が外反気味に外傾し平口縁のもの(30・31)。

30の文様は不明である。31は口縁部に一条の沈線がみられ、体部に縄文(LR)が施される。32・33は体部資料である。32は沈線と磨消縄文、彫法によって文様が描かれている。33は沈線による曲線的な区画と、区画外の充填縄文とによる文様がみられる。

〈高坏形土器〉

坏部資料

a　口頸部が屈曲し、波状口縁で突起がつくもの（34～40）。

頸部がくびれて口縁部が外反あるいは外傾する。突起は頂部が二分した山形のものと、頂部を肥厚させたものとがある。突起部以外の口縁部上端に沈線が走る。

文様全体が判明するのは35だけである。体部上半に文様があり、上下を沈線で区画した間に二条の沈線を斜行させ、その交点を彫去して両側に盛り上げたエ字状文を施文している。文様は4単位である。

34は文様上半が残存する。斜行する沈線が一条であること以外は33と類似する。33・34・38の沈線内には丹塗りの痕跡が認められる。

ｂ　口頸部が屈曲し平口縁のもの（41～47）。

突起はつかない。頸部がくびれて口縁部が外傾する。41は文様全体は不明であるが、上部は沈線の一部を彫去し、下部に反転する沈線によるエ字状文がみられる。42～44エ字状文と思われ、45・46は三条の平行沈線がみられる。42は沈線内に丹塗りの痕跡が認められる。

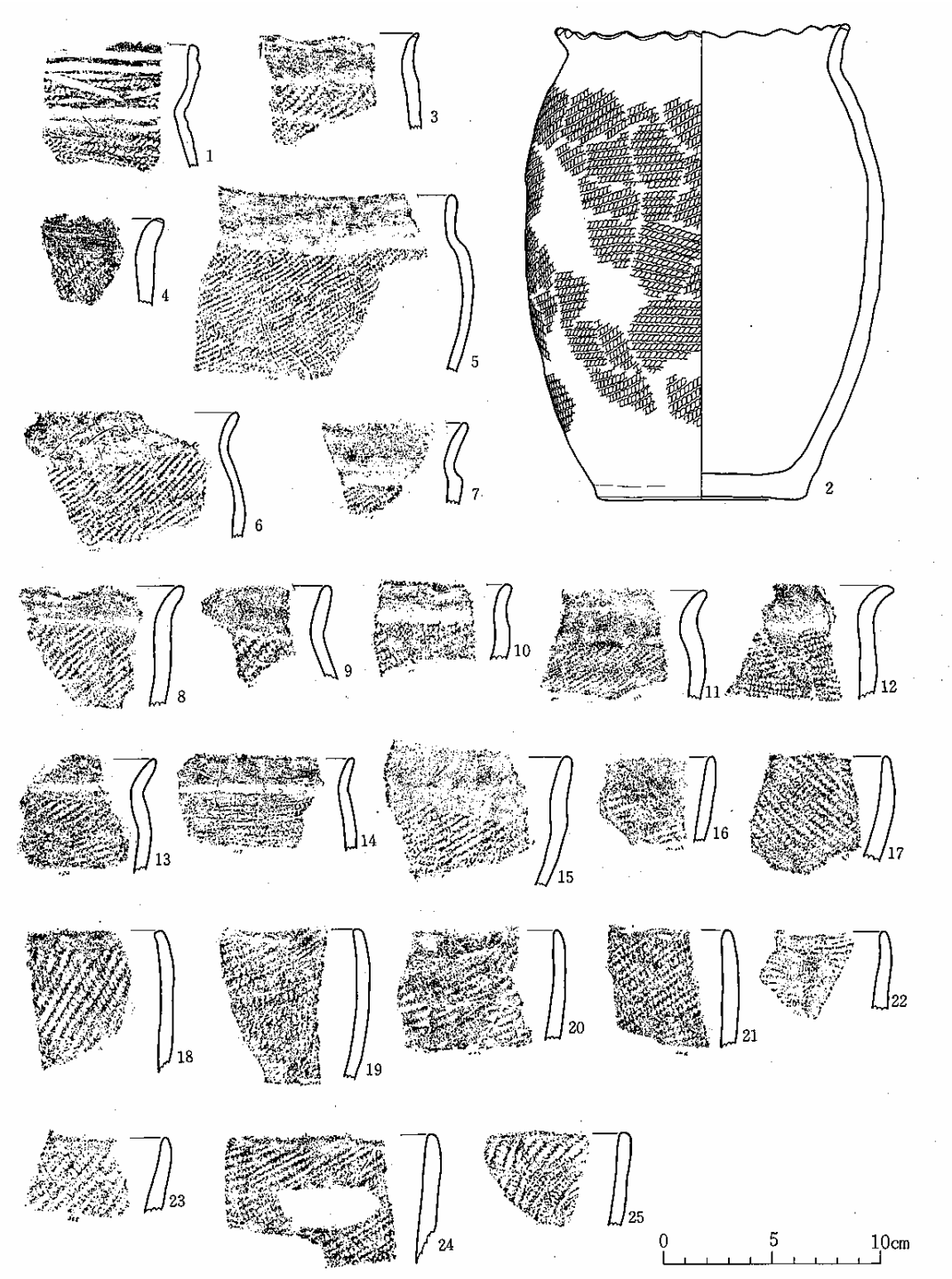
台部資料(47～55)

わずかにふくらみをもって開くものが多いが、直線的なもの、外反気味のものもある。47～49は波状文が、50～54は平行沈線がみられる。

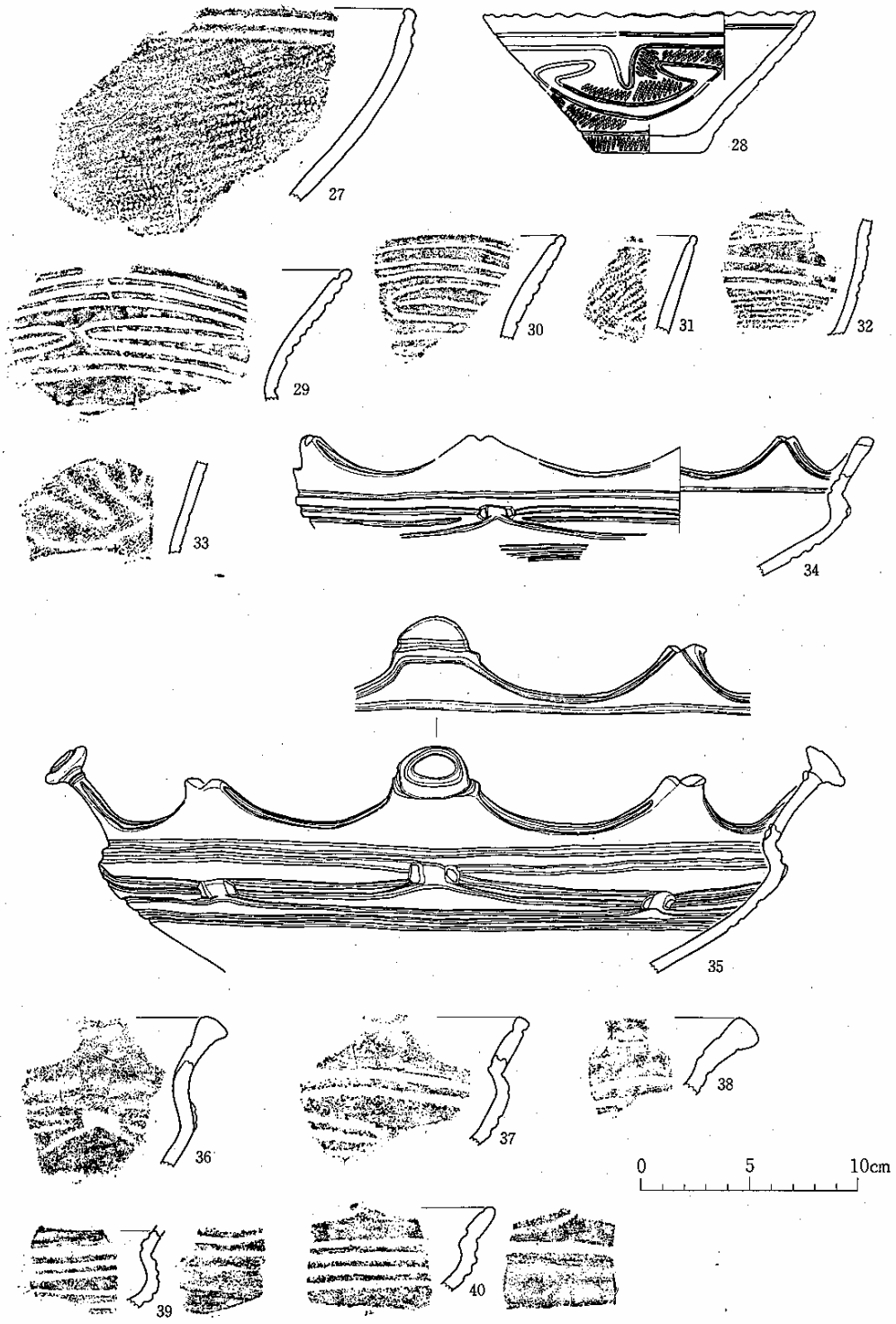
55は波高の低い波状沈線を、波頂と波底を対座させて多段に描き充填縄文（LR）を施している。沈線内に丹塗りの痕跡が認められる。

〈壺形土器〉(56～59)

56は口縁部が外反し、頸部がくびれて隆帯がめぐる。体部は中央か張り出して逆「く」字状を呈する。文様は口縁上部と体部にみられる。口縁上部には平行沈線の一部を彫去して両側に粘土を盛り上げたエ字状文がみられる。体部には磨消縄文(縄文ののちミガキ)を伴うエ字状文が描かれている。上下に数度反転させ、さらに横に続く沈線と、その中に一条の沈線を加えている。加えた沈線の中央部は彫去し、口縁部文様の彫去部に対応する頸部隆帯下部と体部の沈線下端にも彫去して両側に粘土を盛り上げている。磨り消しは一条の沈線が加えられた部分に行われている。縄文はLRであり、頸部隆帯上にもおよぶ。文様は3単位である。体部下端、



第23図　表土出土他（深鉢形土器）



第24図　表土出土他（浅鉢・高坏形土器）

第25図　表土出土他（高器・壷・蓋・鉢形土器・小形手捏土器）

口縁上部内面にも一条の沈線がめぐる。

57･58は口縁部破片である。57には平行沈線の一部を彫去したエ字状文が、58は平行沈線がみられる。

59は体上部の破片である。沈線と充填縄文手法とによって左右対象の曲線的文様が施文されている。56・59には丹塗りの痕跡が認められる。

〈壷形土器〉(60)

口縁部破片である。縄文(LR)が施されている。

(2)時期不明の土器

61は鉢形土器であ孔口縁菩厘が内省し、体部は内省気味に夕噸する。縄文(LR)が施されている。

62は小形土器である。丸底で内弯気味に立ち上がる。

石器

石鏃(1～11)

有茎の鏃である。1～7は基部のえぐりが明瞭で「Y」字を呈す。1～4は尖頭部が長く、5～7は短く基部と同程度である。8はえぐりが片側にのみみられる。9～11はえぐりがなく基部は「V」字状を成す。9は細長く、10・11は短い。

石匙(12・13)

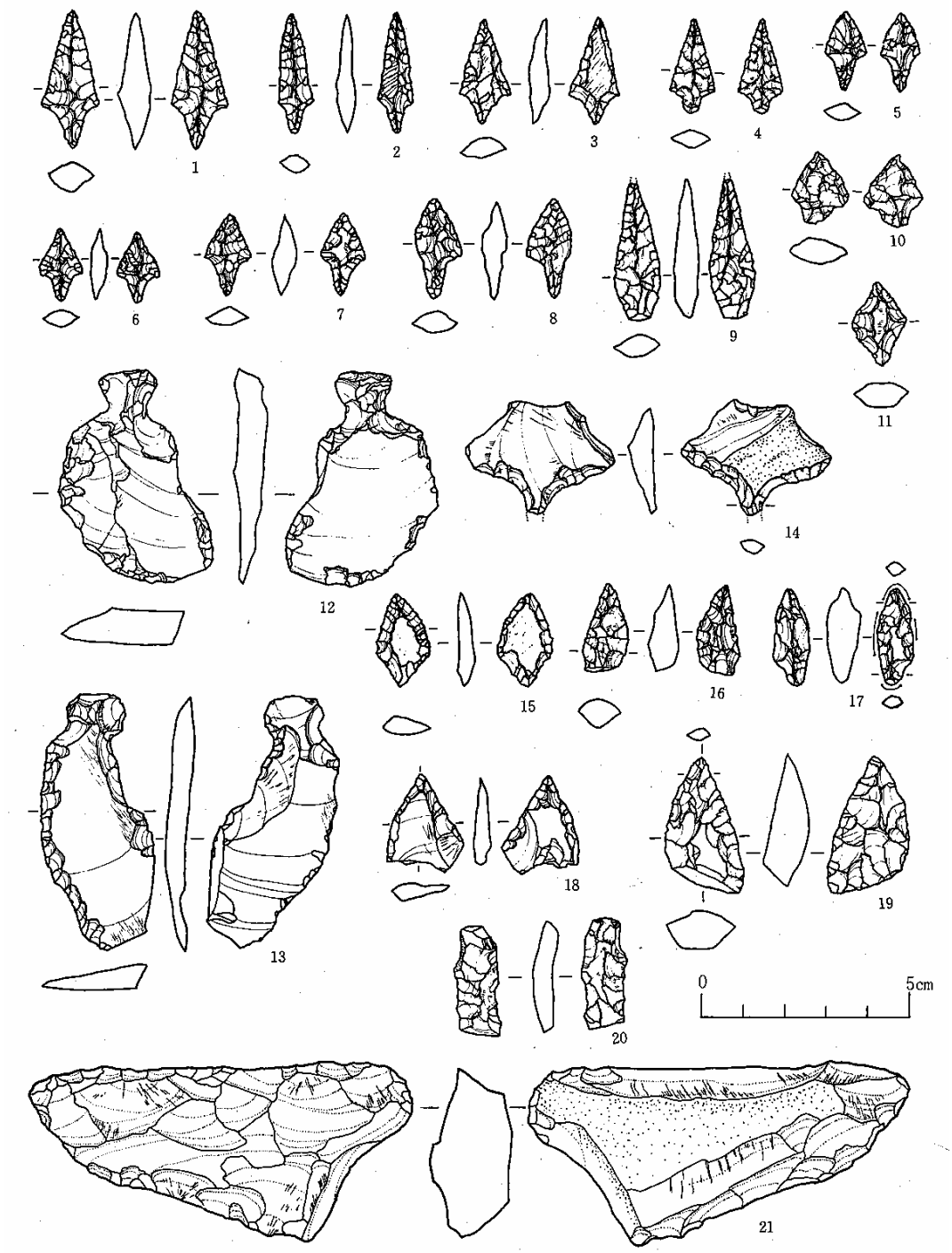
縦長の剥片を使用している。全体に調整は荒く、縁辺の一部にのみ認められる。

石錐(14)

先端を欠く。尖頭部の断面は菱形である。つまみの調整は尖頭部寄りの縁辺にのみ施されている。

不定形石器(15～21)

15～19は先端を尖頭状につくり出している。調整は16・17・19のように全面に及ぶものと、15・18のように縁辺にのみ施されるものとがある。17は摩滅している部分が多い。15～17は石鏃の可能性がある。20は細長い棒状のものである。上・下端を欠く。両面金体に調整が認められる。21は欠損している。大形で荒い調整が施されている。



1	I 25－1	4	X－X	7	X－X	10	X－X	13	D18・19－1	16	H 24－1	19	G 23－1
2	F 23－X	5	G 24－1	8	X－X	11	E 20－1	14	G 25－1	17	X－X	20	H 24－1
3	X－X	6	I 25－1	9	R 30－1	12	X－X	15	H 26－1	18	I 25－1	21	X－X

第26図　表土出土他・石器

表2　弥生時代の包含層出土土器

図No.	地区・層位	器形	文様	図No.	地区・層位	器形	文様	図No.	地区・層位	器形	文様
1	I-25 3層	深鉢 A類(a)	h (縄文 LR)	49	D-19 2 b層	深鉢 D類	(縄文 LR)	97	G-24 2 b層	高坏 A1類	b1 or b2
2	G-23 3層	〃 A類(b)	(〃 LR)	50	I-25 3層	深鉢底部	(〃 LR)	98	G-23 3層	〃 A1類	
3	I-25 3層	〃 (B類)	g(i)(〃 LR)	51	G-23 3層	〃		99	G-24 2 b層	〃 A1類	
4	H-24 3層	〃 C1類	(〃 LR)	52	G-23 4層	〃	(木葉底)	100	E-20 3層	〃 A1類	a1 (縄文 LR)
5	H-25 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	53	H-25 3層	〃	(〃)	101	H-25 3層	〃 A1類	g
6	D-19 2 b層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	54	F-21 3層	〃	(〃)	102	F-24 2 b層	〃 体部 (A類)	a +b1
7	E-20 3層	〃 C1類(b)	(〃 R)	55	H-24 3層	〃	(〃)	103	F-24 3層	〃 A1類	
8	E-20 2 b層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	56	D-19 2 b層	〃		104	J-25 3層	〃 A1類	g+ (縄文 LR)
9	E-20 3層	〃 C1類	h (〃 LR)	57	G-23 2 b層	〃		105	I-25 3層	〃 A1類	g+g (〃 LR)
10	E-20 3層	〃 C1類	(〃 LR)	58	F-23 2 b層	〃	(木葉底)	106	G-23 3層	〃 A1類	g+g
11	E-20 3層	〃 C1類(a)	(〃 LR)	59	H-25 2 b層	〃	(〃)	107	I-25 3層	〃 B類	j2 (縄文 LR)
12	J-26 2 b層	〃 C1類(a)	(〃 LR)	60	E-20 2 b層	浅鉢 A類(a)	h (縄文 LR)	108	I-25 3層	〃 B類	j2 (縄文 LR)
13	I-25 3層	〃 C1類(a)	(〃 LR)	61	G-23 3 層	〃 A類(b)	b2 (〃 LR)	109	I-25 3層	〃 体部 (A類)	(〃 LR)
14	J-26 2 b層	〃 C1類(a)	(〃 LR)	62	E-20 3層	〃 A類(b)	g (〃 LR)	110	H-25 3層	高坏体部	(〃 LR)
15	I-25 3層	〃 C1類(a)	(〃 LR)	63	E-20 3層	〃 A類(b)	g (〃 LR)	111	G-23 3層	〃	
16	E-21 3層	〃 C1類(a)	(〃 LR)	64	E-20 3層	〃 A類(b)	g (〃 LR)	112	H-24 2 b層	〃	
17	J-26 2 b層	〃 C1類(a)	(〃 LR)	65	I-25 3層	〃 A類(b)	g (〃 LR)	113	I-25 3層	高坏台部	b1
18	F-20 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	66	D-21 3層	〃 A類(b)	g (〃 LR)	114	F-23 2 b層	〃	f1
19	I-25 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	67	E-20 3層	〃 体部 (A類)	g (〃 LR)	115	I-25 3層	〃	f1
20	E-20 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	68	F-22 3層	〃 CII類(a)	b1 (〃 LR)	116	H-24 3層	〃	f1
21	E-20 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	69	G-24 3層	〃 CII類(a)		117	I-25 3層	〃	f1
22	H-25 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	70	G-26 2 c層	〃 CII類(a)		118	J-25 3層	〃	f1
23	I-25 3層	〃 C1類(b)	(L〃 LR)	71	J-26 2 b層	〃 CII類(a)		119	H-25 3層	〃	f1
24	H-25 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	72	J-26 2 b層	〃 CII類(b)	b1 (縄文 LR)	120	E-22 3層	〃	g
25	I-25 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	73	E-21 3層	〃 CII類	g (〃 LR)	121	H-25 3層	〃	g
26	E-20 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	74	H-25 2 b層	〃 CII類(b)	g (〃 LR)	122	H-24 2 c層	〃	g
27	F-21 3層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	75	E-20 3層	〃 CII類(b)	h (〃 LR)	123	H-25 2 b層	〃	g
28	H-24 2 c層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	76	I-25 3層	〃 CII類(b)	b1	124	H-24 2 b層	〃	g
29	J-26 2 b層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	77	J-26 3層	〃 CII類(b)		125	H-25 2 b層	壺 体部 (B類)	無文
30	I-26 2 b層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	78	J-26 2 b層	〃 CII類(b)	g (縄文 LR)	126	G23 24 3層	〃 (A類)	平行沈線
31	H-25 2 b層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	79	I-25 3層	〃 C1類		127	F-21 3層	〃	g
32	H-24 2 b層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	80	G-24 3層	〃 C1類		128	I-25 3層	〃 (C類)	h (縄文 LR)
33	I-25 3層	〃 D類	平行沈線	81	E-20 3層	〃 CIIii類	b1	129	H-25 3層	〃 体部 (B類)	沈線(〃 LR)
34	E-20 3層	〃 D類	(〃 LR)	82	J-26 3 b層	〃 CIIii類	e2	130	H-25 3層	蓋 A類	c2 (〃 LR)
35	E-20 2 b層	〃 D類	(〃 LR)	83	E-20 3層	〃 体部 CII類	e1 (縄文 LR)	131	I-25 2 b層	〃 B類	(〃 LR)
36	F-23 2 b層	〃 D類	(〃 LR)	84	I-25 3層	〃 B類	d3	132	J-20 3層	〃 B類	(〃 LR)
37	H-25 3層	〃 D類	(〃 LR)	85	G-24 2 b層	浅鉢底部		133	I-25 3層	〃 B類	(〃 LR)
38	H-24 3層	〃 D類	(〃 LR)	86	D-21 3層	〃		134	E-20 2 b層	〃 B類	(〃 LR)
39	I-25 3層	〃 D類	(〃 LR)	87	I-25 3層	〃		135	E-29 2 b層	〃 B類	(〃 LR)
40	I-25 3層	〃 D類	(〃 LR)	88	J-25 3層	高坏 A1類	a2	136	I-25 3層	〃 B類	(〃 LR)
41	H-24 3層	〃 D類	(〃 LR)	89	I-25 3層	A1類	b2	137	G-24 3層	〃 B類	(〃 LR)
42	H-25 3層	〃 D類	(〃 LR)	90	E-20 3層	A1類	b2	138	I-25 3層	〃 B類	(〃 LR)
43	E-20 3層	〃 D類	(〃 LR)	91	D-21 2 c層	A1類	b3	139	I-25 3層	つまみ	
44	I-25 3層	〃 D類	(〃 LR)	92	E-20 3層	A1類	b1 or b2	140	I-25 3層	〃	
45	I-25 3層	〃 D類	(〃 LR)	93	N-30 3層	A1類	b1 or b2	141	F-23 3層	〃	
46	E-20 3層	〃 D類	(〃 LR)	94	H-24 3層	A1類	b1 or b2	142	G-24 2 b層	〃	
47	J-25 3層	〃 D類	(〃 LR)	95	J-26 2 b層	A1類	b1 or b2	143	I-25 2 b層	〃	
48	F-21 3層	〃 D類	(〃 LR)	96	J-25 3層	A1類	b3				

表3　表土出土・他の土器

図No.	地区・層位	器形	文様	図No.	地区・層位	器形	文様	図No.	地区・層位	器形	文様
1	E-20 1層	深鉢 B類	i (縄文 LR)	22	H-24 1層	深鉢 D類	(縄文 LR)	43	H-24 1層	高坏 A1類	(b3)
2	X-X	〃 C1類	(〃 LR)	23	X-X	〃 D類	(〃 LR)	44	F-24 1層	A1類	
3	I-25 1層	〃 C1類	(〃 LR)	24	H-24 1層	〃 D類	(〃 LR)	45	I-25 1層	A1類	g
4	H-24 1層	〃 C1類	(〃 LR)	25	E-20	〃 D類	(〃 LR)	46	I-25 1層	A1類	g
5	X-X	〃 C1類(b)	(〃 LR)	26	X-X	深鉢底部		47	H-24 1層	高坏台部	f1
6	H-24 1層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	27	H-24 1層	浅鉢 A類(b)	g (縄文 LR)	48	F-22	〃	f1
7	X-X	〃 C1類(b)	(〃 LR)	28	F-24 1層	〃 C1類	j1 (〃 LR)	49	X-X	〃	f1
8	I-25 1層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	29	H-29 1層	〃 B類	b2	50	X-X	〃	g
9	H-20 1層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	30	X-X	〃 CII類(b)	b	51	E-20 1層	〃	g
10	L-25 1層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	31	X-X	〃 CII類(b)	h (縄文 LR)	52	X-X	〃	g
11	X-X	〃 C1類(b)	(〃 LR)	32	G-23 1層	〃 体部	磨消縄文	53	X-X	〃	g
12	X-X	〃 C1類(b)	(〃 LR)	33	H-23 1層	浅鉢体部	j3	54	X-X	〃	g
13	H-26 1層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	34	X-X	高坏 A1類	a	55	X-X	〃	f2
14	I-25 1層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	35	X-X	〃 A1類	a3	56	X-X	壺 A類	d1+c1(縄文LR)
15	I-25 1層	〃 C1類(b)	(〃 LR)	36	X-X	〃 A1類		57	H-24 1層	〃	d1
16	X-X	〃 D類	(〃 LR)	37	I-24-25 1層	〃 A1類		58	X-X	〃	平行沈線
17	F-24 1層	〃 D類	(〃 LR)	38	X-X	〃 A1類		59	X-X	〃 体部	j4 (縄文 LR)
18	X-X	〃 D類	(〃 LR)	39	G-23 1層	〃 A1類		60	X-X	蓋	(LR)
19	X-X	〃 D類	(〃 LR)	40	I-25 1層	〃 A1類		61	X-X	鉢	(LR)
20	F-24 1層	〃 D類	(〃 LR)	41	X-X	〃 A1類		62	X-X	小形手捏土器	
21	H-24 1層	〃 D類	(〃 LR)	42	X-X	〃 A1類					

Ⅳ　考　　察

1．縄文土器について

基本層位第Ⅲ層出土土器についてはすでに述べているので、ここでは遺物包含層出土土器を検討する。

(1)土器の分類

深鉢形土器と注口土器とがある。注口土器は1点だけ出土している。深鉢形土器は文様をもつもの(Ⅰ)と、もたないもの(Ⅱ)とがあり前者は口縁部形態と文様の種によって次のように分類される。

Ⅰ：文様をもつもの

A類…頸部が逆「く」字に折れて鍔のつくもの。橋状突起がつき、体部に連鎖状懸垂文がみられる(1、2)。

B類…頸部が逆「く」字に折れ、口縁部が外反するもの。低い突起がつき、口縁部無文帯をもつ(3～8)。

突起部の口縁部にみられる文様は、a：体部から無文帯が張り出し先端が隆線(3)
b：縦位の隆線(4)
c：沈線による渦文(5)
d：盲孔・ボタン状貼付を含む、沈練による渦文(6)
e：沈線の引かれた縦位の隆線(7、8)

の種類がある。

C類…口縁部が内弯するもの(9～12)。

C_{I}類…口縁部に無文帯をもつもの(9～11)。

体部文様は、a：間に刺突の加えられた沈線と隆線による渦文(9)
b：頸部が横位の隆線、体部が縦位の沈線(10)
c：頸部が横位の沈線、体部が縄文(11)
の3種類がある。b・cは全体の文様構成が不明である。

C_{II}類…口縁部に刺突文のみられるもの(12)。

D類…口頸部が単に外傾し突起のつくもの(13～16)。

D_{I}類…口縁部無文帯をもつもの（13、14）。

D_{II}類…口縁部に文様がつくもの(15、16)。a：隆線(15)、b：沈線の2種がある(16)。

E類…口頸部が単に外傾し突起のつかないもの(17～23)。

E_{I}類…口縁端部が肥厚するもの(17)。

E_{II}類…口縁端部が肥厚しないもの(18～23)。体部文様は四角に構成される。

E_{IIa}類…口縁部無文帯をもつもの(18～22)。

E_{IIb}類…口縁部に刺突が施されるもの(19～21)。

E_{IIc}類…口縁部にボタン状貼付のみられるもの(23)。

I:文様をもたないもの(24)

口頸部が単純に外傾する。口頸部、体部に縄文が施されている。

なお体部破片の文様は、a：隆・沈線にはさまれた無文帯が四角の区画をなすもの(25～30)。

b：間に刺突が加えられた平行沈線のもの(31、32)。

c：沈線にはさまれた無文帯による曲線文様のもの(33)。

d：重層して列をなす刺突文のもの(34、35)。

e：ボタン状貼付から斜行沈線が下り、渦文のみられるもの(36)。

の5種がみられる。これらのうちaはC_I類の、bはC_{II}類のbはC_{IIa}類の体部文様と文様施文方法が共通している。c・eは口縁部資料との対応関係が不明である。

注口土器(37)

体部破片が1点出土している。体部は算盤玉状になる。体上部の中位に注口がつき、ボタン状貼付、沈線、刺突による文様がみられる。

(2)土器の年代

縄文時代の遺物包含層出土土器は、その特徴から後期前葉の南境武(伊東信雄：1957・1981)に比定される。後期前葉の土器群については、ほかに宮戸Ｉb式(後藤勝彦：1968)が設定されており、さらに同型式の細分が検討されている(後藤勝彦：1974)。

またそれとは別に後期初頭の土器型式として門前式(吉田義昭:1960)、袖窪式(林・1965)が設定されており、後期前葉の土器群が細分される可能性をもっている。

本遺跡の土器群は宮戸Ｉb式以前とされる特徴を有しているが、その中でE_{IIa}類としたものについては同様な特徴をもつ土器群が沼津貝塚発掘資料に存在し門前・袖窪式以前に位置付けられるとする見解がある[注]。したがってE_{IIa}類土器は本来大木10式に属するものが混入したか、あるいは類似した土器が大木10式、後期初頭のいずれにも含まれ得るのか、のどちらかである可能性が残る。この点については基準となる資料の公表を待って判断することとしたい。

E_{IIa}類についての問題点を除けば、本遺跡の土器は、単層の包含層から出土しており、後期初頭の土器群としてまとまりをもったものと考えられる。

そして門前式、袖窪式いずれにも類似する土器を含んでいる。つまりA類は門前式そのままの土器であり、そのほかは袖窪式と共通する特徴をもつものが多い。

門前式土器の器形、文様構成の特徴は仙台湾周辺を中心とした宮城県内における中期後半の

土器が持つ特徴の系統からは生じ難いものである。またその分布範囲は現在のところ宮城県中央部までであり(田中・柳沢地：1981)、同時期と考えられる柴田町向畑遺跡(志間・芳賀：1974)、白石市菅生田遺跡(現在本報告作製中)の土器群中には認められない。宮城県以北の地域での変遷を検討する必要がある。

このように本遺跡の土器群は、宮戸Ｉb式以前であり遺跡の位置からすれば袖窪式に属する可能性が強いものと考えられる。またこれまで袖窪式と門前式との関係は明らかにされていなかったが、本遺跡での共伴関係から両型式に並行する時期のあることが考えられる。しかしなお本遺跡資料は量的に少く、袖窪式の内容や分布・地域性について今後さらに検討を続けることによってその位置付けを明らかにしなければならない。

注　藤沼邦彦氏のご敬示による。

2．弥生土器について

弥生土器は遺物包含層と表土などから出土している。ここではそれらを含めて検討を行う。土器の形態には深鉢形土器、浅鉢形土器、高坏形土器、壺形土器、蓋形土器がある。

(1)胎土・色調・器面調整

胎土は砂粒・白色雲母を含むが比較的緻密である。色調は高坏の一部に灰白色のものがみられる他は赤褐色・暗褐色･黒褐色を呈する。器面調整はナデとミガキがみられ、以下に述べる器形のうち、深鉢形土器C・D類、浅鉢形土器A類は主としてナデが、それ以外の器形はミガキが施されている。なお､文様の施文されている土器では丹塗りの施されているものもある。

(2)器形と文様の種類

器形の種類

口頸部、体部の特徴から次のように分けられる。

〈深鉢形土器〉

A類…頸部がくびれて体上部が張り出すもの(平口縁…a突起有、b突起無)

B類…頸部がくびれて口縁部が内弯するもの(平口縁)

C類…頸部がくびれて口縁部が直立、外傾するもの　Ⅰ小波状口縁

Ⅱ平口縁(a突起有、b突起無)

D類…屈曲のみられないもの(平口縁)

〈浅鉢形土器〉

A類…口頸部が屈曲するもの(平口縁…a突起有、b突起無)

B類…体部が屈曲するもの(平口縁)

C類…屈曲がなく全体に外傾するもの　Ⅰ波状口縁

Ⅱ平口縁……i外反気味(a突起有、b突起無)

〈高坏型土器〉　**iiそがれたように外反**

iii内弯気味

A類…頸部がくびれて口縁部が外反、外傾するもの　I波状口縁(突起)

Ⅱ平口縁

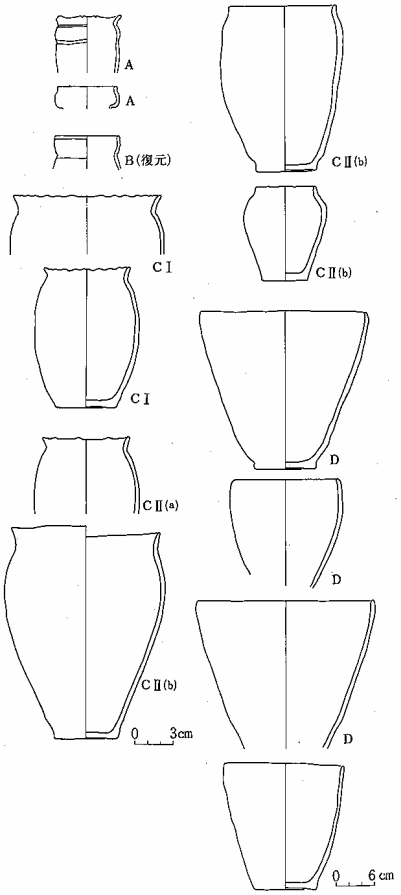
B類…全体に外傾するもの(突起)

〈壺形土器〉

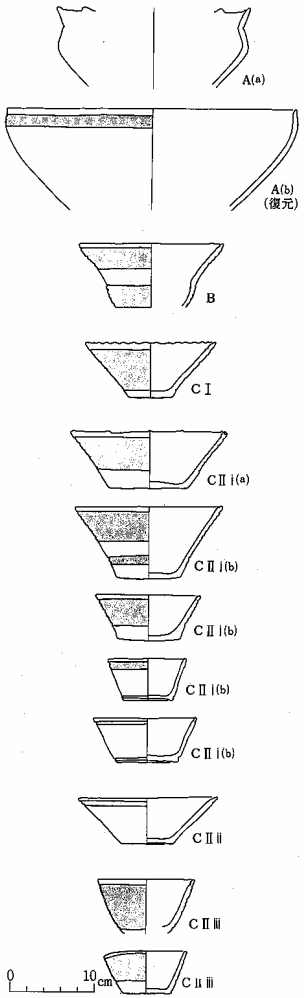
A類…肩が張り、体部の短いもの

B類…肩が張り、体部の長いもの

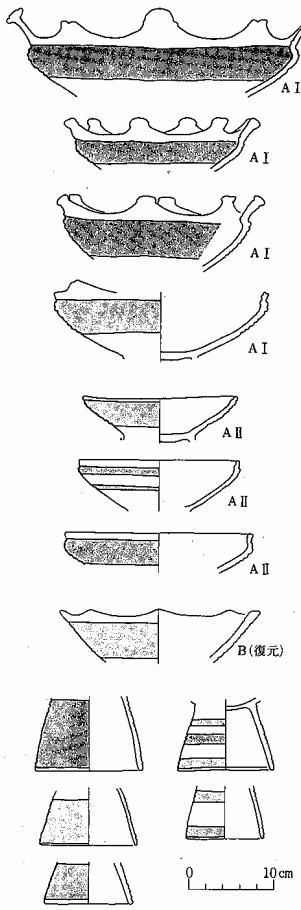
C類…なで肩のもの



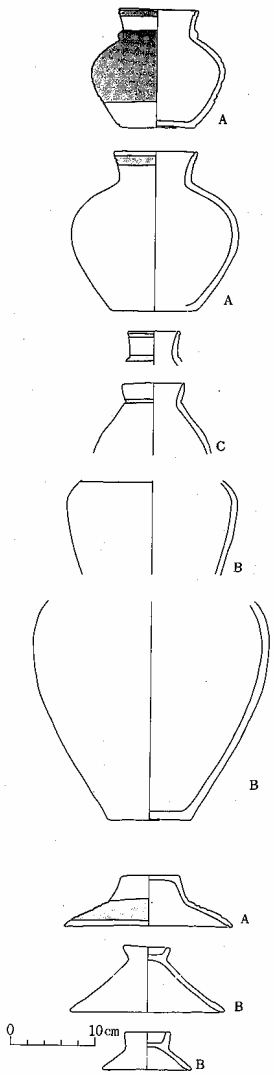
第27図　深鉢形土器の器形



第28図　浅鉢形土器の器形



第29図　高杯形土器の器形



第30図　壺・蓋形土器の器形

〈壺形土器〉

A類…体部が屈折するもの。口径は約20㎝である。

B類…口縁～体部直線的(つまみが付く)。口径が16～18㎝の大形と9～10.5㎝の小形がある。

文様の種類

本遺跡発見の弥生土器には文様をもつものと、縄文のみのものとがある。文様は主として沈線によって描かれており、それに彫去、および彫去した粘土の盛り上げの加わるものがあり、また、磨消縄文がみられる。

文様単位にはエ字状文、波状文、鋸歯状文、平行沈線文などがあり、それに地文としての縄文や磨消縄文の併用されるものもみられ、次のような種類になる。

エ字状文

a～dは変形エ字文といわれる文様である。

a　斜行する沈線によって扁平な三角形をつくり、その交点に彫去、粘土の盛り上げを行うものである。斜行する沈線の数、交点以外の部分での彫去の有無、三角形の底辺に沿って一条の沈線を加えるか否かで違いがみられ、

1：斜行する沈線が一条で、文点の中間にも彫去がみられ、底辺に沿う沈線が加えられないもの

2：斜行する沈線が二条で、交点以外の彫去がなく底辺に沈線が加えられるもの

3：斜行する沈線が二条で、交点以外に彫去がなく底辺に沿った沈線がないもの

の3種がある。

b　反転する沈線によって描かれるものである。

1：流水文状に横位に続き、中に一条の沈線が加えられるもの

2：斜行する部分が入り組むもの

3：2に類似して中に一条の沈線が加えられるもの

の3種がある。

c　反転する沈線が横位に連続し、一部に彫去がみられるものである。

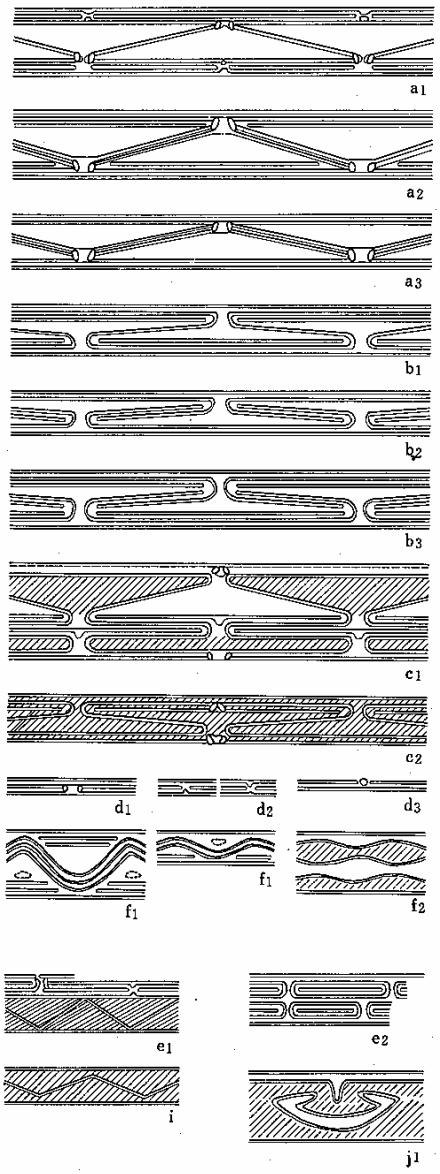
1：多段に反転し、上下端の対応する部分と中に加えた沈線の中間を彫去、粘土の盛り上げをして磨消縄文(縄文のちミガキ)が併用されるもの。

2：上位に加えた沈線の中間と、それに対応する下端とを彫去、粘土の盛り上げをし地文として縄文の施されているものがある。

d　平行沈線の一部を彫去しているものである。

1：粘土を盛り上げているもの。

2：π字文に類似するもの。



第31図　文様模式図

3：丸く彫去しているものである。

e　文様全体は判明しないが、a～eにみられないエ字状文をあつめた。

1：反転する沈線と沈線の一部を彫去したエ字状文がみられ、下位には縄文を地文とした鋸歯状文を配している。

2：一条の沈線を含んだ長楕円が二段にみられる。

波状文

f　二、三条の沈線が1組のもの(**1**)と一条のもの(**2**)とがある。

1：波頂、波底間に沈線を加えたもの。
　窓の開くものなどがある。

2：波頂部と波底部を対応させて多段に描き、磨消縄文(充填縄文)を併用している。

そのほかの文様

g　平行沈線文である。沈線は二、三条のものがあり、また2、3段に配されることがある。

h　一条の沈線文である。

I　鋸歯状文である。縄文を地文としている。

j　文様全体は不明であるが、曲線的な沈線と磨消縄文(充填縄文)によって文様が描かれているものである。

1：横「c」字状の文様

2：弧状沈線(第17図107・108)

3・4：曲線的な文様(3一第24図33、4一第25図59)

(3)分類一器形と文様の関係

器形ごとに施文されている文様をさらに施文部位を加えてみると次のようになる。

〈深鉢形土器〉

A類　○一条の沈線文(文様h)。施文部位は体部の張り出し部上･下端。

○縄文のみ。

鋸歯状文、一条の沈線文はいずれも縄文を地文としている。

B類　鋸歯状文(文様i)施行部位は口縁部、縄文を地文としている。

C類　C_{I}　○一条の沈線文(文様h)。施文部位は頸部。口縁部は無文、体部は縄文

○口縁部無文、体部縄文。

C_{II}　口縁部無文、体部縄文。

D類　○平行沈線による文様施文部位は口縁部～。

文様単位は不明である。

○全体に縄文。

〈浅鉢形土器〉

A類　○平行沈線の一部を彫去したエ字状文(文様d_1,d_2)。施文部位は頸部。

○平行沈線文(文様g)。頸部

○一条の沈線文(文様h)。頸部

いずれも体部は縄文である。

B類　○反転する沈線が入り組んだエ字状文(文様b_2)。施文部位は口縁部～体部上半、体部下半。

施文部位前者は体部下半を欠く破片、後者は口縁～体部上半もに文様がみられるが単位不明である。

○平行沈線の一部を丸く彫去したエ字状文(文様d_3)体部中央

体部下半には縄文がみられる。

C類　C_{I}　○充填縄文手法を用いた横「C」字状の文様(文様j_1)。施文部位は口縁部～体部。

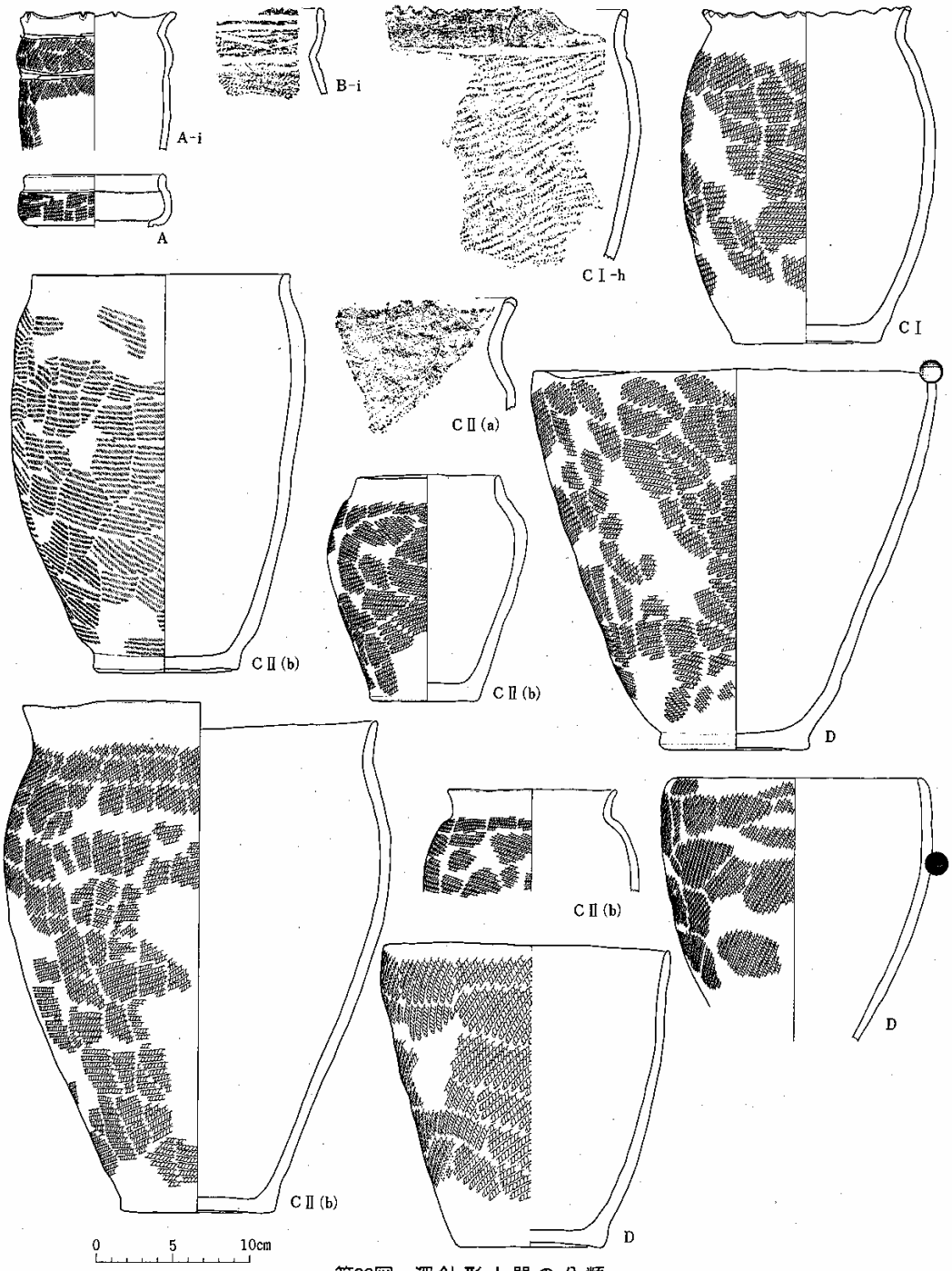
C_{II}　C_{IIi}・横位に続く、反転する流水文状のエ字状文(文様b_1)。口縁部～体部上半体部下半には縄文が施され、きらに平行沈線文の施文されるものもある。

・平行沈線文(g)。口縁部

これらには、体部下端に一条の沈線文が加わるものがある。

・一条の沈線文(h)。口縁部と体部下端

体部には縄文がみられる。



第32図　深鉢形土器の分類

C_{IIii}・平行沈線文(文様g)。施文部位は口縁部。

C_{IIiii}・反転して横位に続く流水文状のエ字状文(文様b_1)。施文部位は口縁部～体部上半。

体部下半は無文である。

・沈線を含んだ長楕円によるエ字状文(文様$_{e2}$)。口縁部～体部

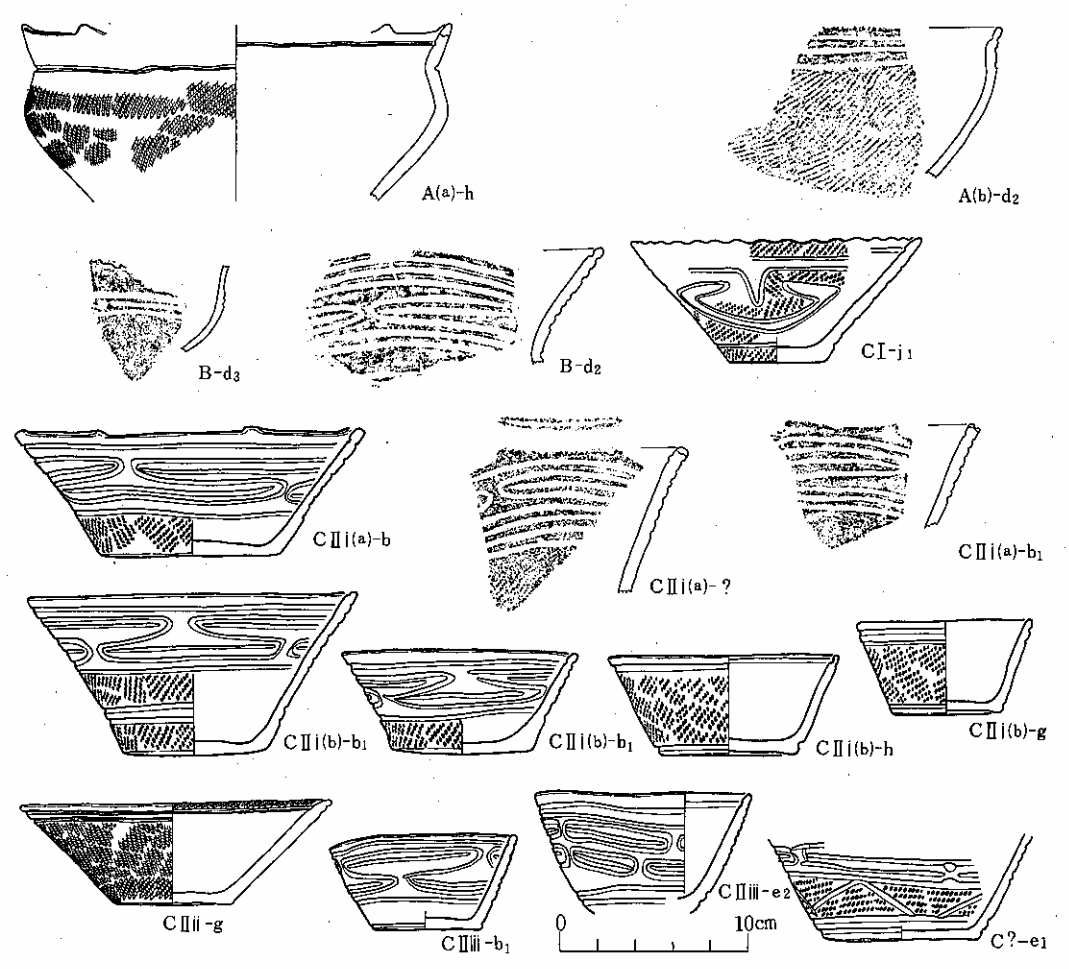
なお、浅鉢形土器の体部破片には文様$_{e1}$のみられるものがある。

〈高坏形土器〉

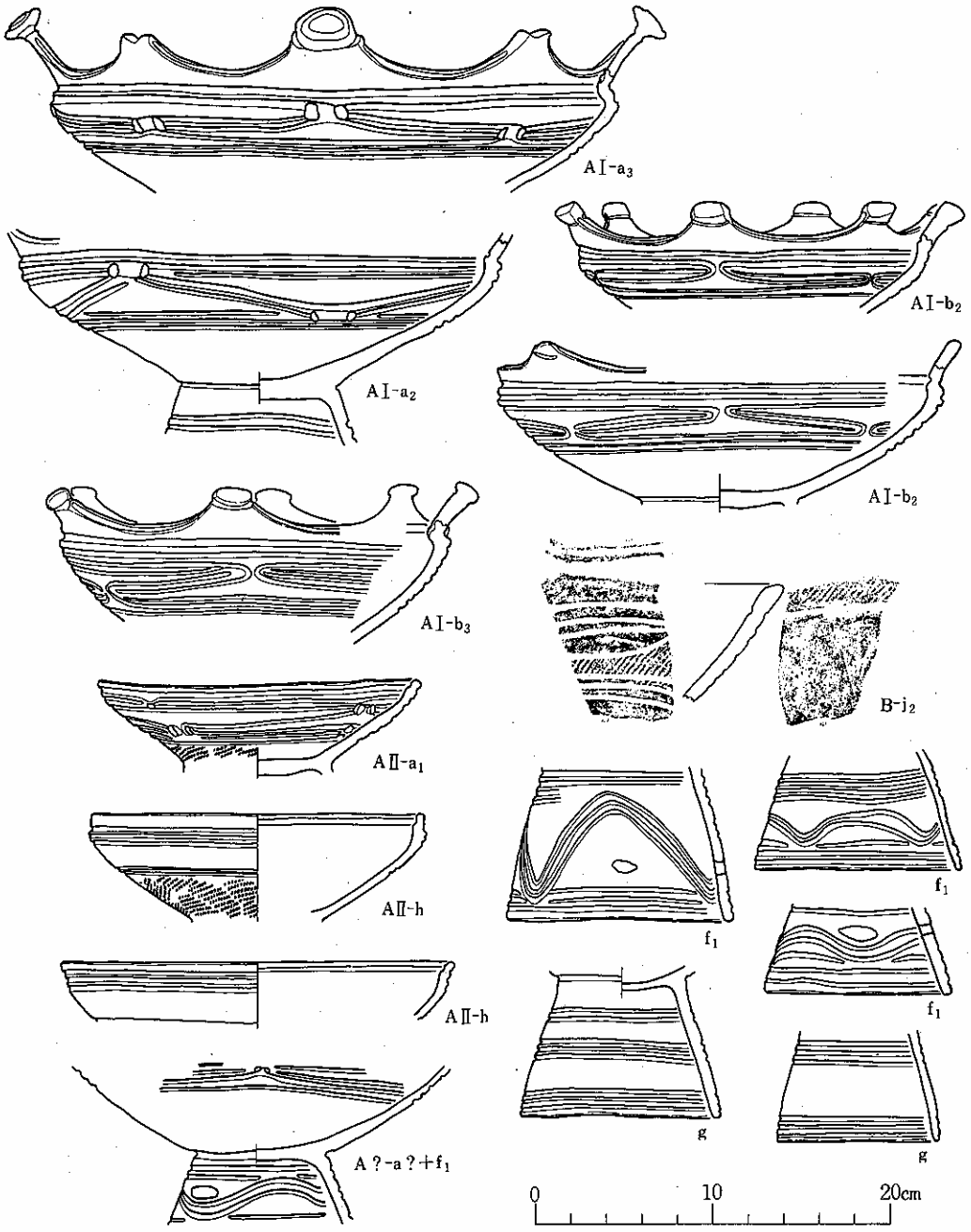
A類　A_I　○斜行沈線による三角形の交点を彫去、粘土盛り上げしたエ字状文(文様$_{a2}$、$_{a3}$)。施文部位は体部上半。

○反転する沈線が入り組んだエ字状文(文様b_2、b_3)。体部上半

○斜行沈線による三角形の交点を彫去、粘土盛り上げしたエ字状文(文様$_{a1}$)。施



第33図　浅鉢形土器の分類



第34図　高坏形土器の分類

文部位体部上半、体部下半には縄文がみられる。

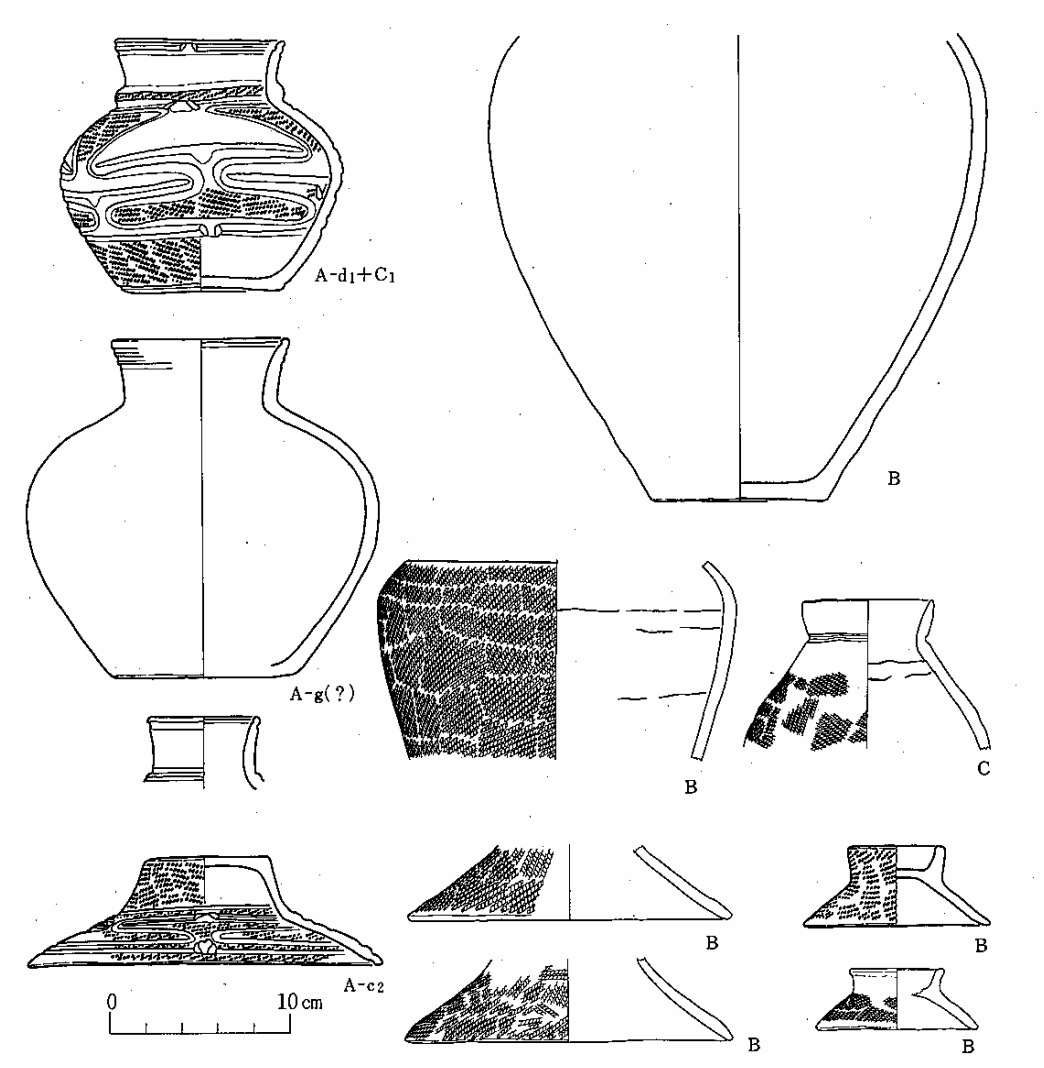
A_{II}　○平行沈線文(文様g)。施文部位は肩部と体部中央。

体部下半には縄文がみられる。

B類　○充填縄文手法を用いた弧状沈線文(j_2)。施文部位は体部上半。

体部下半と内面の口縁部に縄文がみられる。

なお高坏形土器の体部破片には台部の接合したものが1点あり、体上部に文様aに類した文様が、台部に波状文(文様f_1)がみられる。



第35図　壺・蓋形土器の分類

台部破片

エ字状文(文様b_1)、波状文(文様f_1,f_2)、平行沈線文(文様g)がみられる。

〈壷形土器〉

A類　○口縁部に平行沈線の一部を彫去、粘土盛り上げした文様b_1がみられ、頸部に縄文の施文された隆帯をもち、体部は磨消縄文手法を用いて多段に反転して横位に続く沈線文と一部を彫去、粘土盛り上げしたエ字状文(文様c_1)の施文されたもの。

○口縁上部に平行沈線、それ以下が無文のもの。

B類　○体部破片では体部に縄文のみられるもの、体部が無文のものがある。

C類　○口縁部が無文、頸部に一条の沈線文(文様h)、体部に縄文のみられるもの。

このほかに口頸部破片で、口縁上部と頸部に平行流線文(文様g)のみられるもの、口縁上。部に平行沈線を彫去、粘土盛り上げしたエ字状文(文様b_1)のみられるもの、口縁上部に平行沈線のみられるものがある。さらに、体部破片では充填縄文手法によって曲線的な文様の描かれるもの(文様j_4)、頸部に一条の沈線がある。

〈蓋形土器〉

A類　○縄文を地文とした、反転して横位に続く流水文状のエ字状文(文様c_2)。

B類　○縄文のみ。

(4)出土土器の組み合わせ

前項のように分類された土器の共伴関係を検討する。出土土器は前述のように遺物包含層、表土から出土している。これらのうちで層位的に共伴関係が検討し得るのは遺物包含層より出土した土器である。

遺物包含層は2層(第2・第3層)に大別されるが、各層の土器出土量をみると第3層が包含層出土の$^2/_3$を占める。

第2層と第3層から出土した土器をみると次のようになる。

第2層出土土器…深鉢形土器C_{II}類、D類、浅鉢形土器A類(文様h)、C_{IIi}類(文様b_1)、C_{IIiii}類(文様1_2)、高坏形土器A_1類(文様b_3)、台部(文様f_1,g)、蓋形土器、B類(縄文のみ)

第3層出土土器…深鉢形土器A類(文様h、縄文のみ)・B類(文様i)・C_1類(文様h、縄文のみ)・C_{II}類(縄文のみ)・D類(平行沈線による文様・縄文のみ)浅鉢形土器A類(文様b_2、g、h)・B類(文様d_3)・C_{IIi}類(文様b_1、g、h)・C_{IIii}類(文様g)・C_{IIiii}類(文様b_1)・体部破片(文様e_1)、高坏形土器A_1類(文様a_2、b_2、b_3)・AⅡ類(文様a_1、g)・B類(文様j_2)

・高林台部(文様b_1、f_1,g)、壺形土器(文様g、h)、蓋形土器A類(文様C_2
B類(縄文のみ)

第2d層出土土器は浅鉢C_{IIiii}類(文様$e_3$1点)を除く大半が、第3a層出土のものと共通していることは、その1点が粗雑なつくりの土器であることも考慮すれば第2b層と第3a層との間にある程度の時間的差はあるものの、両層出土の土器に一定期間内における共伴関係が成立するものと考えられる。

このほか、遺物包含層から出土していない土器は次のとおりである。

〈浅鉢形土器〉　A類(文様d_1)、B類(文様b_2)、C_1類(文様j_1)、体部破片(文様j_3)

〈高坏形土器〉　A_1類(文様a_3)、脚部破片(f_2)

〈壺形土器〉　文様c_1、d_1、j_4のみられるもの、縄文のみのもの

このように、弥生土器は遺物包含層出土のもの(第1グループ)とそれ以外のもので(第2グループ)とに分けられる。

表4　出土土器の組み合わせ

器形	深鉢							浅鉢													高坏																			壺			壺		計
	A		B	C_I		C_{II}		D	A		B	$C_{II}i$					$C_{II}iii$		C_{II}?	?	体部	A_I					A_{II}			B	体~台部	体部		台部			口縁部	体部			A	B	
文様	h	縄文	i	h	縄文	縄文	平行	縄文	d2	g	h	d3	b1	g	h	?	b1	e2	?	?	e1	a2	b2	b3	b?	?	a1	g	?	j2	a?+b1	a2	?	b1	f1	g	h	無文	縄文	無文	c2	縄文		
第2層						21		18			1		1	1		3				6				1	2	5			10		1		1		3	5		5	1	5		3		
第3層	1	1	1	1	2	30	1	7	1	5		1	1	1	1	2	1	1	2	4	1	1	2	1	3	7	1	4	7	1		1	2	1	9	9	2	5	1	3	1	8	
小計	2		1	54				25	7		1	14								10		22					22			1				27							1	11	
合計	83 (45%)								32 (17%)													45 (24%)															12(7%)			12(7%)		184

(5)第1グループの土器組成とその内容

第1グループの土器は遺物包含層出土の土器で構成される。包含層における出土量は口縁部資料でみると図示したもの、破片集計したものを合わせて205点、そのうち器形の判明したものは184点である。その中で浅鉢形土器C_{IIii}類は器形の特徴からみて明らかに時期の異るものであり、ここでは除外して、第2グループに含めて個別に検討を加えることにする。

〈深鉢型土器〉

83点、45%を占める。A類2点、B類1点、C類54点、D類26点となる。A類には一条の沈線文 (文様h)と縄文のみのものがある。B類には鋸歯状文(文様i)がつく。C類では、C_I類が3点あり、うち1点に一条の沈線文(文様h)がみられ、他は縄文のみである。C_{II}類は51点で頂部の二分された山形小突起のつくものが7点あり、口縁部が無文、体部が縄文である。D類は平行沈線のみられるものが1点、他は口縁部から体部に縄文が施される。

〈浅鉢形土器〉

32点、17%を占める。A類7点、B類1点、C_{II}類14点、他はいずれの器形か不明である。

A類は口頸部が屈曲する。山形の小突起がつくものもある。口頸部はゆるやかに屈曲する。頸部にエ字状文(文様d_2)の施文されているものが1点あるが、彫去の形は不整で、「π」字を成すものではない。ほかには平行沈線文(文様g)、一条の沈線文(文様h)がみられる。体部には縄文が施されている。

B類は体部中央がくびれ、それより上が外反気味に外傾、体部下半が内弯気味となる。くびれ直下にエ字状文(文様d_3)がみられ体部下半に縄文が施されている。

C_{II}類は口縁部から体部まで外傾し、平口縁である。口縁部は単に外反気味のもの(C_{II1})、内弯気味のもの(C_{IIiii})とがある。文様にはC_{IIi}類に変形エ字文 (b_1)、平行沈線文(g)、一条の沈線文(h)が、C_{IIiii}類に変形エ字文 (b_1)、長楕円文(e_2)がみられ、変形エ字文(b_1)が特徴的である。C_{IIi}では文様帯以下に縄文が施されており、C_{IIiii}類は無文である。

なお、体部資料には変形エ字文と縄文を地文とした鋸歯状文が上下に配された文様(e_1)のみられるものが1点ある。

〈高坏形土器〉

45点、24%を占める。A_I類22点、A_{II}類22点、B類1点である。

A_I類は口頸部が屈曲して波状口縁を呈し突起がつくもので、突起頂部が肥大するもの、二又、三又になるものと単なる山形のものがある。文様は変形エ字文(a_2・b_2・c_3)がみられ、文様(b)が多い。縄文が施されることはない。

A_{II}類は口頸部が屈曲して平口縁を成す。突起はつかない。文様は変形エ字文(a_1)と二段の平行沈線文(g)がみられ後者が多い。文様帯以下には縄文が施されている。

B類は口縁部、体部が単に外傾するもので、低い山形の突起がつく。文様全体は不明であるが弧状の沈線と充填縄文手法とによって描かれており、口縁部内面にも縄文が施されている。この土器は色調が灰白色を呈して･暗褐色・赤褐色を呈したB類以外すべての土器との間に違いがあり、文様施文技法(充填縄文手法)も異ることから異質なものである。

高坏台部…台部は27点出土しており、坏部の$^3/_5$にあたる量である。いずれも大きく、形態はわずかなふくらみをもつものと直線的なものがあって前者が多い。文様は変形エ字文(b_1)、波状文(f_1)、多段の平行沈線文(g)がみられる。波状文と平行沈線文がほぼ同数で、全体の大半を占める。縄文が施されることはない。波状文には窓の開いたものもある。

高坏形土器では坏部と台部の接合資料が少く、その組み合わせは不明であるが、坏体部と台部の接合したもの(第17図102)では坏部に変形エ字文(a)と思われる文様が、台部には波状文(f_1)が施されている。

〈壷形土器〉

12点、7%を占める。大形のものはなく、いずれも中・小形である。個々に形態が異る。口

頸部に平行沈線文(h)のみられるもの、無文のものがあり、体部は縄文あるいは無文である。

〈壷形土器〉

12点、7%を占める。かさ形(A類)と台付鉢形(B類)とがあり後者が大半である。A類には縄文を地文とした変形エ字状文(c_2)が施文されている。B類は縄文が施されている。

各器種の土器にみられる縄文は、深鉢形土器C_{II}類に1点Rがみられるだけで、他はすべてLRである。

また、文様が施文されている土器には丹塗りの痕跡の認められるものがある。さらに、浅鉢形土器A類のうち2点にはスス状の炭化物が付着している。

(16)土器の年代

イ　第1グループの土器の年代

第1グループの土器はその特徴から弥生時代初頭の大泉式(伊東：1956)に比定される。大泉式は設定の時点では縄文時代晩期大洞A'式との関連が明確でなかったが、その後、山王遺跡の発掘成果から大泉式の一部に含まれていたものとして山王Ⅲ層式が設定され、大泉式と大洞A'式が識別された。

本遺跡出土の第1グループの土器群は、山王Ⅲ層式と類似点をもち、またそれより古い要案をもみられる。したがって大洞A式、山王Ⅲ層式の両型式との比較を行いたい。宮城県北部で同時期の良好な資料を出土している遺跡としては青木畑遺跡と同町内にある山王遺跡があげられる。したがってまず山王遺跡の内容と比較検討する。

山王遺跡は、青木畑遺跡の東方約4.5kmに位置する。その立地は青木畑遺跡と同様に北上川の一支流である一迫川左岸の自然堤防上であり、後背地に泥炭層が形成され、晩期中葉から弥生時代初頭にかけての遺物が多量に出土している。そして第Ⅲ層出土土器(山王Ⅲ層式)は第Ⅳ層出土土器(大洞A式)と間層をはさんで層位的に区別されている（須藤：1973、伊東：1974）。

本遺跡第1グループと山王遺跡出土土器を比較すると次のようになる。[注]

①　胎土・色調…山王Ⅳ層には胎土に金色の雲母を含むが山王Ⅳ層、青木畑の土器にはみられない。色調は山王Ⅳ層青木畑が暗褐色を主とし、山王Ⅲ層は黄褐色を主とする。

②　器形と文様

深鉢型土器…A・B類は山王Ⅳ・Ⅲ層にみられない。C・D類の器形・体部にLR縄文が施されることはほぼ三者に共通するが、口縁部形態に違いがみられる。小波状口縁、頂部二叉

注　山王遺跡第Ⅲ・Ⅳ層の出土土器については東北大学助教授須藤隆氏のご教示によるところが大きい。

の突起は青木畑、山王Ⅳ層にあり、山王Ⅲ層では大きな波状口縁となり、突起は頂部が二又にならない。また文様では山王Ⅲ層には口縁部や肩部にエ字状文などの施文されるものがあるが、青木畑、山王Ⅲ層ではまれに一条の沈線、平行沈線がめぐる。

浅鉢形土器…A類は基本的な特徴は山王Ⅳ層に共通するが口頸部の屈曲はゆるやかなものになっている。文様でもA類には頸部に平行沈線文、一条の沈線文の施文されるものが多くエ字状文は少いが、山王Ⅳ層では「π」字状のエ字状文が多く、類似したエ字状文ではあってもA類のエ字状文(b_2)は彫去された部分が不整で「π」字状を成していない。B類の器形は山王Ⅳ・Ⅲ層にみられる「丸底鉢」に該当すると思われるが、量が少いため比較は困難である。$C_{\mathrm{II}i}$類の体部から口縁部への立ち上がりは山王Ⅳ・Ⅲ層と同様である。口縁部の突起は山王Ⅳ層では頂部二又の山形突起がみられ、$C_{\mathrm{II}i}$類に付くものは間が離れた小突起である。山王Ⅲ層には頂部の二又にならない低い山形突起がみられる。文様は山王Ⅳ層では交点に彫去、粘土粒貼付のみられる変形エ字文が、$C_{\mathrm{II}I}$類では反転する沈線による変形エ字文が主体である。山王Ⅲ層では磨消縄文手法の用いられたエ字状文が主体を成し、沈線だけによる変形エ字文、波状文がみられる。この沈線だけで構成される変形エ字文は$C_{\mathrm{II}i}$類の文様b_1と文様構成は近似しているが、後者は平行沈線を連続させたように文様帯が狭く、前者では三角形状を成して広く描かれている。

$C_{\mathrm{II}iii}$類は個体教が少く器形の比較は困難であるが、施文されている文様のなかでb_1についてはC$_{\mathrm{II}ii}$類と同様なことが想定される。

高坏形土器…A類は山王Ⅳ層との間で器形はほぼ共通するが、口頸部の屈曲がゆるやかであり、突起も低い山形のものだけである。文様は山王Ⅳ層では浅鉢と同様に彫去、粘土粒貼付のみられる変形エ字文が主体を成し、青木畑A類では山王Ⅳ層類似の変形エ字文(a)は少く反転した沈線が入り組む変形エ字文($b_{2.3}$)が主体を成す。また前者の変形エ字文でも、青木畑遺跡では斜行する沈線が上下の平行沈線まで達して三角形状となるのに対し、山王Ⅳ層では斜行沈線が中位でも交叉して菱形状を成すという文様構成の違いがある。山王Ⅲ層には波状文の施文されたものがある。B類に類する器形は山王Ⅳ層にみられない。突起の存在を除けば山王Ⅲ層にあるが、文様施文技法は異っており、青木畑B類は充填縄文手法が、山王Ⅲ層では磨消縄文手法(縄文→沈線→磨消し)が用いられている。また山王Ⅳ層、青木畑になく山王Ⅲ層にみられる器形として体中央部で屈曲する類、坏部全体が直線的に広がる類とがある。

台　　部…山王Ⅳ層では台部が小さく裾の開きが大きい。青木畑、山王Ⅲ層では大きく筒状を成し、裾の開きは小さい。文様は青木畑で変形エ字文、波状文、平行沈線文がみられて後二者が多く、山王Ⅲ層では波状文のみられるものがある。

なお、波状文は青木畑では高坏台部に限って施文され、二・三条1組であるのに対し、山王

Ⅲ層では高坏坏部、鉢、壺にもみられ、三・四条**1**組となる。

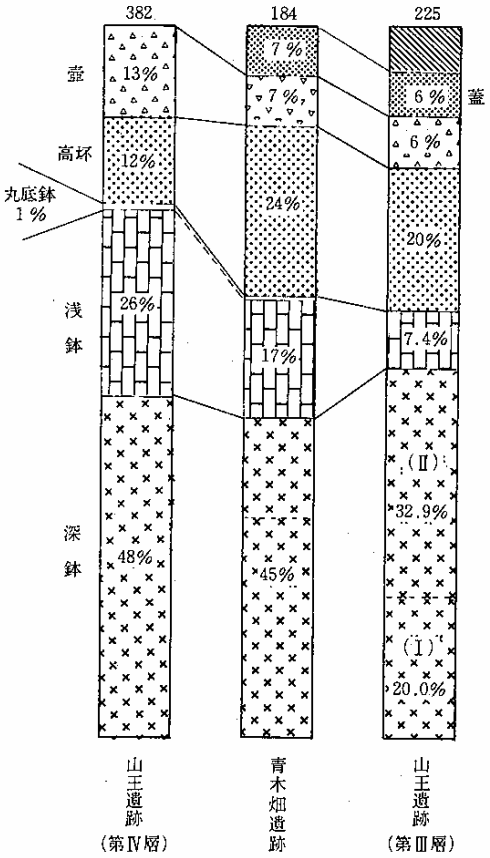
壺形土器…器形の比較は難しいが、青木畑第**19**図**126**などは山王Ⅳ層に近い形態であると推定される。また山王Ⅳ・Ⅲ層青木畑いずれにも大形の壺は認められない。文様は本遺跡に体部文様のある個体がみられないため比較できない。

蓋形土器…山王Ⅳ層には存在しない。また**A**類は山王Ⅲ層での存在は不明である。**B**類は形態的特徴がほぼ山王Ⅲ層のものと一致する。口径も**16**～**18**㎝が多く、山王Ⅲ層の**15**～**18**㎝と同様でまた両遺跡とも、それより小形のものが少量みられる。

③　土器組成

青木畑、山王Ⅳ・Ⅲ層について基本的な土器形態ごとの全体量に対する割合を示したものが、第**36**図である。これによると全体的な傾向として青木畑第**1**グループの土器組成が山王Ⅳ・Ⅲ層の中間的様相を示している。深鉢はほぼ同様の比率を示すが、他の器形では明らかな推移がうかがえる。山王Ⅳ層では高坏より多かった鉢(浅鉢)が減少し、青木畑遺跡では高坏より少くなり、山王Ⅲ層ではさらにこの傾向が強まる。高坏は青木畑遺跡で多く、山王Ⅲ層もほぼ同様である。壺は青木畑遺跡、山王Ⅲ層ともに少い。蓋は青木畑、山王Ⅲ層にほぼ同量みられ、壺の量ともほぼ一致する。

以上のように青木畑遺跡第1グループの土器と山王遺跡第Ⅳ・Ⅲ層との比較検討を行った。その結果、互いに類似性が認められるものの器形・文様いずれの特徴においても相異することが明らかとなった。



第36図　土器組成柱状図
(山王遺跡は須藤：1973より)

ロ　第2グループの土器の年代

表土出土、表採、地区層位不明の土器と、包含層出土であるがその特徴から除外しておいた土器である。

表土など…浅鉢形土器B類(b_2)、C_I類(j_1)、体部(j_3)

高坏形土器A_{I}類(a_3)、台部(f_2)

壺形土器文様c_1・d_1・j_4をもつもの

包含層出土で除外したもの…浅鉢形土器C_{IIii}(g)

これらのうち、浅鉢B類(b_2)、高坏A_{I}類(a_3)は第1グループの年代の項で認められた変遷を考慮すると第1グループに含まれ得る特徴を有している。また壺で文様c_1をもつものは、沈線が反転して横位に続き、彫去・粘土盛り上げをその一部に施しているもので、縄文が磨り消されている点を除けば蓋A類にみられる文様c_2と基本的に同じ構成の文様である。また山王Ⅲ層式には彫去の加えられたものは示されていない。したがって、これも第1グループの段階に含まれる可能性が強い。

浅鉢C_{I}類(j_1)、体部(j_3)、高坏台部(f_2)、壺(j_4)はいずれも曲線的な沈線文に充填縄文手法が用いられていることから東北地方南部との関連が考えられるが、時期を明らかにすることができない。

浅鉢C_{IIii}(g)は口縁部の特徴が桝形図式に近い。事故的に包含層に混入したものであろう。

ハ　弥生土器の問題点

前述のように第1グループの土器は山王Ⅲ層式の前段階に位置付けることができ、またその変遷過程からすると磨消縄文(縄文→すりけし)技法の用いられた壺形土器などをも含めた組み合わせとして把握される。その内容は縄文時代晩期大洞A式から受けついだ要素を残しさらに次段階へ引き継がれる要素も生じている。また少量磨消縄文技法を用いた文様も認められ、土器群の特徴としては大泉式に比定されながらもその初期のものと考えられる。

一方、岩手県南部においては谷起島遺跡の1976年発掘の土器A類(林・小野田：1977)は本遺跡の土器群に、沼ノ上遺跡出土土器(伊藤鉄夫：1973)は山王Ⅲ層式にそれぞれ強い類似性が認められることから、宮城県北部から岩手県南部の北上川中・下流域においては同様の変遷がみられそうである。

したがってこれらの土器群が大泉式の細分につながるものかどうかが問題となるが、この点については前述のように変遷過程が土器群全体の組み合わせとしては理解できるものの、器形・文様等の個々の要素では共通するものもみられるのであり、それをもって一型式とするには概念規定が困難であると考えられる。さらに当該地域においては大洞A式にしろ山王Ⅲ層式にしろ基準となるべき資料全体が公表されていない現時点では、大泉式内における変遷の第1段階にあたるものとしておきたい。

なお近接する時期のものとして福浦島下層式がある。福浦島下層式は福浦島貝塚下層出土の土器を標式として設定され、縄文時代晩期の最終末に位置付けられたのであるが、調査者である山内清男による資料の公表が行なわれておらず、また型式の概念も示されていない。その後

伊藤玄三は弥生時代の初頭のものとして概念規定を試みている(伊藤：1966)が、なお層位的な根拠のある土器群は示されていない。最近、伊東信雄は『宮城県史』(伊東：1981)の中で同型式を大泉式に含め、「山内の発掘で、おそらく福浦島下層式に当るものであろう」として6個の資料を示している。それをみると本遺跡の土器群と共通点も有しているが、口縁部形態や器形と文様の組み合わせに異る特徴をもち、明確な関係は不明である。

また本遺跡土器群中にみられた充填縄文手法を用いて文様が施文されている高坏形土器B類は、大泉式の初期としては宮城県内の縄文時代晩期からの系統からは生じ難いものであり、その手法が特徴的とされる東北地方南部との接触がうかがえる。

3．石器の年代

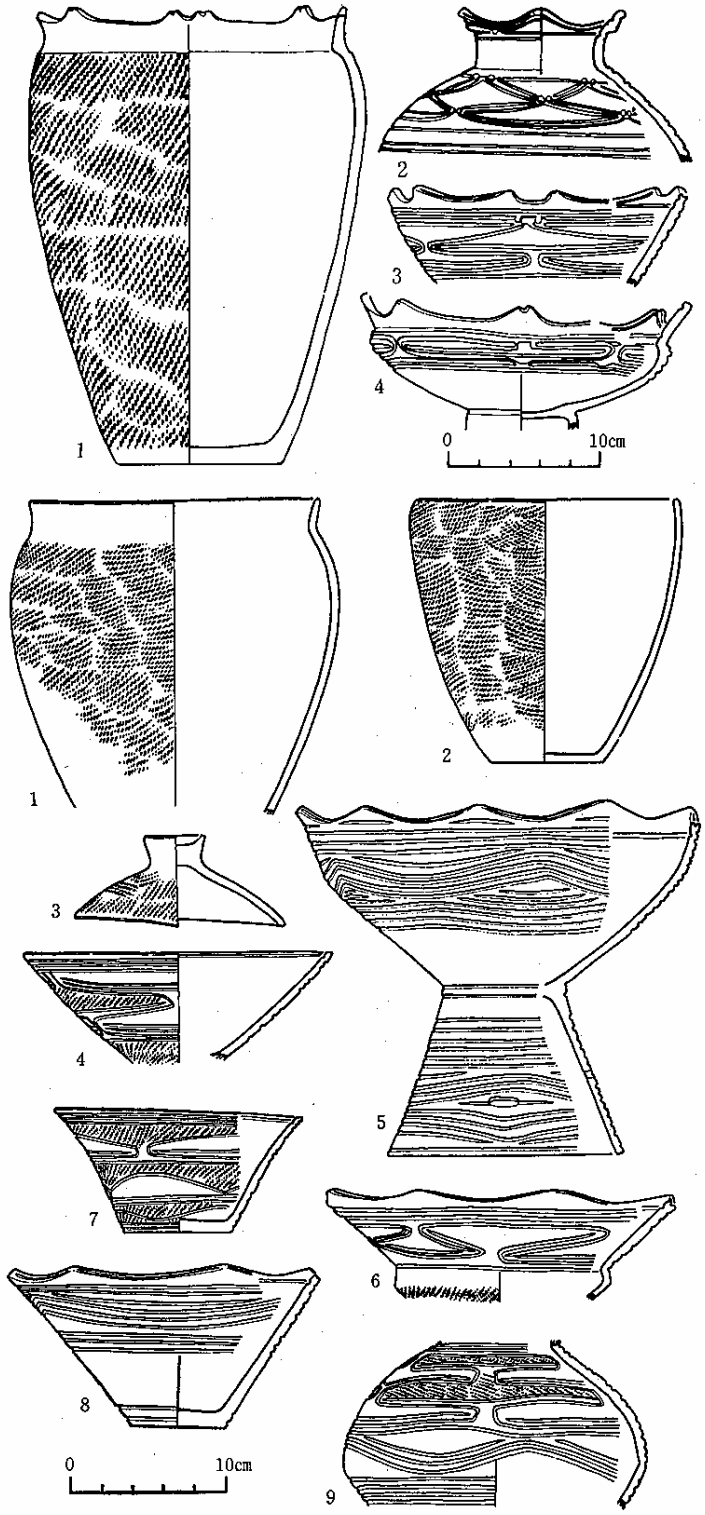
縄文時代・弥生時代の包含層から出土したものと表土出土のものがある。前二者はそれぞれ伴出した土器の年代－縄文時代後期初頭、弥生時代初頭に属するものである。いずれも全資料が保存されていないため、石器全体の内容は明らかにできない。縄文時代のものは同時期の例と同様の特徴をもつ。また、弥生時代のものは縄文時代晩期後半の様相とほとんど変化がなくまた、同時期の他遺跡でも大体似た傾向を示す。

表土出土のものは時期を限定できないが、石鏃は弥生時代の包含層出土品と何ら変わるところがない。

4．土偶の年代

土偶は4点出土しており、包含層から3点、表土から1点である。包含層出土のものは、土器の年代からみて弥生時代初頭に属する。同時代の類例は少く比較できない。晩期末葉の土偶にみられるような頭頂部の烏帽子状の突起はなく、顔面の隆線上全体、背にみられた細かな刺突は眉に限定され、背の刺突は竹管による大きなものになる。晩期にみられないものとして髪に細かな刺突が施されている。胴の文様は簡略で沈線が引かれるだけである。

表土出土の1点は共伴する土器が不明なため時期が特定し難いが、表土出土の土器の大半が弥生時代初頭のものであることを考慮すれば同時期に属する可能性が強い。



第37図　山王遺跡第Ⅲ・Ⅳ層出土土器（須藤：1973　第8・9図より）

Ⅴ　調査以前の採集遺物

これらの遺物は、県教育委員会による調査に先立って行われた予備調査の際などに、敬三塚信一氏、佐藤信行氏によって採集されたものである。承諾をいただいてここに掲載した。

土器

〈深鉢形土器〉　(1・2)

1は2より小形であり、体上部がふくらんで、その下部と頸部が屈曲する。口縁部は外反して、頂部の二分した低い山形突起がつく。体部のふくらんだ部分には縄文(LR)を地文として、上下を沈線で区切り、一条の沈線による鋸歯状文が施文されている。2は口頸部がくびれて外傾し、体部は内弯気味に立ち上がる。口縁部は無文、体部に縄文(LR)が施されている。

〈浅鉢形土器〉　(3～10)

3は他より大形である。口頸部はくびれて外傾し、2個1対の山形突起がつく。体上部は内弯する。肩部に平行沈線の一部を彫去して両側に盛り上げたエ字状文が6単位みられ、それ以下は縄文(LR)が施されている。

4は体部中央でくびれる。体部上半から口縁部は外反し、体部下半は内弯気味である。口縁部の文様は全体が不明である。体部には反転する沈線が入り組んだエ字状文がみられる。

5～8は、口縁部・体部が一様に外反する。5は低い突起がつく。5・6は上下を沈線で区画し反転する沈線とその中に一条の沈線を加えた変形エ字文がみられる。文様は3単位である。体部下端には縄文(LR)が施されている。

7は全体に文様がみられ、口縁部には平行沈線の一部を彫去したエ字状文が、体部には長楕円形の文様が3段に施文されている。

8は他より体部の外反の度合が強い。上下を平行沈線で区画し、斜行する二条1組の沈線によって菱形の文様が描かれている。文様は4単位である。体部下端に縄文(LR)が施されている。

9は口縁部、体部が直線的に外傾する。上半に変形エ字文がみられる。上下を横位沈線で区画し、斜行する沈線を反転させて扁平な菱形状に近い三角形にしてその中と、上位区画線に沿った沈線を加える。さらに区画沈線との交点と加えた沈線の中央を彫去して両側に盛り上げている。下半には縄文(LR)を地文として平行沈線がみられ、沈線間は磨消している。文様は3単位である。

10は口縁部、体部が内弯気味に外傾する。縄文(LR)が施されている。

鉢形土器は、口縁部内面に10を除いてすべて一条の沈線が巡る。また3～6・9の沈緑内には丹塗りの痕跡が認められ、5の底部には木葉痕が部分的に残っている。

〈高坏形土器〉

11は口頸部がくびれて外反し、波状口縁で突起がつく。突起は頂部を円盤状に肥大させたものと、頂部が二分した山形とが対を成す。突起頂部を斜き口縁部上端に沈線が引かれている。体部上半に文様がある。上下を沈線で区画し変形エ字文を描いている。反転する沈線によって扁平な三角形をつくり、その中に一条の沈線を加え、三角形の頂部交点を彫去し両側に盛り上げている。脚部はわずかなふくらみをもって開く。平行沈線で区画した。二条1組の沈線による波状文が2段みられる。下段の波底に対応して窓が3個ある。坏部文様は4単位、脚部文様は3単位である。

12は11と同様の器形であるが突起を欠いている。体部上半に文様がみられ、変形エ字文が描かれている。上下を沈線で区画し、斜行する一条の沈線によって扁平な三角形をつくり、その交点を彫去して両側に盛り上げている。文様は3単位、沈線内丹塗りの痕跡がみられる。

13は口頸部がくびれて外傾し、突起はつかない。体部上半には平行沈線が2段にみられる。体部下半に縄文(LR)が施されている。

14は体部中央がくびれる。それより上下位とも直線的に外傾する。口縁部、くびれ部に三条の平行沈線がみられ体部下半に縄文(LR)が施されている。

15は13に類した器形で、反転する沈線が入り組んだ変形エ字文が描かれている。

16は脚部片である。三条1組の沈線による波状文がみられる。

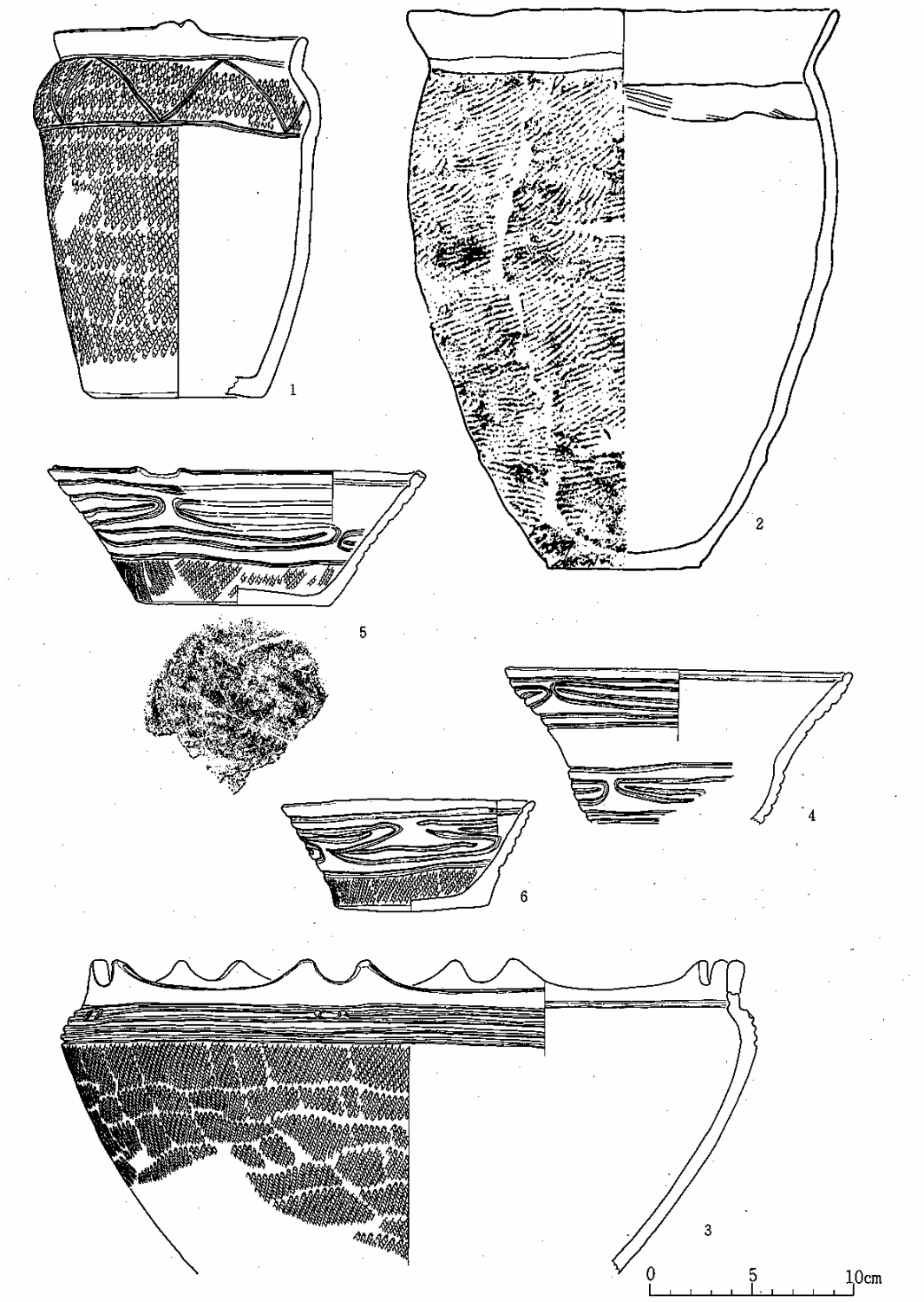
なお、このほかに壺形土器の体部破片で、体上部でするどく曲がり、逆「く」字状を呈し、体部上半には重層するエ字状文が、下半に縄文(LR)のみられるものがある。

土偶(17)

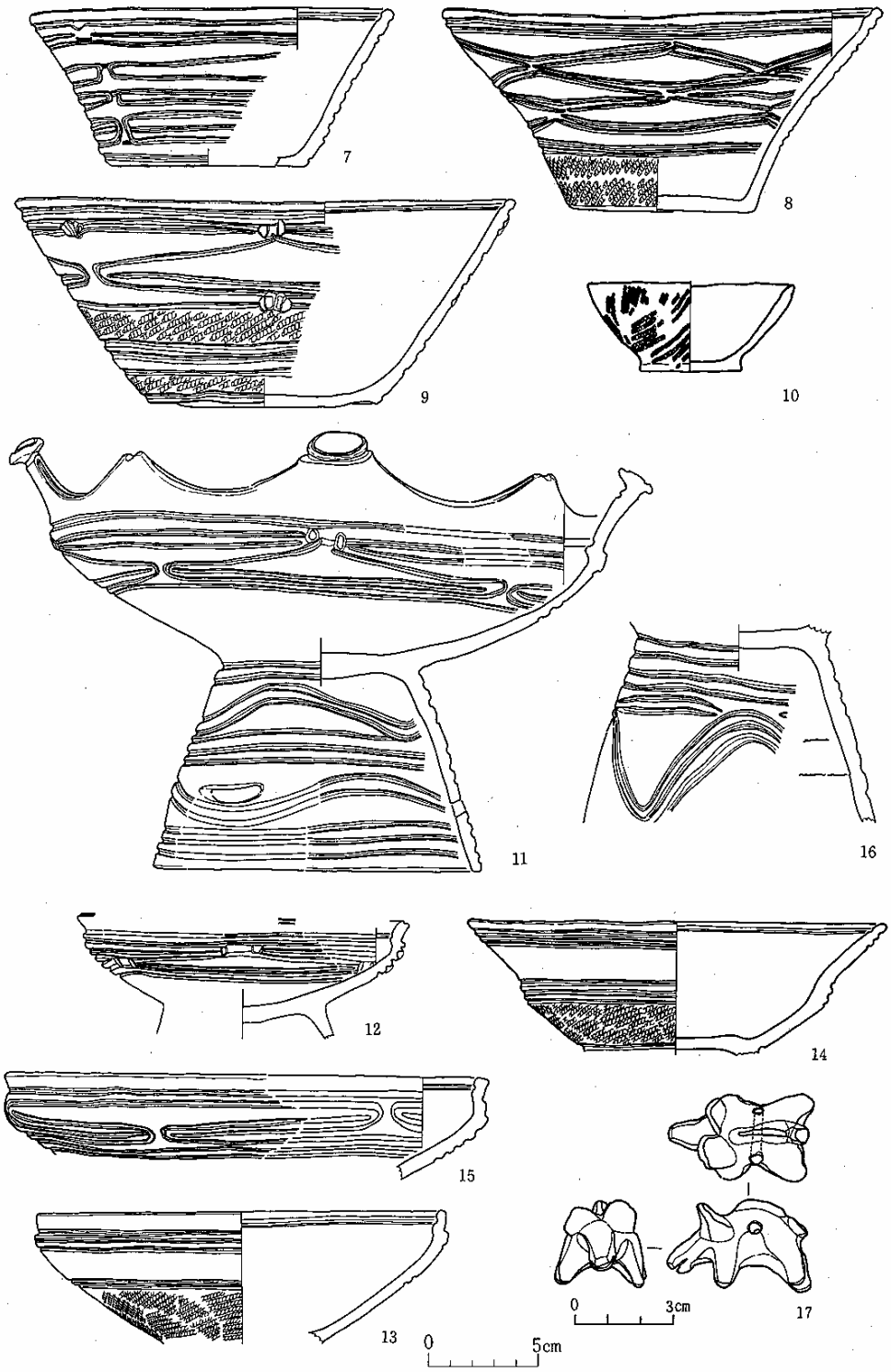
動物形土偶である。猪と思われるが耳が大きく判然としない。目は表現されず、鼻が長く、口が切り込まれている。脚は開いてふんばり、背には高まりがみられ、尾は太く小さい。胴には横に完通孔が西られ垂飾品と思われる。

これらの土器を中心として佐藤はすでに青木畑(式)を提称し、弥生時代初頭に位置付けている(佐藤：1981)。図示した土器を発掘調査の成果と比較すると、1・2、4～5、11～13・15・16は遺物包含層出土土器と特徴が共通しており同時期としてさしつかえないものと思われる。

このほかは関係を明確にできない。9は大洞A'式に属するものとされてきた(須藤：1973、佐藤：1981)。



第38図　調査以前の採集遺物（1）



第39図　調査以前の採集遺物（2）

Ⅵ　ま　と　め

1　本遺跡は宮城県の北西部に位置し、北上川の一支流である一迫川左岸の自然堤防上に立地している。

2　自然堤防上の微高地からゆるい斜面にかかる部分に縄文時代後期初頭、弥生時代初頭の遺物包含層が形成されている。

3　縄文時代の遺物包含層出土遺物は、現段階では袖窪式に比定されるとも考えられるが、なお、後期初頭の土器群については、土器群の内容把握と地域性の追求とによって細分の可能性を検討して位置付けを決定することが必要であろう。

4　基本層位第Ⅲ層からは、若干の縄文時代後期中葉(宝ヶ峰式)の土器が出土した。

5　弥生時代の遺物はそのほとんどが一つの組み合わせを成し、大泉式の初期に位置付けられるものと考えられ、大泉式には少くとも二段階の土器群の変遷が存在すると思われる。

　なお、土器・石器・土偶のいずれも縄文時代晩期からの伝統を強く残しているとみられ、弥生時代的な特徴はあまりなく、わずかに蓋形土器や小形深鉢形土器の存在が指適できるに過ぎない。

6　今回の調査では、上記3時期の遺構は発見されなかった。包含層の位置は微高地との関係でみると後背地ではなく、現在の川に面した方向に形成されている。したがって、今回の調査地点よりさらに南西側に遺構等の存在が予想される。

〈引用・参考文献〉

伊　東　信　雄(1956)：「宮城県古代史」宮城県史1

(1968)：「東北地方Ⅰ・Ⅱ」弥生式土器集成、本編2

(1974)：「弥生文化」水沢市史1

(1981)：「弥生時代」宮城県史34、史料葉Ⅴ考古資料

伊　藤　玄　三(1966)：「弥生文化の発展と地域性－東北」旧本の考古学Ⅲ

伊　藤　鉄　夫(1973)：「江刺市沼ノ上遺跡調査報告書」

一迫町教育委員会(1977)：「巻掘遺跡」

遠　藤　勝　博(1981)：「大渕遺跡」二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集

及川、小野寺　他(1972)：「堂の前貝塚」

及川・遠藤　他(1974)：「門前貝塚」

大和久　震　平(1974)：「手取清水遺跡発掘調査報告書」

小田野　哲憲他(1979)：「第2次谷起島遺跡発掘調査概報」

小野寺　祥一郎(1980)：「金取遺跡」宮城県文化財調査報告書第70集

加　藤　　孝(1968)：「宮古島貝塚寺下囲地区出土品にみられる弥生式文化」仙台湾周辺の考古学的研究

加藤・後藤　他(1975)：「登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」南方町史資料編第一部

木　本　元　治(1973)：「東北地方南部における初期弥生式土器について」福島考古第14号

楠　本　政　助(1973)：「先史」矢本町史第一巻

北上市教育委員会(1978)：「八天遺跡(図版編)」

(1979)：「八天遺跡(本文編)」

後　藤　勝　彦(1957)：「陸前宮古島里浜貝塚出土の土器編年について」塩釜市教育委員会教育論文第2集

(1962)：「陸前宮古島里浜台囲貝塚出土の土器について」考古学雑誌第48巻第1号

(1974)：「縄文後期宮古1b式周辺の吟味」東北の考古・歴史論集

興　野　義　一(1976)：「一迫町の歴史－原始期」一迫町史

佐　藤　庄　一(1978)：「東北南半における弥生式土器研究の現状」考古風土器3

佐　藤　信　行(1980)：「東北南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化(上)」考古風土記5

(1981)：「東北南部における紬文晩期終末とその直後の玉器文化(下)」考古風土器6

斎藤・高橋・真山(1980)：「宮沢遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ、宮城県文化財調査報告書第6集

志　間　奏　治(1971)：「鱸沼遺跡」

島　貫　金　雄(1972)：「東北南部(福島県)における縄文時代晩期終末期から初期弥生式への移行について」福島大学考古学研究会研究紀要第2冊

志　間・芳　賀(1974)：「柴田町の文化財－遺跡と遺物」柴田町の文化財第5集
白　　石　　市(1976)：「白石市史」別巻考古資料
須　藤　　隆(1970)：「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器、石器について」考古学雑誌第56巻2号
(1973)：「土器組成論」考古学研究第19巻第4号
(1976)：「亀ケ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」考古学研究第23巻第2号
鈴　木　隆　英(1979)：「大明神遺跡」東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅱ－岩手県文化財調査報告書34集
芹　沢　長　介(1960)：「石器時代の日本」
高　橋　義　介(1981)：「火付塚遺跡」二戸バイパス関連遺跡発掘調査親告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集
田中・柳沢　他(1981)：「仙台市大野田六反田遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第34集
鳥　畑　寿　夫(1955)：「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」上代文化25
中　村　五　郎(1976)：「東北地方南部の弥生式土器編年」東北考古挙の諸問題
丹　羽　　茂(1971)：「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」福島考古第12号
(1981)：「中期の土器－大木式土器」縄文文化の研究4縄文土器Ⅱ
林　　謙　作(1965)：「縄文文化の発展と地域性－東北－」日本の考古学Ⅱ
(1976)：「亀ケ岡文化論」東北考古学の諸問題
芳　賀　寿　幸(1976)：「鹿野遺跡」船迫ニュータウン地内遺跡調査報告柴田町文化財報告書第8集
林　・　小田野(1977)：「岩手県一関市萩荘谷起島遺跡第一次発掘調査報告書(LOC. A)」
馬　目　順　一(1968)：「綱取貝塚第四地点発見の堀之内Ⅰ式期土器の考察」小名浜－小名浜湾沿岸の遺跡調査報告集
三塚・阿部・佐藤(1976)：「沼津貝塚保存管理計画第定事業報告書」
宮城県教育委員会(1977)：「船渡前遺跡」宮城県文化財調査報告書第49集
(1981)：「宮城県遺跡地名表」－宮城県文化財調査報告書第73集
目　黒　吉　明(1962)：「福島県田村郡御代田遺跡について」東北考古学第3輯
目黒・柴田　地(1971)：「福島県石川町鳥内遺跡発掘調査概報」
山　内　清　男(1930)：「所謂亀ケ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」考古学第1巻第2号
(1937)：「縄文土器型式の細別と大別」先史考古学第1巻第1号、山内清男・先史考古学論文集・第1冊(1967)に再録

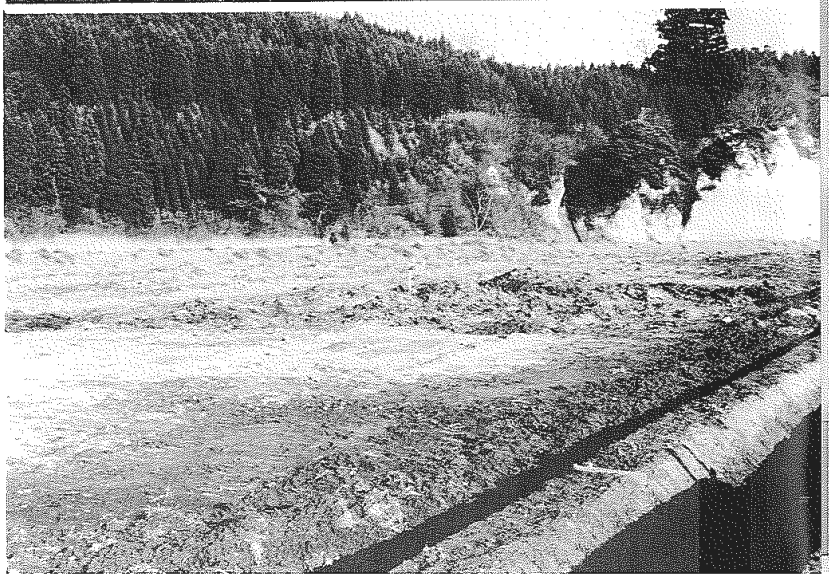
写　真　図　版

図版 1

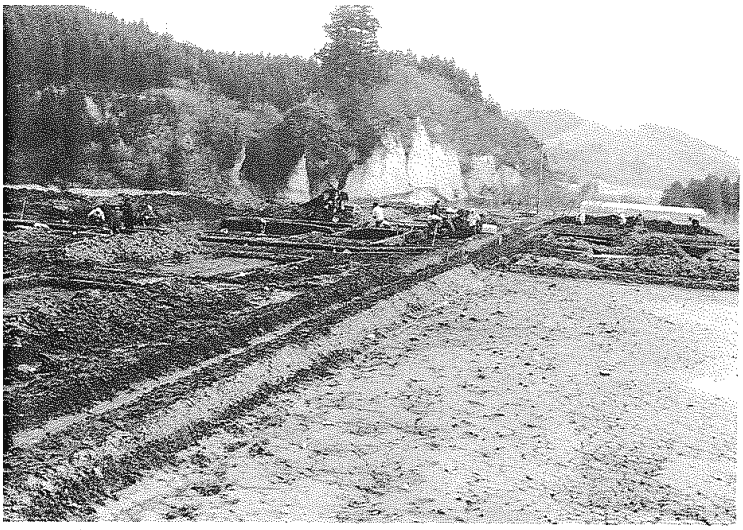
遠　景

近　景

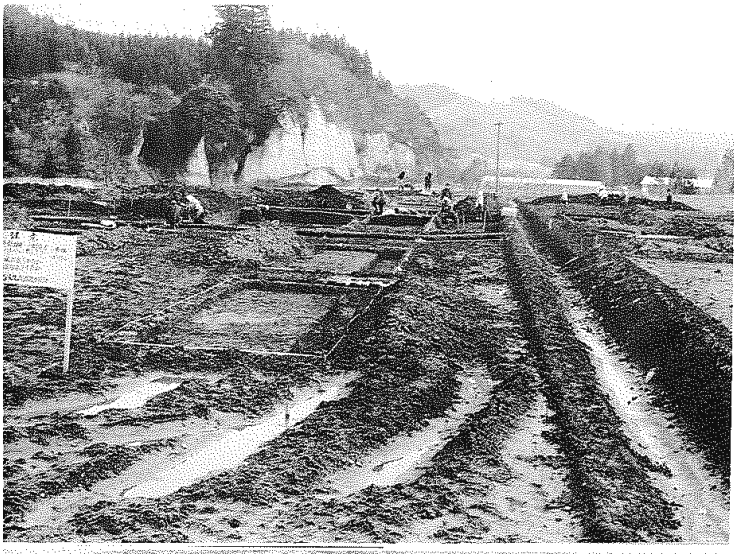
調査地点



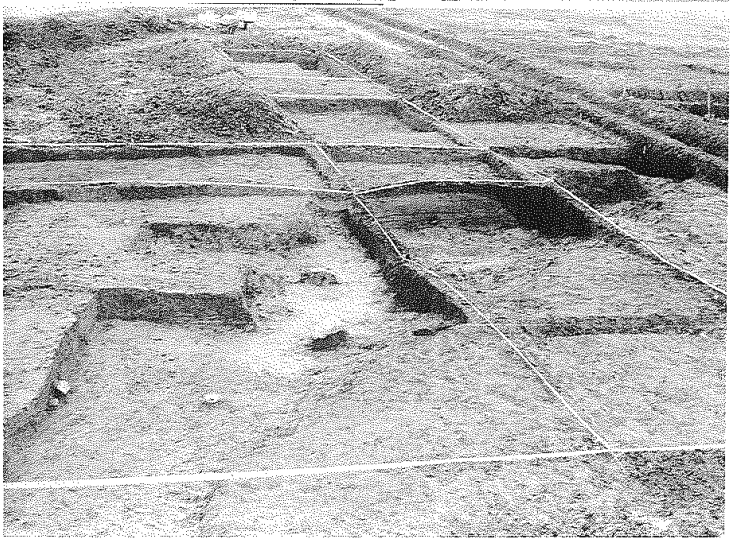
図版 2



発掘状況



発掘状況

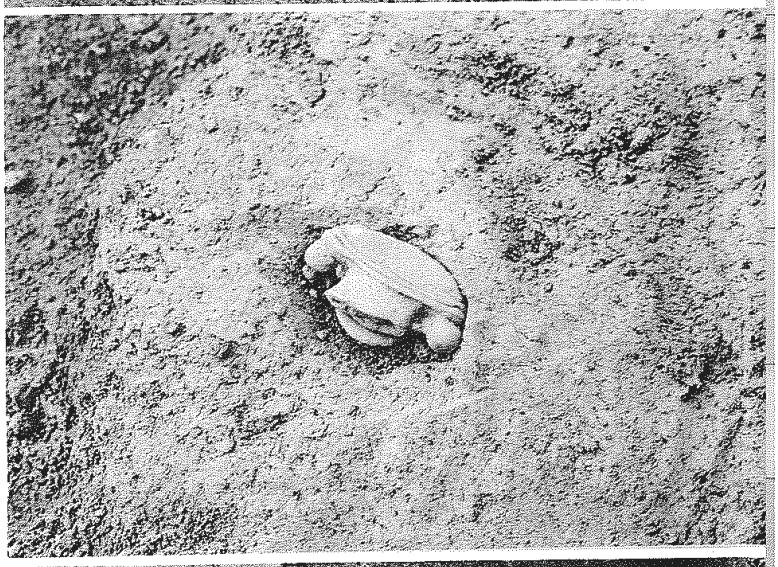


溝状落ち込み
(弥生時代の
包含層下)

図版 3

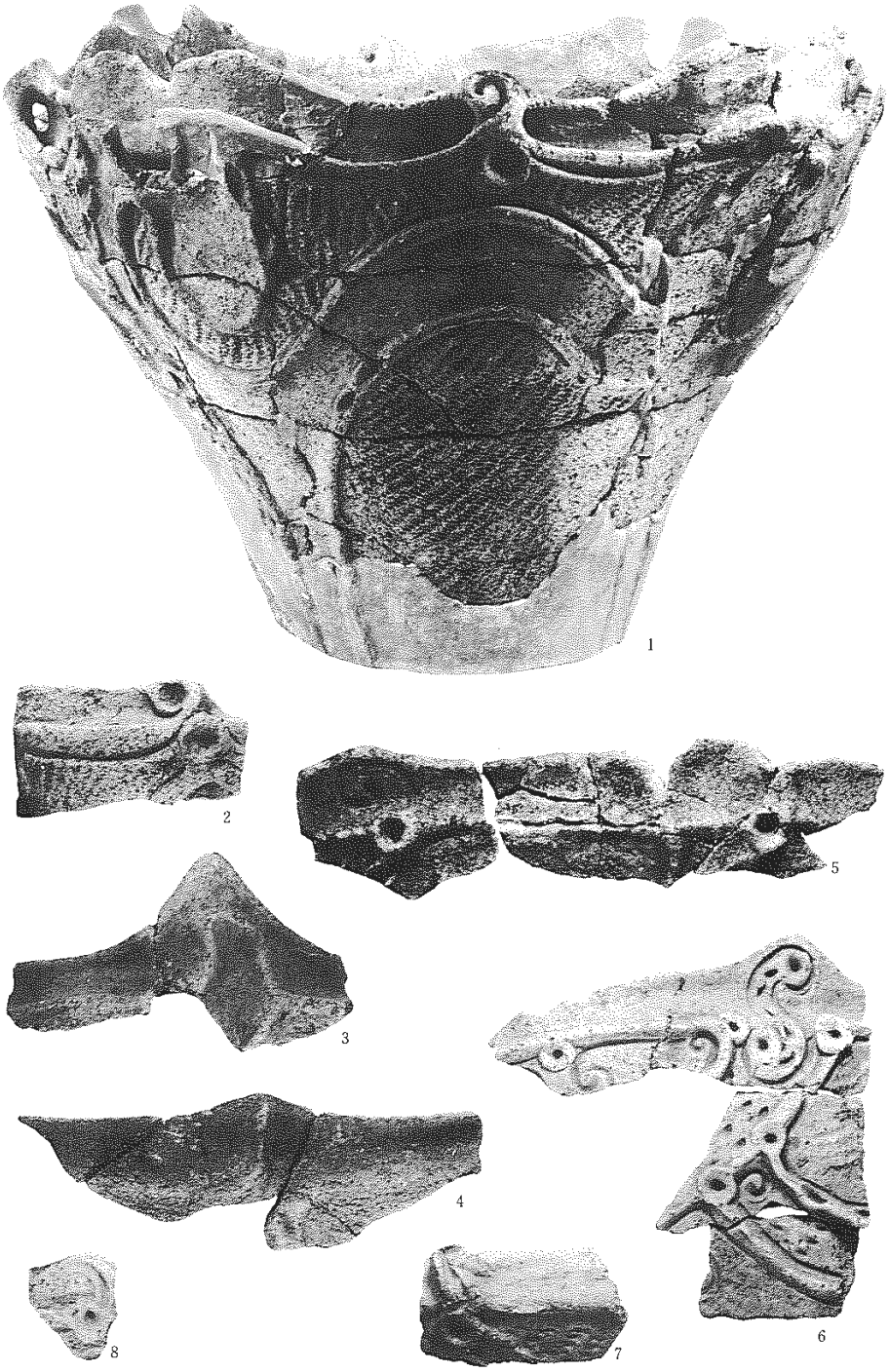
弥生時代の
包含層断面

土偶出土状況

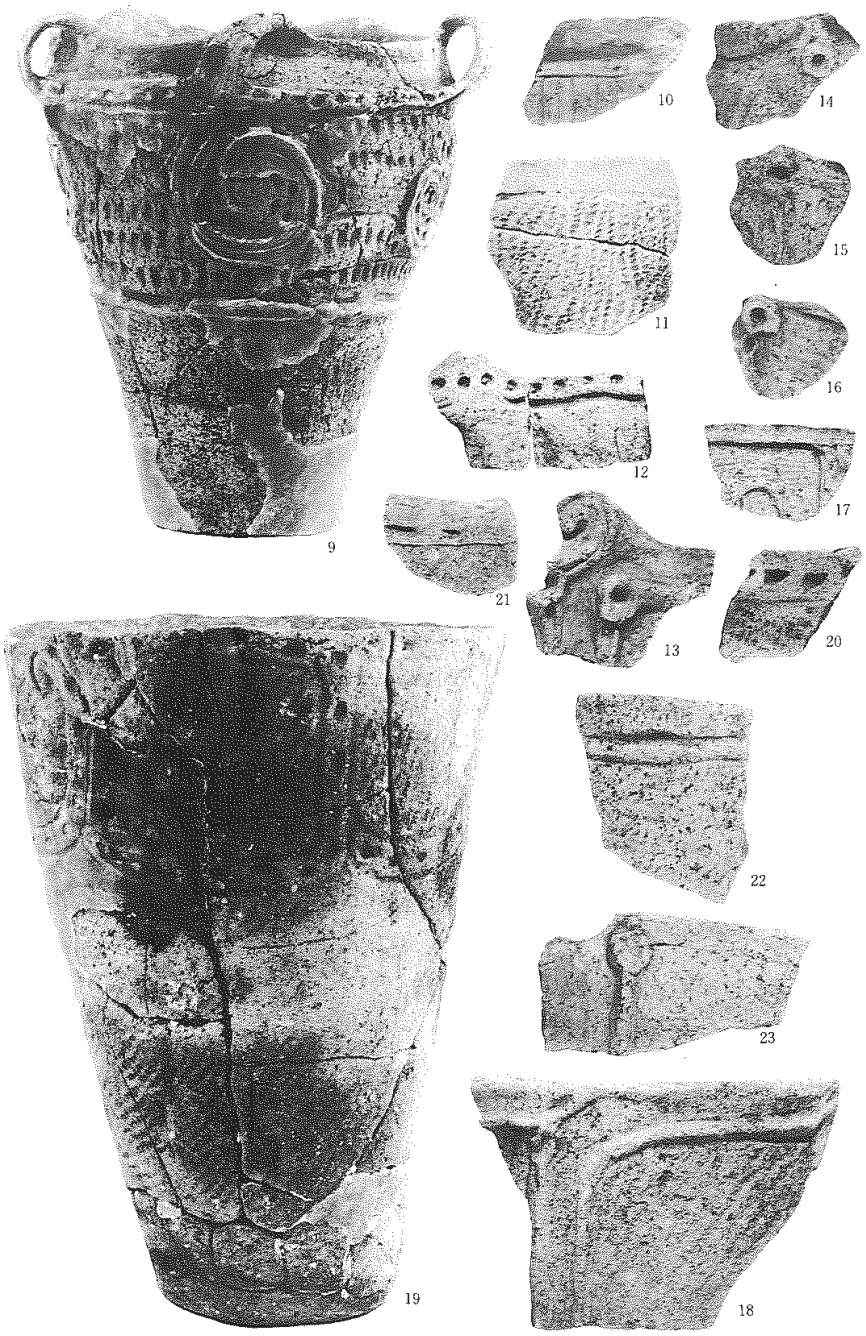


土器出土状況
(弥生時代の
包含層)

図版 4

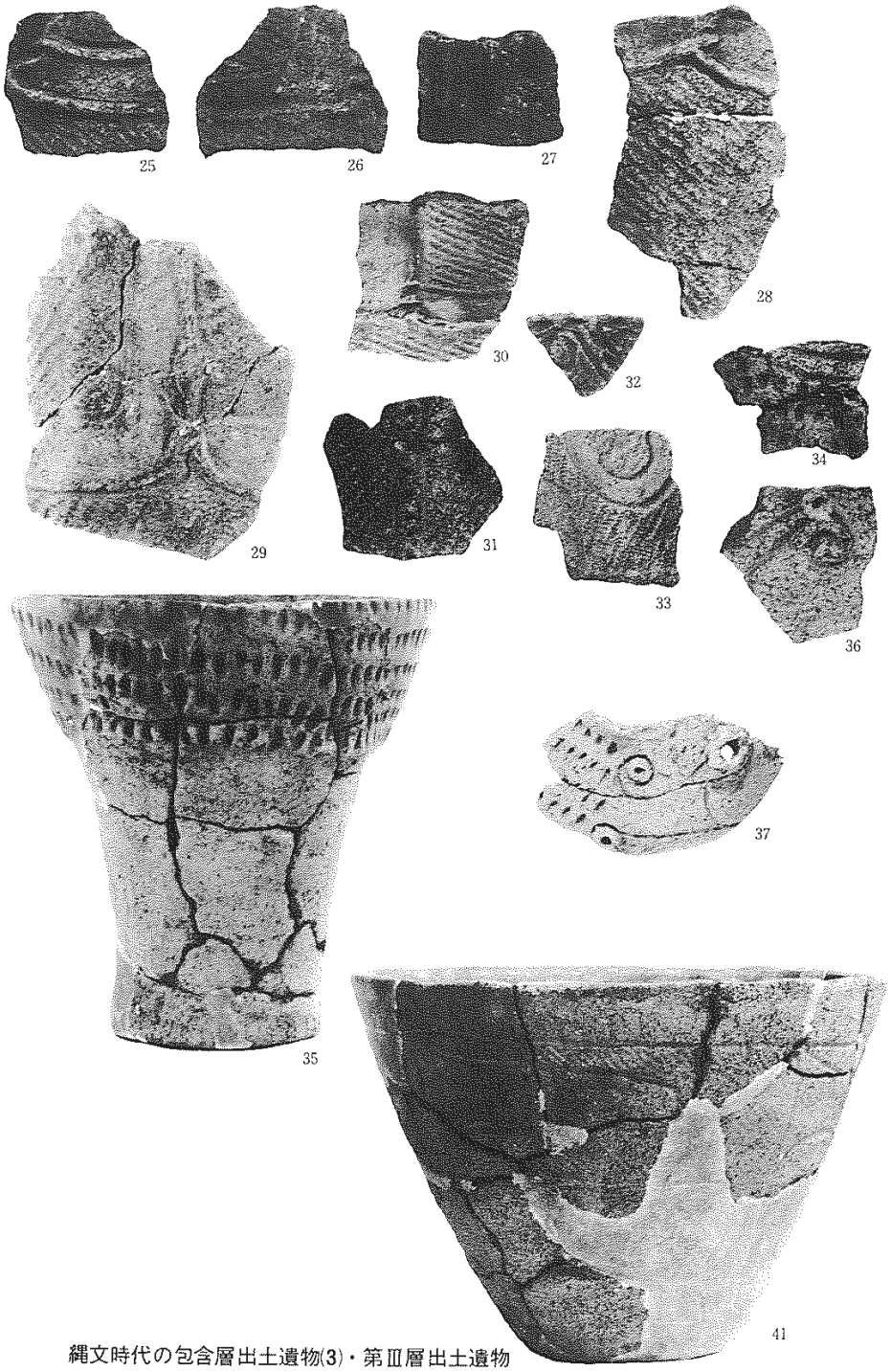


縄文時代の包含層出土遺物(1)　（遺物の番号は実測図番号と共通）



縄文時代の包含層出土遺物(2)

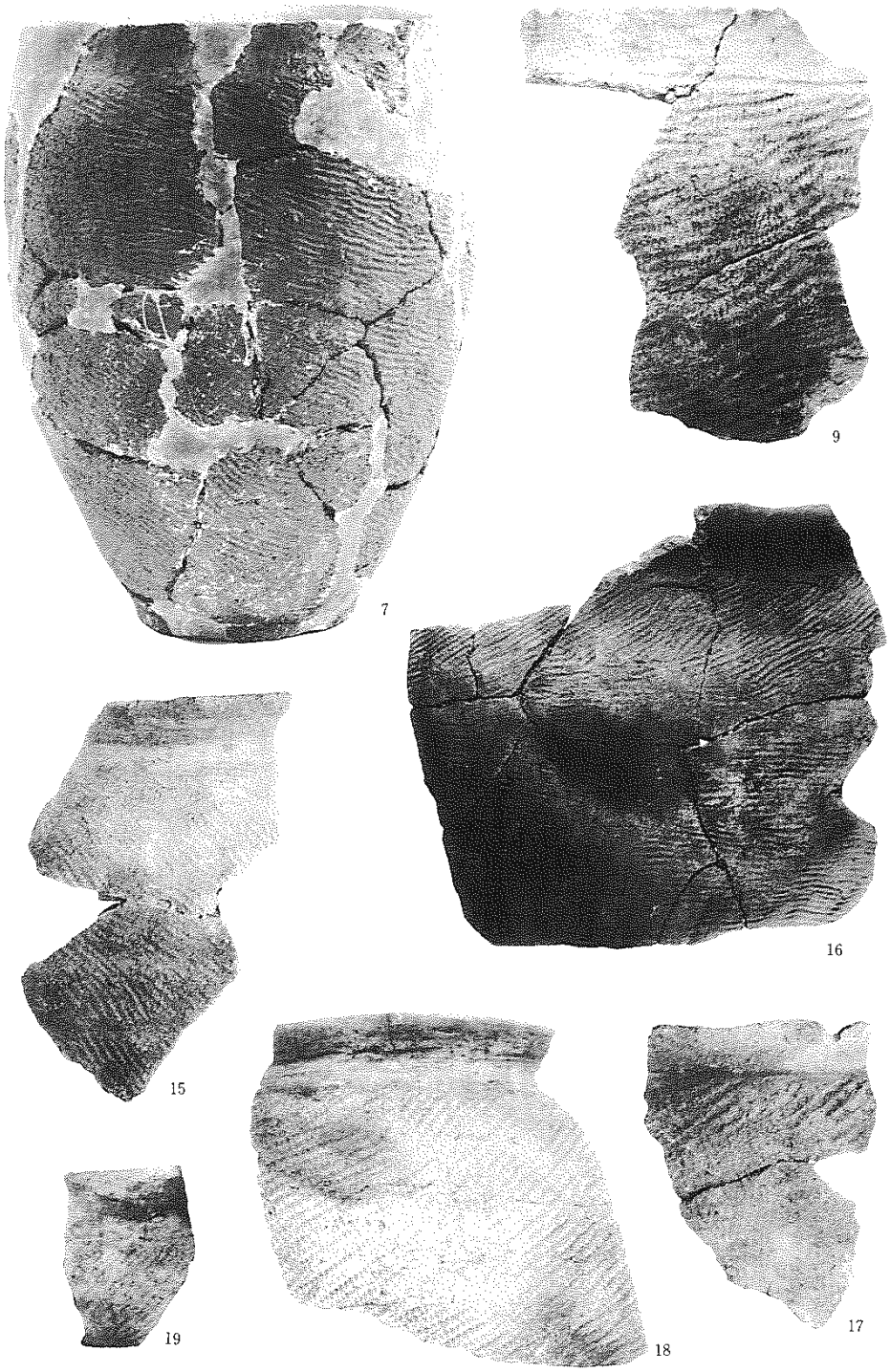
図版 6



縄文時代の包含層出土遺物(3)・第Ⅲ層出土遺物

弥生時代の包含層出土遺物(1)

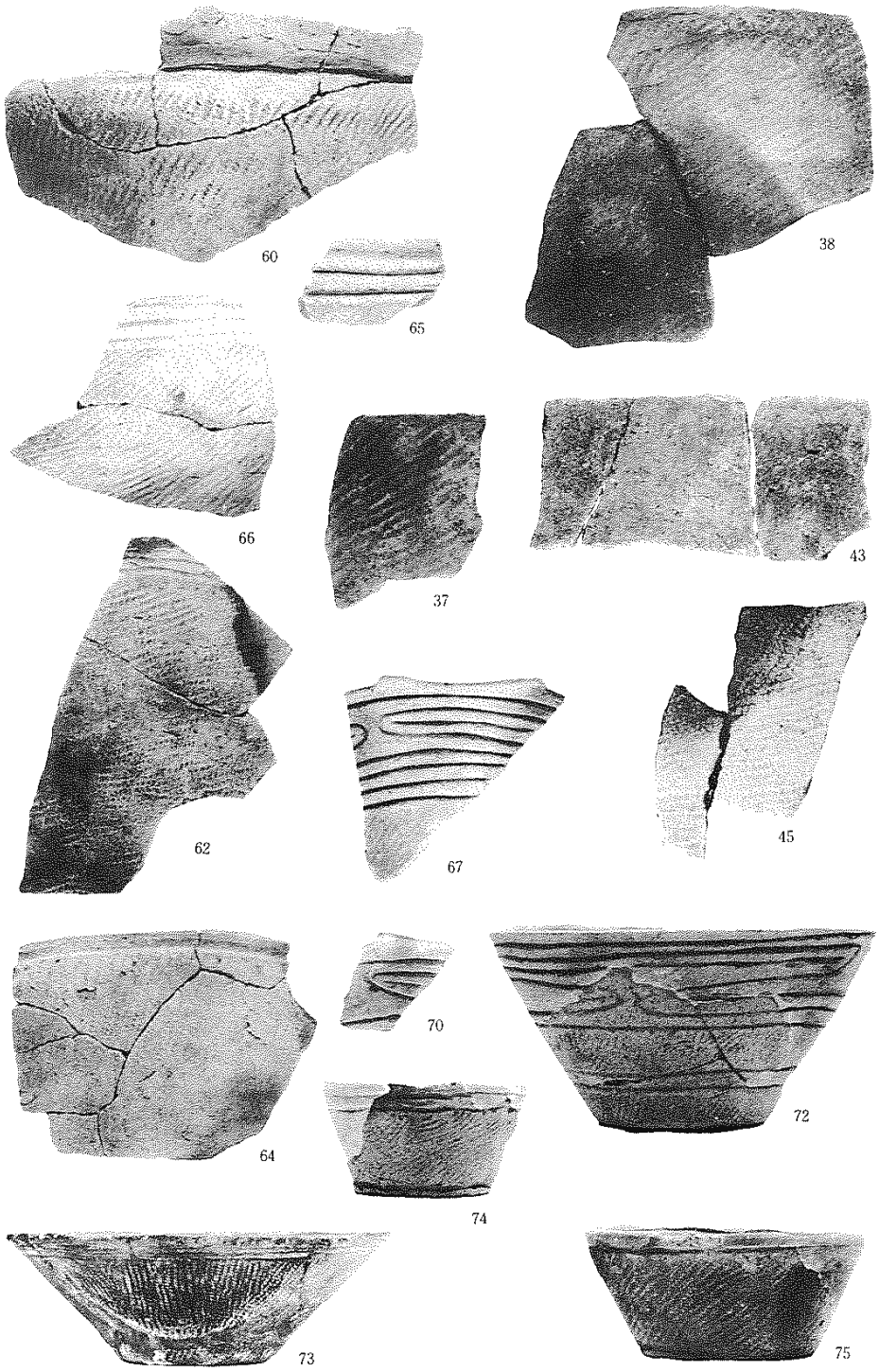
図版 8



弥生時代の包含層出土遺物(2)

弥生時代の包含層出土遺物(3)

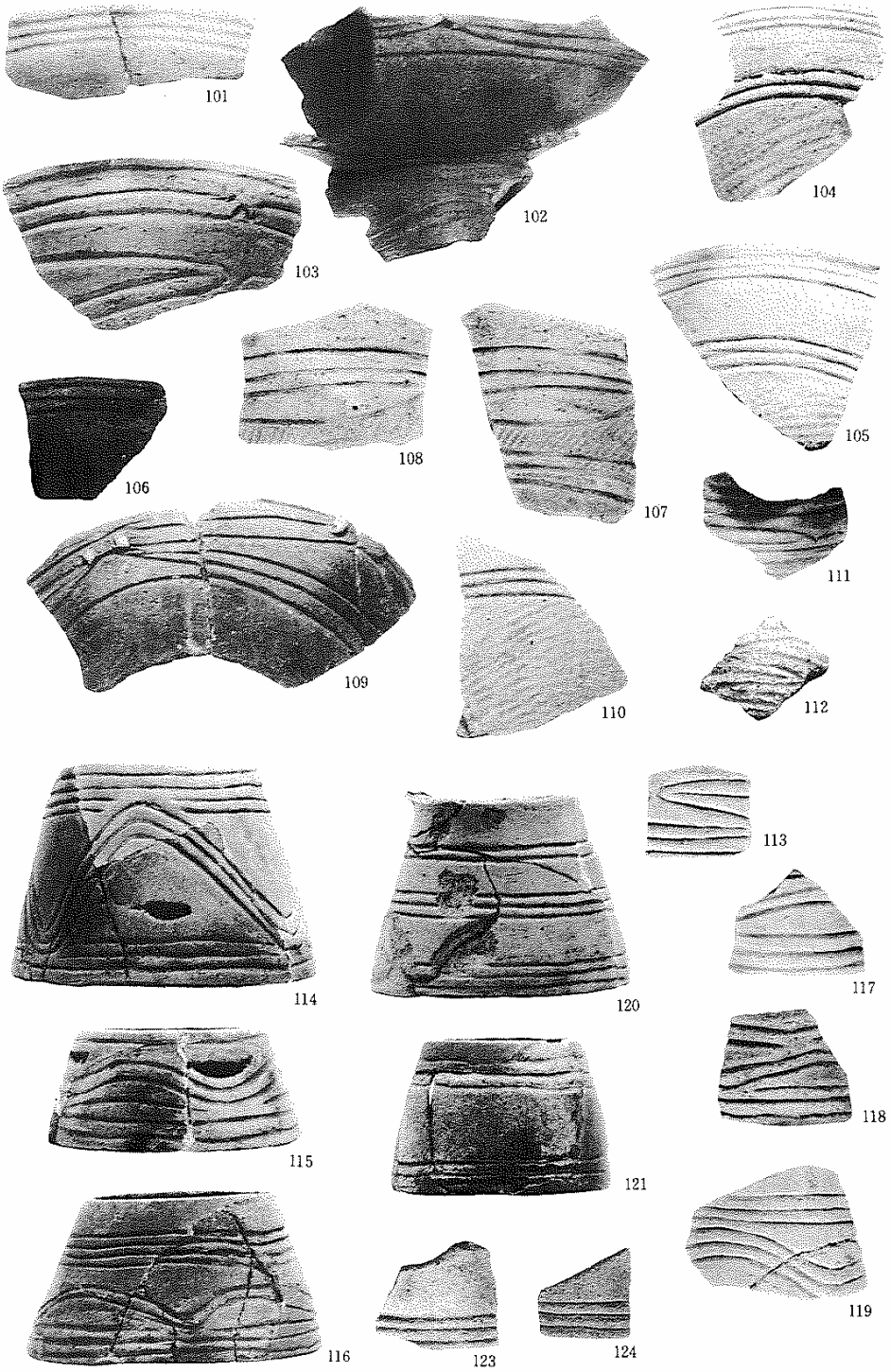
図版10



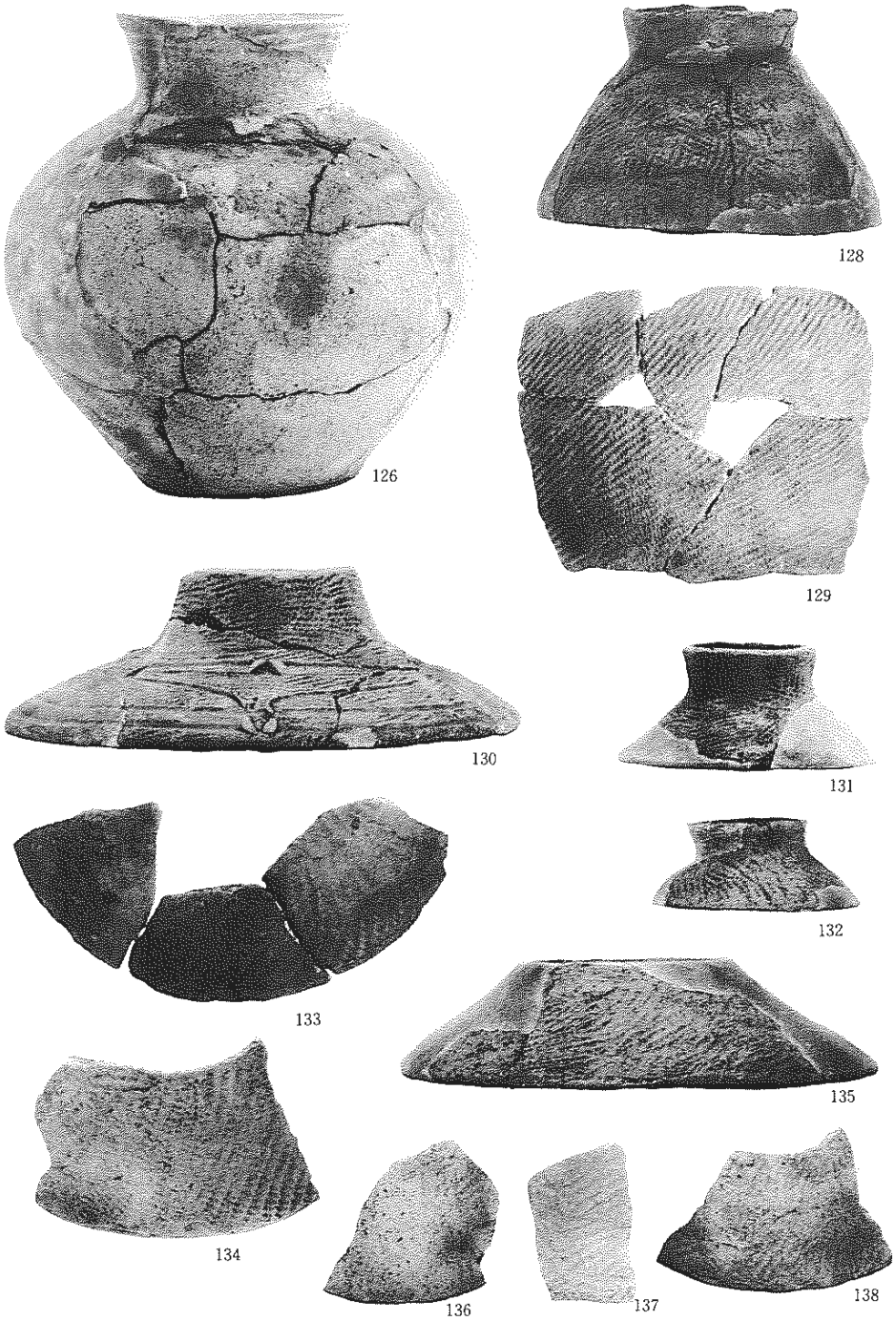
弥生時代の遺物包含層出土遺物(4)

弥生時代の遺物包含層出土遺物(5)

図版12

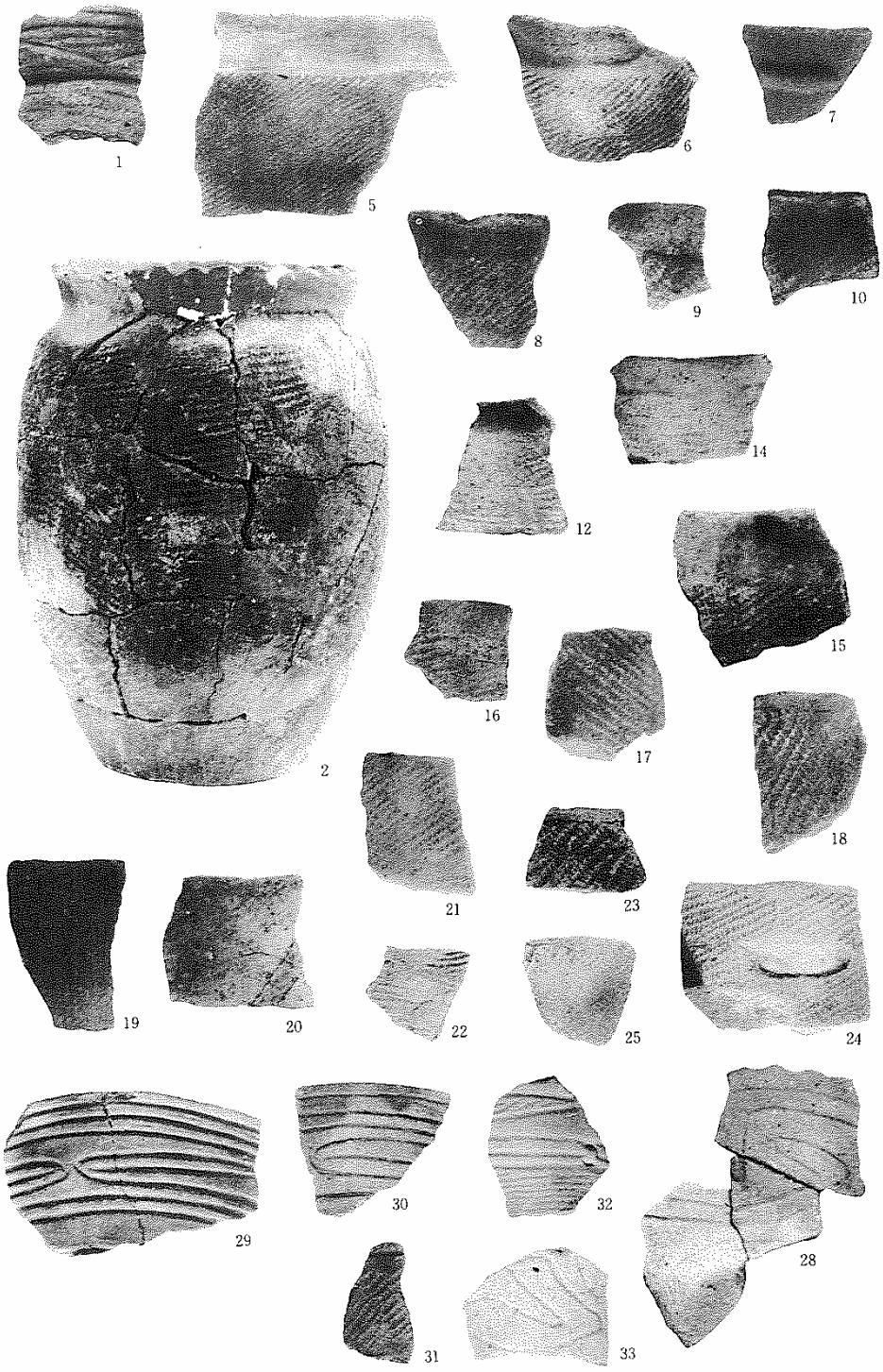


弥生時代の遺物包含層出土遺物(6)

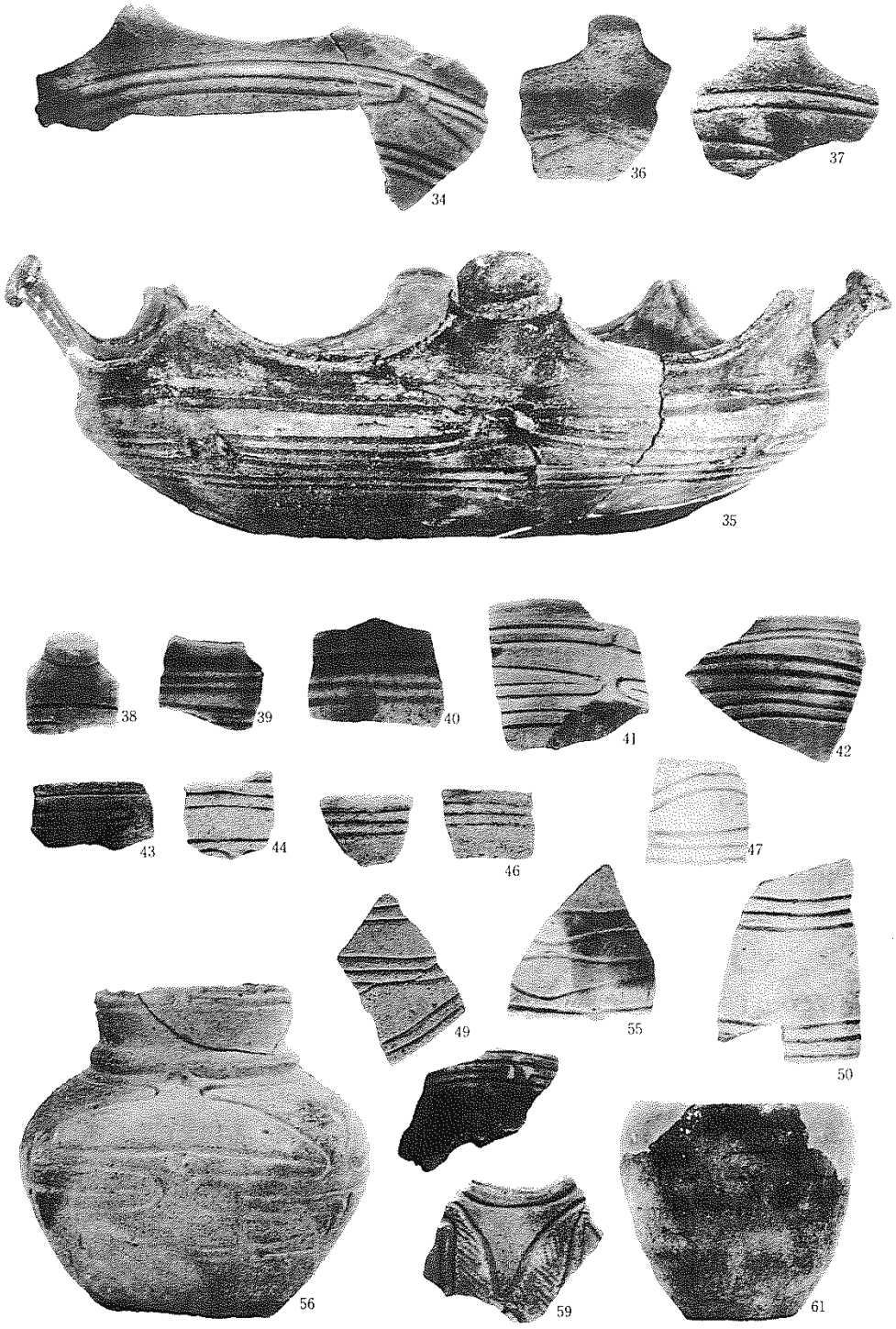


弥生時代の遺物包含層出土遺物(7)

図版14



表土・層位不明の出土遺物(1)



表土・層位不明の出土遺物(2)

図版16

土　　偶